

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所三十年のあゆみ：研究業績の紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001579

国立国語研究所 三十年のあゆみ

—研究業績の紹介—

1978

国立国語研究所 三十年のあゆみ 正誤表

第 I・II 部

ページ 行	誤	正
6 15	国民の言語生活	国民の言語生活
28 4	西尾美美子、の次に入れる、	橋本圭子、
49 2	坊っちゃん	坊っちゃん
66 1	安藤舍予子	安藤舒子
78 4	林四郎	林四郎*
" 7・8	森岡健二	森岡健二*
84. 5	寺島愛 の次に入れる、	, 佐野芳夫(山梨県県外派遺生)
101 8	448ページ	448ページ)
105 5	鶴岡昭夫	鶴岡昭夫
109 -5	発行所は筑摩書房、	削除
112 2	林知巳夫	林知巳夫
118 4	林知巳夫	林知巳夫
" 14	斎賀秀紀	斎藤秀紀
122 10	総合研究、刊行費	総合研究 刊行費
127 -1・2	日本語教育教材開発室	日本語教育教材開発室(新設)
126 -1	言語計量研究室	言語計量調査室

第III部歴代職員一覧

131 -11	(芦沢節の項) 24.6.1~	24.3.31~
132 10	(池田稔子の項) 第四研究部第1資料	第一研究部書きことば
133 -10	(太田いくよの項) 44.7.1~31.3.31	31.3.31~49.6.15
134 2	(岡田敏子の項) 言語計量研究部第三	言語計量研究部第一
" -10	金森巖子	金森巖子 (植木)
135 7	(金田一春彦の項) 第一研究室	第1研究室
136 12	(佐藤亮一の項) 43.8.1~	43.4.1~
" 18	(沢田さち子の項) 第1資料	第1資料研究
" 20	(沢村都喜江の項) 44.4.1~	43.11.1~
" 24	(科野千夏の項) 48.4.1~42.3.31	47.4.1~現在
" 2・3	(下山いくよの項)	削除
137 4・5	(白井陽子の項) 第3資料研究室	言語計量調査室
" 19	(鈴木重幸の項) 横浜国立大教授	横浜国立大学教授
" -14	(菅野裕子の項) 第2資料	第3資料
138 17	(田島道子の項) 言語計量部	言語計量研究部
" 21	(田中章夫の項) 大阪外国语大教授	大阪外国语大学教授
" -5	(塚田実知代の項) 48.2.16~	48.2.1~
139 6	柘植春代	柘植春代
" 10	(露峰裕子の項) 第1資料	第1資料
" 12	(鶴岡昭夫の項) 第四	第一
142 -15	(南不二男の項) 36.4.1~52.3.31	36.4.1~46.4.30 52.1.10~52.3.31
144 右 14	桜井幸子	削除
" " 17	重田立子 山田	削除(歴代職員一覧に移す)
" " 20	鈴木澄子 池部	削除
145 左 5	豊泉美奈子 岡本	削除(歴代職員一覧に移す)
" " 10	平島やす江	削除
" 右 10	渡辺嘉子	削除(歴代職員一覧に移す)

国立国語研究所 三十年のあゆみ 補正(追加)表

1. 本文145ページに記したように歴代職員一覧等には、まだ不備の点が若干ある。刊行後、気付いたことを以下に記述する。

ページ 行	補正される事項	補 正
135 -5	(三枝やす江の項)	[現姓平島]
138 24	(田中卓史の項)第三研究室研究員	第三研究室 主任研究官
139 -9	(中野洋の項)第一研究室研究員	第一研究室 主任研究官
144 右 5	(栗原徳子の項)	[現姓宮崎]
" " 12	小村糸子	小村庸子 [現姓箕浦]
145 左 8	(野口喜久子の項)	旧姓浅川
150 2	南日本短期大学講師	<死去>
" -11	名古屋大学文学部教授	名古屋大学文学部名誉教授

2. 歴代職員一覧に以下を加える。

重田立子 (山田)	32.4.1~33.9.30	資料調査室
島村直己	53.9.1~現在	言語教育研究部第一研究室研究員
豊泉美奈子 (岡本)	28.4.1~33.8.31	第一研究部書きことば研究室
矢幅嘉子 (渡辺)	33.4.1~34.9.28	第一研究部書きことば研究室

3. 臨時筆生に以下を加える。

阿部玲子	土屋高子(山上)	富永洋子	永鳥壘子(山内)
中村術子(栗山)	名古則子	林慶子(宮部)	平居多恵子
福本邦子(中村)	堀部光永(赤川)	松山悦子(潮田)	三須真呂
神津美和子(佐藤)	山崎美枝子(小林)	山根武	山本寿子
山本昌美	鷲尾タカ		

4. なお、お気付のことがありましたら庶務課までお知らせ願います。

国立国語研究所
三十年のあゆみ

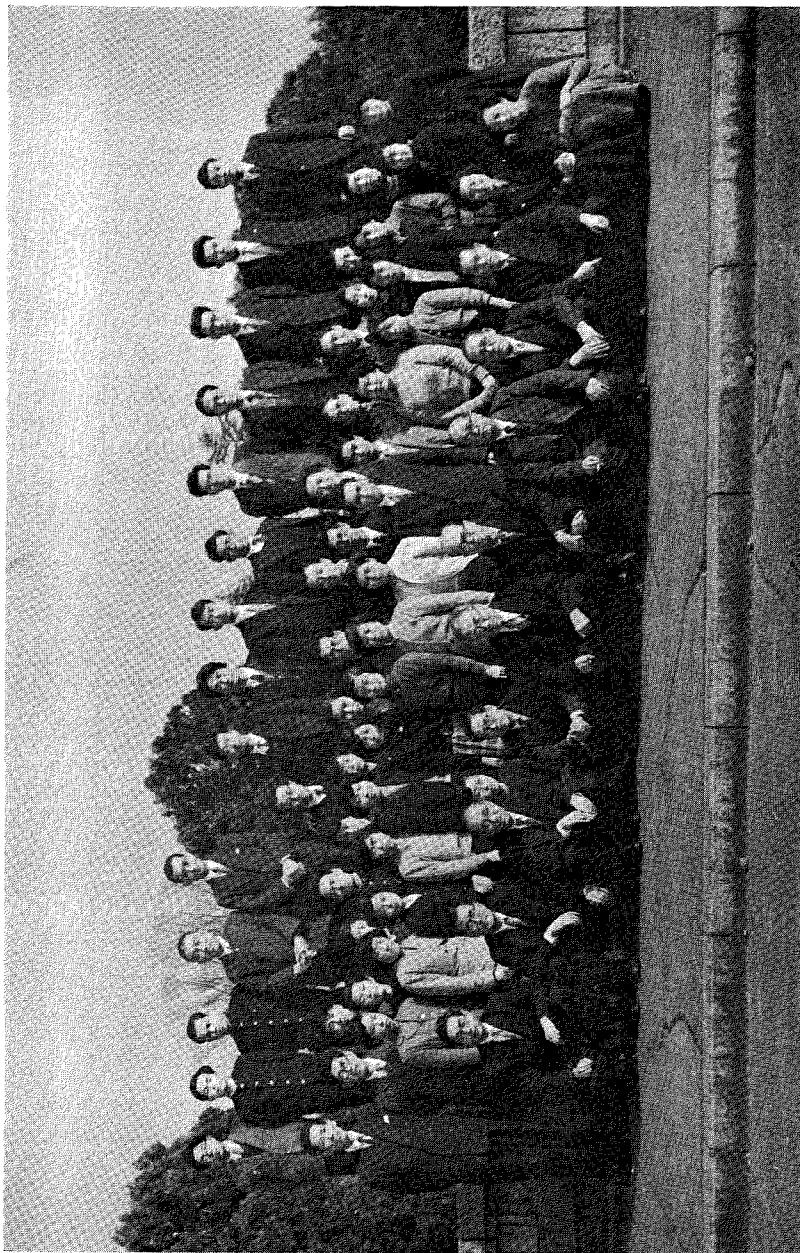
——研究業績の紹介——

国立国語研究所
1978

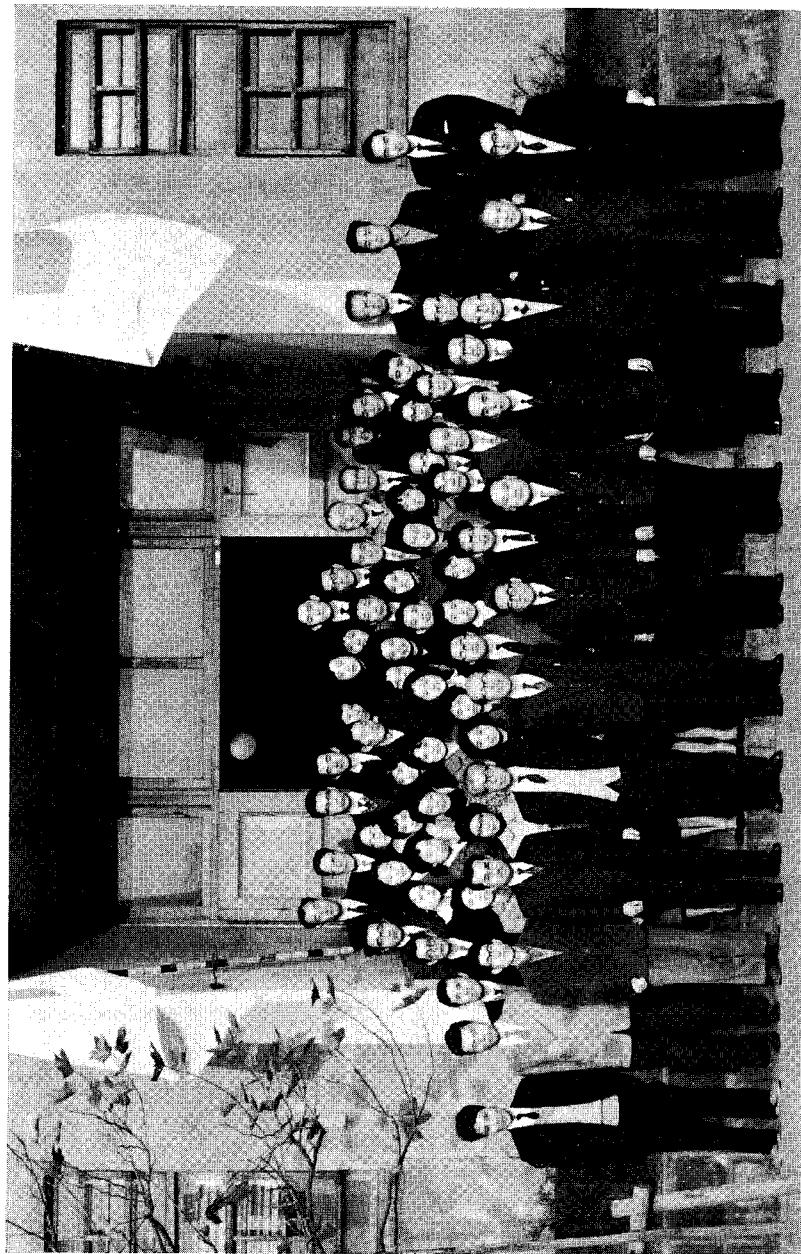


① 国立国語研究所全景（昭和53年9月）

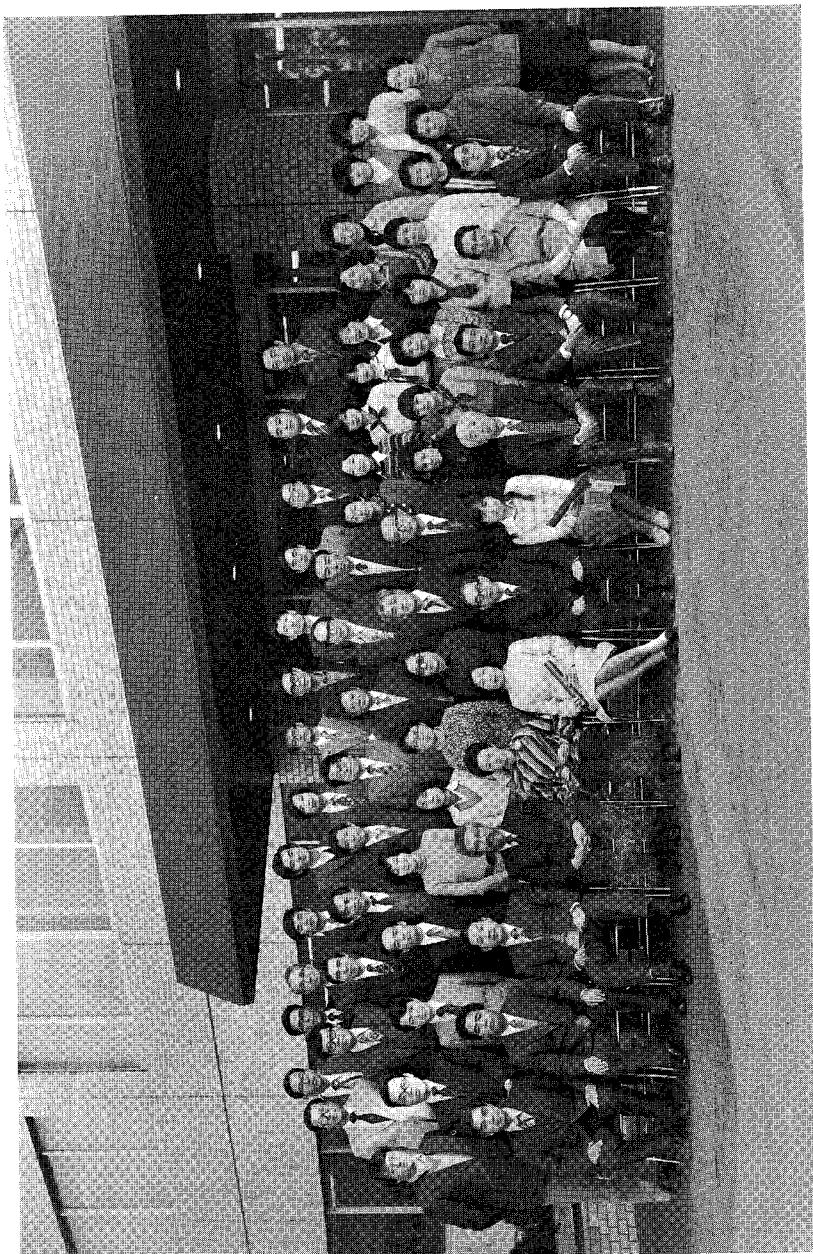
② 國立國語研究所職員（昭和28年12月20日）

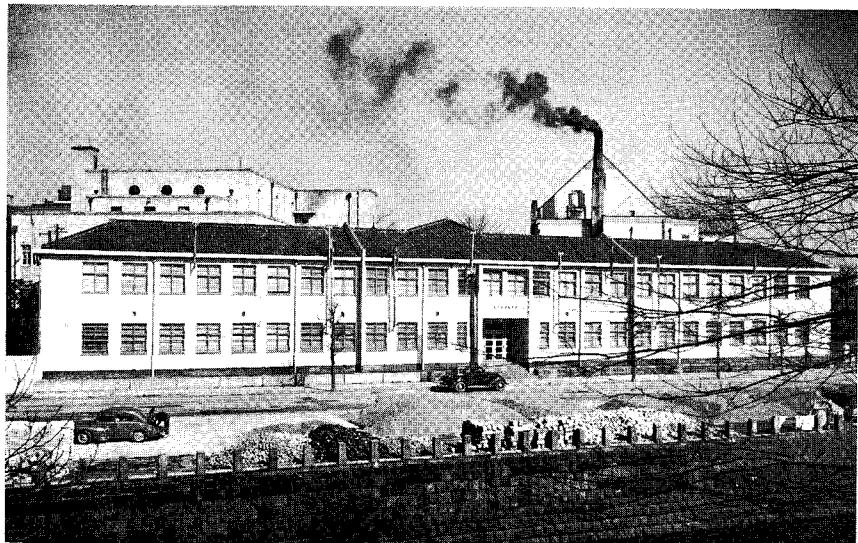


(3) 国立国語研究所職員（昭和36年1月4日）



(4) 國立國語研究所職員（昭和62年12月20日）





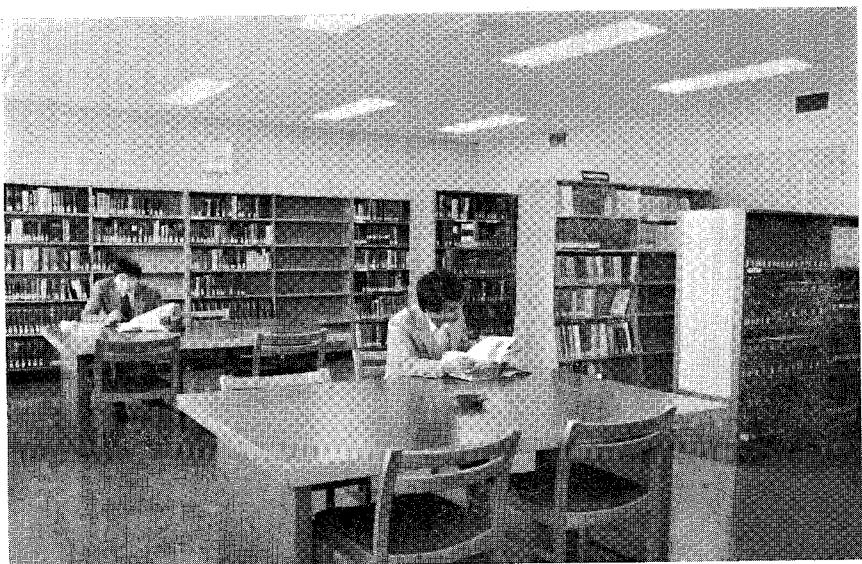
⑤ 旧一つ橋庁舎（昭和29年10月～昭和37年3月）



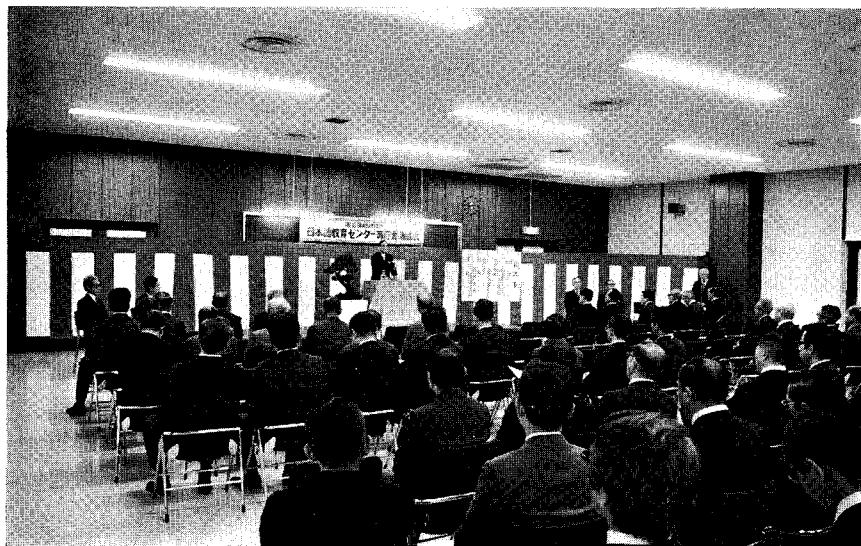
⑥ 旧西が丘庁舎（昭和37年4月～昭和51年）



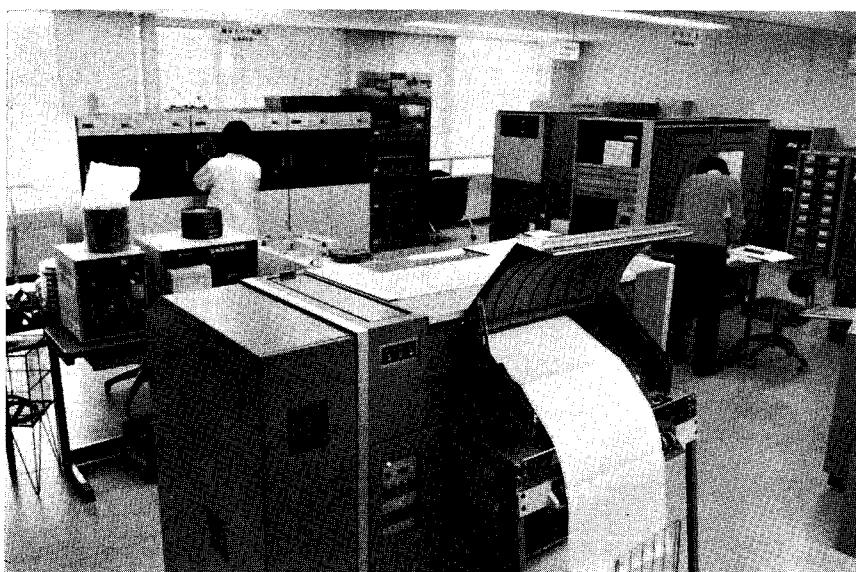
⑦ 図書館書庫



⑧ 図書館閲覧室



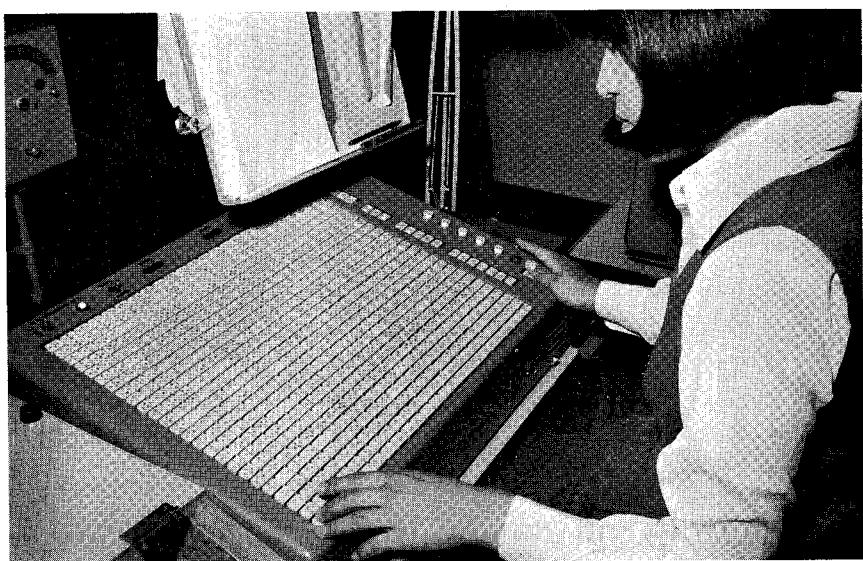
⑨ 講堂 1号館落成式（昭和51年11月18日）



⑩ 電子計算機 HITAC 8250型（昭和49年3月設置）



⑪ 高速漢字プリンター C-5210型（昭和50年2月設置）



⑫ 漢字テレタイプ（当研究所の特別注文 昭和40年11月設置）



⑬ オフサルモグラフ（眼球運動記録装置）

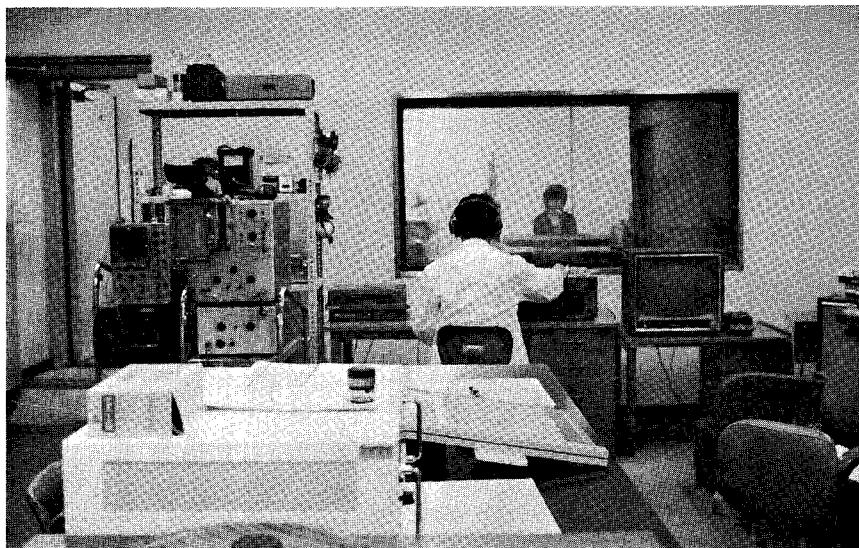


⑭ 記録図

昭和28～37年、文章の読みやすさ、縦組み・横組み、および字形の優劣等に関する調査に使用された。



⑮ 現在の視覚実験室



⑯ スタジオ・脳波室の付属モニター室



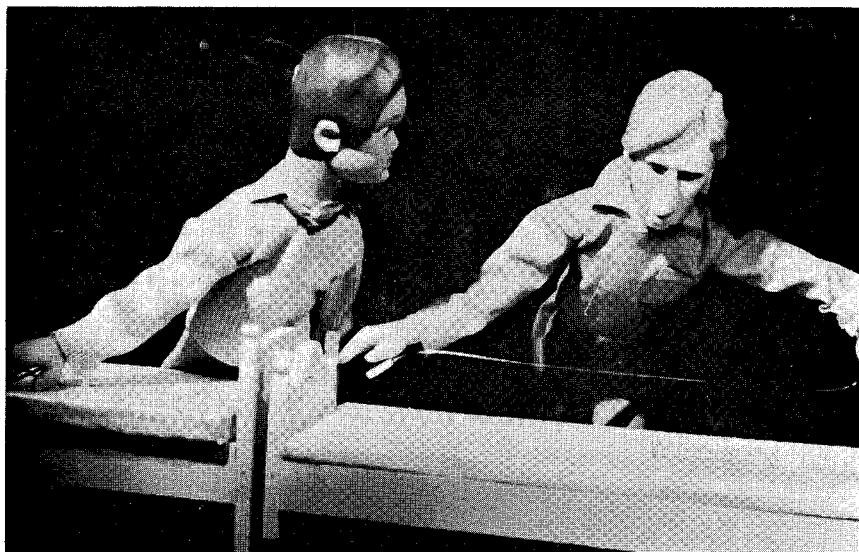
⑰ 音 声 計 測 室



⑯ 映像音声教材制作装置（VTR）（昭和52年1月設置）



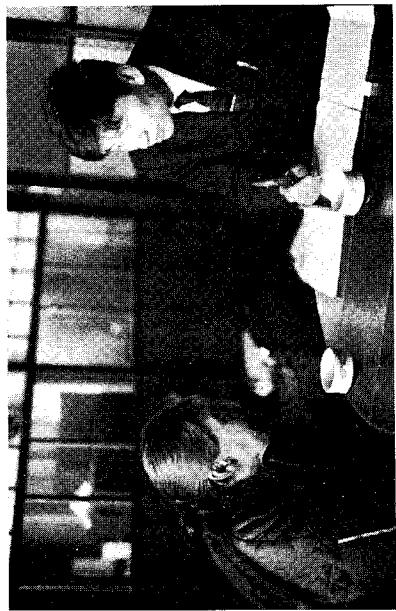
⑰ LTLを使用しての日本語教育研修（昭和52年12月一部設置）



⑩ 日本語教育教材映画、第3巻の一場面
「みじかいですね」「みじかくないですよ」



⑪ 研究室風景



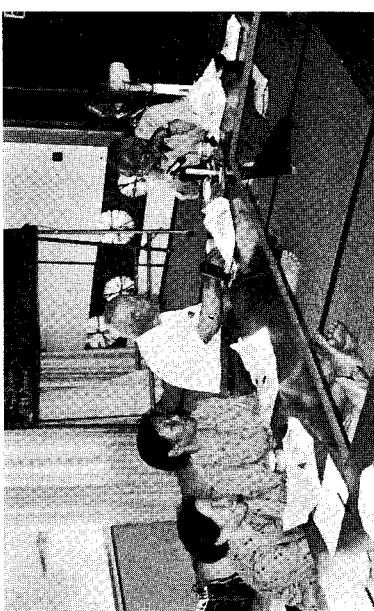
㉓ 日本言語地図検証調査（新潟県糸魚川市 昭和44年3月）



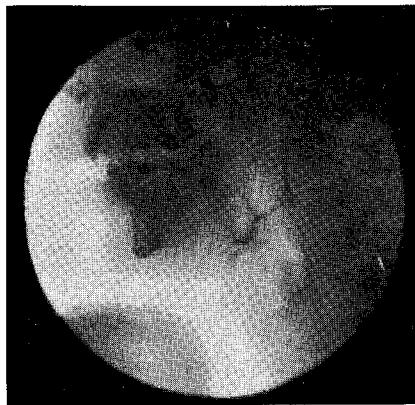
㉔ 幼児テスト風景（昭和53年2月）



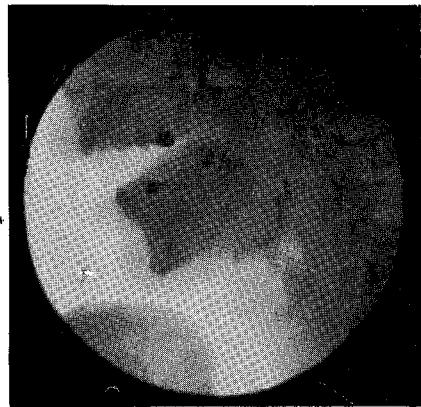
㉕ 国民各層の言語生活の実態調査（松江市デパート売場の調査 昭和38年11月）



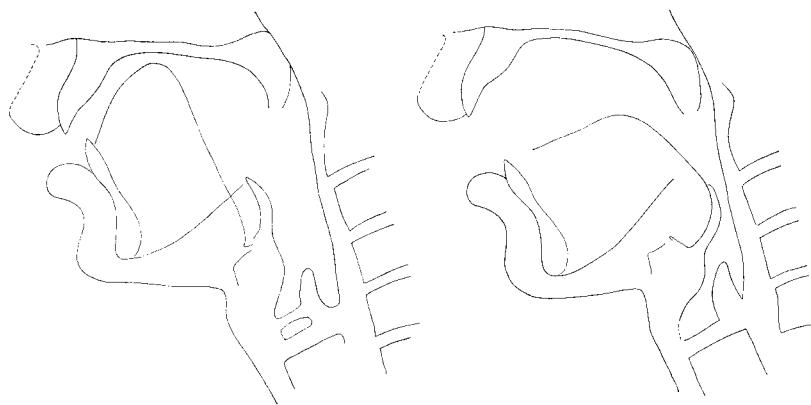
㉖ 方言録音採集（昭和51年7月 鳥取県郡家町）



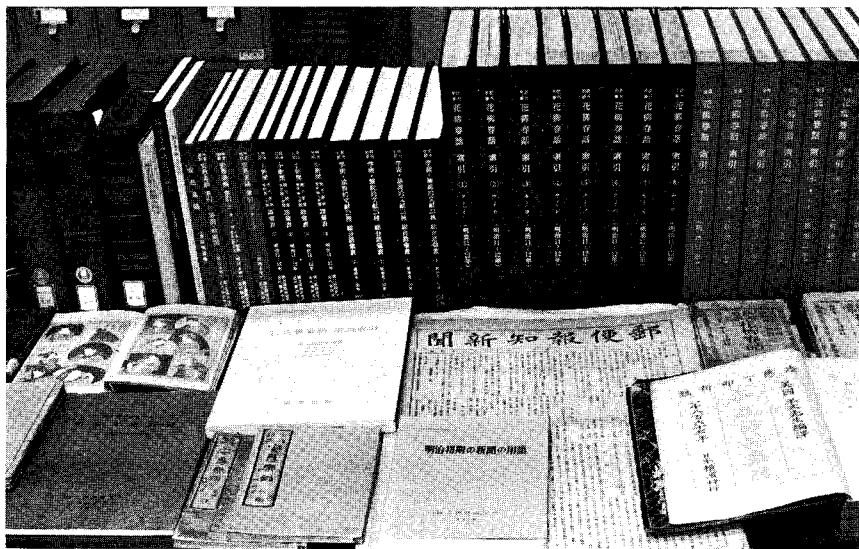
[i]



[a]



㉖ X線映画の一こま



⑯ 明治時代語研究資料



⑰ 幼児の行動観察室

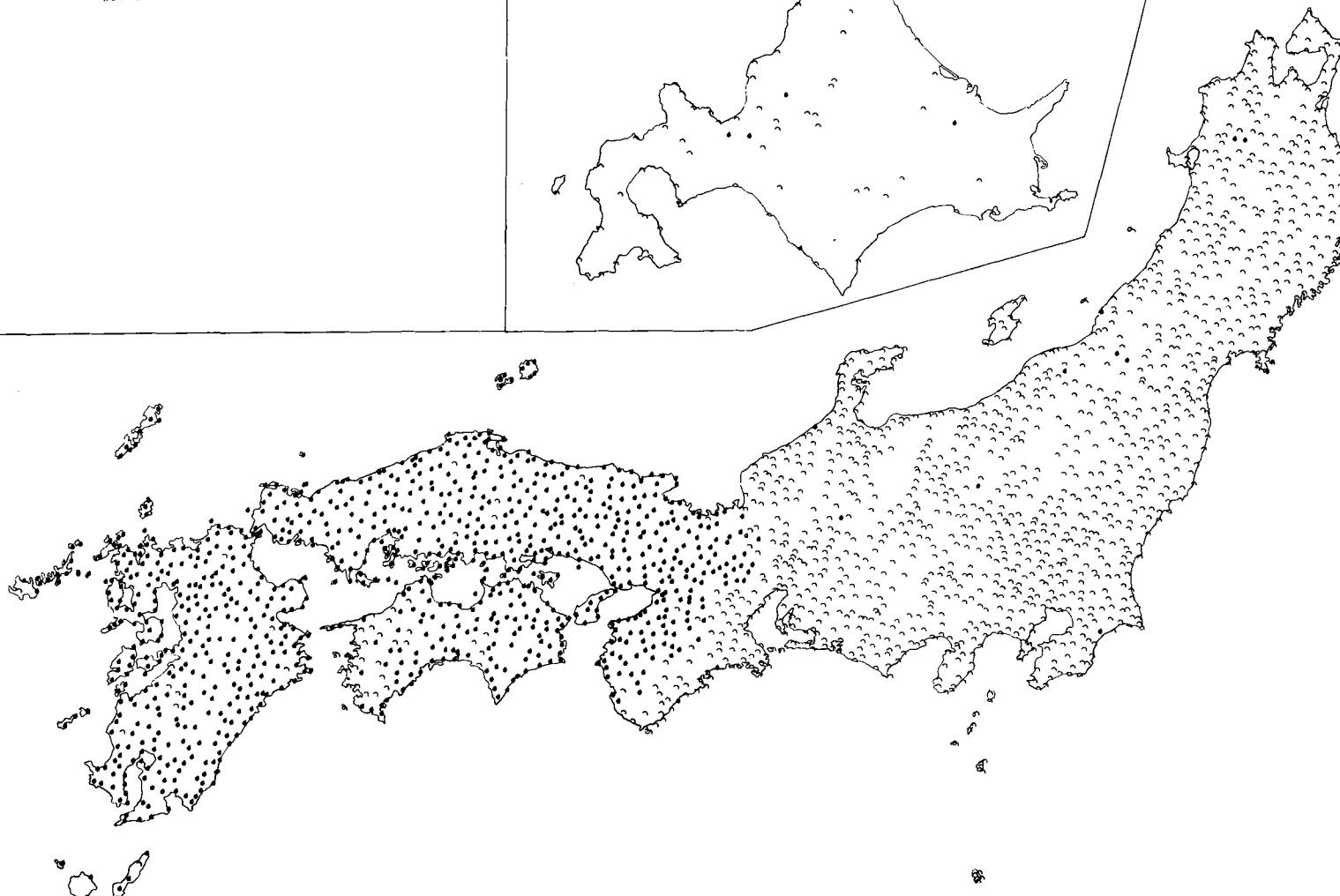


29

アカイを“明かるい”の意味で使うか
AKAI used for “bright”

- 使 う in use
- △ 使 わ な い not in use

日本言語地図
国立国語研究所
LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN
NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE



質問文：アカイということばを、明かるいことを表わすときに使いますか。ろうそくよりも電燈の方がアカイと
いうふうに……。(019)

29 アカイを“明かるい”
の意味で使うか

はじめに

国立国語研究所は、本年12月20日をもって創立以来満30年を経過することになる。ここに、将来への新たな発展を期するにあたり、「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、あわせて国語の合理化の確実な基礎を築く」ことを任務として積み重ねてきた成果を記念するために、この一巻を公刊する。

本書は三部からなる。

第一部では、30年間の研究活動のあゆみを概説する。

第二部では、研究成果を、報告書を中心に紹介する。

第三部では、予算・機構等の変遷と各種名簿を掲げる。

長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意を深く謝するとともに、更に今後一段の御理解と御支援が得られることを切に願う次第である。

昭和53年11月

国立国語研究所長 林 大

編集委員

飯豊 毅一（委員長）

正法地幹雄

高橋 太郎

土屋 信一

中村 明

飛田 良文

水谷 修

村石 昭三

目 次

口 紹	(1)
はじめに	(19)
目 次	(21)
I 研究活動のあゆみ	1
成立の経過	3
調査研究活動の概要	8
科学研究費による研究題目一覧	16
II 研究成果の紹介	19
1. 共通語, 話し言葉, 音声	21
2. 書き言葉, 漢字, 漢語	26
3. 文法, 語彙	32
4. 語彙調査	41
5. 電子計算機利用	47
6. 各地方言	52
7. 日本言語地図	61
8. 地域社会の言語	61
9. 言語と社会	73
10. マス・コミュニケーション	77
11. 国語の歴史的発達	82
12. 国語教育	84
13. 日本語教育	97
14. その他の編集事業	101
15. 講演会, 研究発表会	111

III 予算・機構・名簿・年表	121
予算の推移.....	122
機構の変遷.....	124
歴代評議員会長・副会長名.....	128
歴代評議員名簿.....	128
歴代所長名.....	131
歴代職員一覧.....	131
歴代地方研究員名簿.....	146
国立国語研究所年表.....	153
国立国語研究所刊行書一覧.....	166

I 研究活動のあゆみ



設立の経過

1. 設立の要望

国語国字の改善をはかるには、その根底となるべき国語生活の実態をとらえ、その改善の方向を明らかにしなくてはならない。そのためには、有力な研究機関を設けるべきであるということは、明治以来、幾多の先覚者によって唱えられたことである。これをうけて、文部省では、国語調査委員会、臨時国語調査会、国語審議会等をあいついで設け、国語に関する重要事項の調査審議を行ってきた。戦後わが国が新しい国家として再生しようとするにあたって、国民生活の能率の向上と文化の進展には、まず、国語国字の合理化と能率化が基礎的な要件であり、そのためには、国語に関する科学的総合的な研究を行う有力な機関を設置することが必要であるという要望が、特に強くなつた。

ことに、国語審議会は、昭和22年9月21日の第11回総会において、文部大臣に対して、次のように建議し、国語研究機関の設置を強く要望した。

国語審議会は、国語国字問題の重要性にかんがみ、大規模の基礎的調査機関を設けて、その根本的解決をはかられんことを望む。

また、昭和22年8月、第1回国会開会中、安藤正次（「国民の国語運動連盟」世話人）、古垣鉄郎（日本放送協会専務理事）、伊藤正徳（日本新聞協会理事長）、安倍能成（国語審議会会长）、石井満（日本出版協会会长）、野沢隆一（日本印刷協会理事長）の6氏によって、「国語国字問題の研究機関設置に関する請願」が衆参両院に提出された。この請願は、衆参両院の文化委員会の慎重な審議の末、参議院において同年11月26日、衆議院においては同年12月9日、それぞれ本会議において議決採択され、内閣に回付された。

以上のほかにも、新聞の社説等において、国語研究機関の設置が刻下の急務であることが、しばしば論ぜられた。

2. 設立の準備

(創設委員会の設置)

文部省は、国立の国語研究機関創設の議を練り、準備を整えていたのであるが、社会各方面からの要望にこたえ、昭和23年度に設立することに決定し、同年4月2日「第1回国会において衆議院ならびに参議院で採択された国語国字問題の研究機関設置に関する請願」について閣議を求め、同日、政府としてはその実現に極力努めるということに閣議決定をみるにいたった。また、予算についても、昭和23年度において8か月分を確保できる見通しを得た。

そこで、文部省では、この研究機関の基本的な事項を審議するために、国立国語研究所創設委員会を設けることになった。これは、国民生活の全般に対して深い関係をもつ国立国語研究所は、その発足にあたって民主的な討議がじゅうぶん行われなければならないという主旨に基づくもので、このことは、前に述べた国会における請願審議の際、国会からも強く要望され、文部大臣もまたじゅうぶんその主旨に沿うことを確約していたのであった。

この創設委員会の人選を行うために、次の6氏によって打合せ会を開くこととなり、その打合せ会は昭和23年6月12日から2回にわたって、創設委員会の任務と構成について審議した。

衆議院議員	川越 博	参議院議員	金子 洋文
国語審議会会长	安藤 正次	同臨時委員	古垣 鉄郎
文部次官	有光 次郎	文部省教科書局長	稻田 清助

その結果、候補者として、次の18氏が選ばれたので、文部大臣は、この候補者18氏に対して創設委員を委嘱した。

安藤 正次	国語審議会会长	沢登 哲一	東京都立第五高等学校長
伊藤 正徳	日本新聞協会理事長	高木 貞二	東京大学教授
海後 宗臣	東京大学教授	土居 光知	東北大学名誉教授
金田一京助	日本言語学会会長	土岐 善磨	ローマ字運動本部委員長
倉石武四郎	京都大学教授	時枝 誠記	東京大学教授
颯田 琴次	東京大学附属医学専門部長	中島 健蔵	東京大学講師

西尾 実 東京女子大学教授 松坂 忠則 カナモジカイ理事長
服部 四郎 東京大学助教授 柳田 国男 民俗学会会長
古垣 鉄郎 日本放送協会専務理事 山崎 匡輔 教育刷新委員会副委員長
このような経過で成立した創設委員会は、昭和23年8月17日、18日、19日の3日にわたって開かれ、国立国語研究所の性格および国立国語研究所設置法案を議題として審議し、文部大臣に意見を提出した。そのほか幹部の人選について、一般的な希望条件をまとめて提出し、所長の候補者について参考案を7人の小委員会でとりまとめることとした。

（法案の提出、審議）

国立国語研究所設置法案は、創設委員会の審議を経たものを原案として関係方面との折衝の末、昭和23年11月13日に閣議決定を経て、内閣から国会に提出された。この法案は、両院の審議を経て、同年11月21日可決成立した。

この法案審議の際、論議された主要な点は、研究所が民主的に運営されるべきであること、国語政策の審議機関である国語審議会との関係等の問題であった。

法案提出の際の文部大臣下条康麿氏の提案理由説明は、次のとおりである。

国立国語研究所設置法案理由

今回、政府から提出いたしました、国立国語研究所設置法案について御説明申し上げます。

わが国における国語国字の現状を顧みますときに、国語国字の改良の問題は教育上ののみならず、国民生活全般の向上に、きわめて大きな影響を与えるものでありまして、その解決は、祖国再建の基本的条件であると申しても過言ではありません。

しかしながら、その根本的な解決をはかるためには、国語及び国民の言語生活の全般にわたり、科学的総合的な調査研究を行う大規模な研究機関を設けることが、絶対に必要なのであります。

言い換えますならば、国語国字のような国家国民に最も関係の深い重大な問題に対する根本的な解決策をうち立てますためには、このような研究機関によって作成される科学的な調査研究の成果に基かなければならぬと存じ

ます。

国家的な国語研究機関の設置は、実に、明治以来先覚者によって提唱されてきた懸案であります。また終戦後においては、第1回国会において、衆議院及び参議院が、国語研究機関の設置に関する請願を採択し、議決されましたのをはじめ、国語審議会からの建議ならびに米国教育使節団の勧告等、その設置については、各方面から一段と強く要望されるに至りました。

政府におきましても、その設置について久しい間種々研究を重ねてきたのであります。実現を見ることなくして今日に至ったのであります。しかるに、このたび国会におきまして請願が採択され、世論の支持のもとに、急速にその備準が進められることになりました。

さて、この法案を立案するに当たりましては、その基本的な事項につきましては、国立国語研究所創設委員会を設けて、学界その他関係各界の権威者の意見を十分とり入れるようにいたしました。

次に、この法案の骨子について申し述べます。

第一に、国立国語研究所は、国語及び国民の言語生活について、科学的な調査研究を行う機関であり、その調査研究に当っては科学的方法により、研究所が自主的に行うように定めてあります。

第二に、この研究所の事業は、国民の言語生活全般について広範な調査研究を行い、国語政策の立案、国民の言語生活の向上のための基礎資料を提供することといたしてあります。

第三には、この研究所の運営については、評議員会を設けて、その研究が教育界、学界その他社会各方面から孤立することを防ぐとともに、研究所の健全にして民主的な運営をはかるようにいたしてあります。

この研究所で設置され、調査研究が進められてまいりますならば、わが国文化の進展に資するところは、はなはだ大きいと存じます。

何とぞ、この法案の必要性を認められ、十分御審議の上、御賛成下されんことをお願ひいたします。

3. 設 立

国立国語研究所設置法が可決されたので、文部省では昭和23年12月3日、創設委員会を開き、設置法可決までの経過を説明した。この委員会においては、研究所の事業について審議するとともに、小委員会においてとりまとめられた所長候補者について討議し、これらの意見を参考案として文部大臣に提出した。

かくして、昭和23年12月20日、国立国語研究所設置法は、昭和23年法律第254号として公布され、即日施行されるにいたった。長い間、社会の各方面から要望されてきた国立国語研究所は、ここに正式に設置されたわけである。同日、時の文部次官井手成三氏が所長事務取扱となり、昭和24年1月31日、所長として西尾実氏が任命され、同年2月4日、評議員として前掲安藤正次氏ほか16氏の創設委員が就任した。

調査研究活動の概要

ごく概括的に述べるならば、国立国語研究所は、創立以来、国語学が從来取り扱ってきた国語の構造の体系的研究を特に現代語について充実発展させるとともに、とりわけ国民生活の中に果たす言語の機能を重視して、新しい分野の開拓に努めてきた。その主要な特色として次のようなことが挙げられる。

- ①人文科学において困難とされてきた共同研究の体制を組織したこと。
 - ②社会調査の方法を用いて言語生活や言語行動を正面の研究対象に取り上げてきたこと。
 - ③大規模な計量調査を行い、また、そのためにコンピュータを利用する言語研究の方法を開発してきたこと。
 - ④各地方言の調査研究等において、地方研究員の協力による組織的な全国的調査を実施してきたこと。
 - ⑤児童生徒の言語能力の発達等について、経年追跡的観察調査を行ってきたこと。
 - ⑥日本語教育に関して、外国語として学習されるものという観点からの日本語の研究、学習者の母語と日本語との間の比較対照研究を開始したこと。
これらの調査研究の成果は、「国立国語研究所年報」に毎年報告しており、課題ごとに「国立国語研究所報告」や「国立国語研究所資料集」等の刊行物として、広く国語教育、国語施策、情報処理等各方面の利用に供している。これらについては、本書の第二部に要約解説するとおりである。
- このような調査研究が遂行されるについて、機構及び人員がどのように推移したかは、第三部に記すとおりであるが、将来に向かって期するところをここに附言するならば、それは次のような発展である。

まず、発足以来日が浅くてまだ完成に至らない日本語教育センターの対照的研究部門の充実はいうまでもない。委員会を設けて準備を進めている辞典編集

に関して、編集事業部門の新設は当面の問題であり、また研究所創設以来の宿題として、歴史的研究部門の設置がある。言語教育部門の充実、視聴覚実験研究部門及び情報資料部門の独立も、研究所の目的に照らして必要が痛感される。もとより今日の事情で実現に多くの困難はあるにしても、これらはみな今日の課題である。なお、部門の新設には必ずしも関しないが、将来、5年ごと又は10年ごとの、国勢調査のような実態調査を、国民の言語及び言語生活について、組織的経常行に行うことが考えられている。

以下には、この30年間に取り上げてきた研究課題を、各年度の年報を資料として、一覧表の形にまとめて示すこととする。これらの題名は、年報の目次に掲げられたままをとったので、より概括的なもの、より具体的なものなど課題としてさまざまな段階のものを含み、また、用語を少し改めたに止まるようなものもあわせてあげてある。昭和26年度から39年度までの年報では、目次に、話したことば、書きことば、地域社会の言語生活、国語教育、言語の効果、国語の歴史的発達、特殊問題等の名で概括が見られるが、今は、本書第二部の成果解説に施した分類とほぼ同様な分類に従うこととした。各題目のあとに示す数字は、その調査研究の行われた年度である。

創設以降研究課題一覧

1 共通語、話し言葉、音声

現代共通語の実態の調査研究 24

現代語の音声の研究 42

X線像による調音運動の研究 43, 44, 45, 46, 47

発音過程に関する研究 48, 49, 50, 51

話し言葉の調査研究 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39

日常談話語の調査 28

語形確定のための基礎調査 29, 30
話しことばの文法の調査研究 38, 39
話しことばの文型の調査研究 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37

2 書き言葉、漢字、漢語

現代書き言葉の調査研究 25, 26, 27, 28
書き言葉の調査研究 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39
漢字・漢語に関する調査研究 24
漢字使用の実態 34
総合雑誌の用字調査 35

現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究 38, 39, 40
現代語の表記法に関する調査研究 41, 42
現代語の表記法に関する研究——送りがな・漢字 43, 44
現代語の表記法に関する研究
——新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究—— 45, 46, 47, 48, 49, 50
現代語の表記についての調査研究 51
当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究 28
漢字機能度の研究 45, 46, 47

3 文法、語彙

現代語の文法の調査研究 40, 41, 42
現代語の文法の研究——文体と文法との関係—— 44, 45, 46, 47, 48
現代語文法の記述的研究 49, 50, 51
用言30語の用法 31
現代語の助詞・助動詞の調査研究 25
動詞・形容詞等の意味用法の記述的研究 39, 40, 41
語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等—— 42, 43, 44, 45, 46
造語法の研究 24
語構成に関する分析 32

- 同音語の調査 33, 34, 35
- 類義語の調査研究 36, 37, 38
- 外来語の分析 33
- 語彙論上の諸問題に関する調査・研究 47, 48, 49
- 現代語彙の概観的調査 50, 51
- 現代語の表現の文体論的研究 50, 51

4 語彙調査

- 新聞語彙の調査研究 25
- 婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究 25, 26, 27
- 総合雑誌語彙の準備調査 28
- 総合雑誌の語彙調査 29
- 総合雑誌の用語の調査 30, 31, 32
- 雑誌一般の用語の概観調査 31, 32, 33, 34, 35
- 現代雑誌一般の用語・用字の概観調査 36, 37, 38
- 新聞の語彙調査 41
- 漱石・鷗外の用語の研究 47, 48, 49, 50, 51
- 高校教科書の用語調査 49, 50
- 高校教科書の用語用字調査 51
- 語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策 28
- 新聞語彙調査の短単位語処理 50

5 電子計算機利用

- 言語情報処理に関する基礎的研究 42
- 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51
- 電子計算機による話しことば資料の分析・処理の研究 41
- 大量語彙調査機械化のための準備的研究 38, 39
- 電子計算機による大量語彙調査の準備的研究 40
- 電子計算機による語彙調査 42

電子計算機による語彙調査——新聞を資料とする—— 43, 44, 45, 46, 47, 48

6 各地方言

東京方言および各地方言の調査研究 24

各地方言の調査 25, 26

全国方言語彙の調査 25, 26

全国方言の概観調査 29

地方の言語に関する調査研究 39

各地方言親族語彙の言語社会学的研究 48, 49, 50, 51

各地方言の共通語との対照的研究 38, 39, 40

全国方言文法の対比研究 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48

各地方言文法調査の準備的研究 51

「各地方言資料の収集および文字化」のための研究 49, 50, 51

琉球首里方言辞典の編修 30, 31, 32

7 日本言語地図

方言地図作成のための準備研究 30

日本言語地図作製のための準備調査 31

日本言語地図作成のための調査 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39

日本言語地図の編集と刊行 40, 41, 42

日本言語地図の作成のための研究 42

日本言語地図の作成のための研究

——作図ならびに検証調査—— 43, 44, 45, 46, 47, 48

日本言語地図の検証調査 49, 50

8 地域社会の言語

地域社会における言語調査 26

地域社会の言語生活の調査 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38

白河市および附近の農村における言語生活調査 24, 25

- 山形県鶴岡市および附近の農村における言語生活調査 25, 26
長野県飯田市および上久堅村における言語生活調査 25, 26
北海道の言語についての調査 33, 34, 35
地域社会における言語使用の変遷と変容の研究 49
地方言語の敬語に関する調査 27, 28
三重県上野市における敬語の調査 27, 28
愛知県岡崎市における敬語の調査 28, 29
現代敬語の調査研究 39
敬語の社会的研究 50, 51

9 言語と社会

- 国民各層の言語生活の実態調査 37, 38(A, B), 39(A, B)
社会構造と言語の関係についての基礎的研究 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48
所属集団の差異による言語行動の比較研究 48, 49, 50, 51
対人的言語行動の研究 39
言語表現における場面の効果の研究 38, 39, 40, 41
言語の表現機能と伝達効果の研究 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48

10 マスコミュニケーション

- マス・コミュニケーションの研究 24
マス・コミュニケーションに関する研究 25, 26
マス・コミュニケーションの調査 25(鶴岡)
放送言語理解尺度設定の基礎的研究 25
読紙作業の実験的研究 25
「読みやすさ」の基礎的研究 26, 27
スポット・アナウンスの理解度と効果に関する研究 26
パーソナリティの調査 25(鶴岡)
白河におけるパーソナリティ調査と新聞調査 26
言葉の効果に関する調査研究 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39

- ラジオ・ニュース文体の研究 27, 28
青年の新聞への接近・理解とその影響 29, 30
「放送が児童の言語に与える影響」の調査 29
選挙公報文章の調査 30
新聞の文章の漢字使用に関する実験的研究 31, 32
新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究 33, 34
新聞の文章に関する調査研究 35
文字配列の合理化に関する実験的研究 24, 25, 26, 27, 28
国語文章の横組みのための印刷条件の研究 36, 37, 38
図形および文字の知覚および認識機構の研究 46, 47
図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究 49, 50, 51

11 国語の歴史的発達

- 国語の歴史的発達に関する調査研究 25, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39
明治時代語の調査研究 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42
明治時代語の研究
——明治初期における漢語の研究—— 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51
音声史資料の収集と整理 30
古辞書の索引作成 36
『色葉字類抄』の用語索引作成 37, 38
辞典編集方法の研究 24, 25, 26, 27

12 国語教育

- 国語教育に関する研究 24
国語教育に関する調査研究 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39
国語の学習法に関する研究 26
国語の学習と指導に関する研究 27, 28
学校における共通語指導状態の調査 26
文字言語の学習負担についての研究 27, 28

- 個人差に応じた国語学習指導方法の研究 25, 26
国語能力の発達段階に関する調査研究 26
言語能力の発達に関する調査研究 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35
国語学力標準設定に関する調査研究 24, 25, 26, 27
国語科学力水準調査 28, 29
幼児の言語発達に関する準備的研究 40, 41
就学前児童の言語能力に関する全国調査 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 49, 50, 51
現代児童・生徒の言語能力の動態調査 46, 47, 48, 49
中学校生徒の言語能力の発達に関する研究 36, 37, 38, 39
中学生の言語習得に関する研究——漢字習得—— 42, 43
義務教育終了者に対する語彙調査の試み 25
新聞に対する態度・経験・能力の発達に関する調査 27
文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究 40, 41
児童・生徒の漢字使用に関する研究 45
中学生の言語習得に関する研究 40, 41
中学生の漢字習得に関する研究 40, 41
作文による中学生の漢字使用に関する実態調査 40
中学校の漢字学習指導の実態に関する調査 41
高校生の漢字力に関する研究 44

13 日本語教育その他

- 日本語の対照言語学的研究 51
日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究 49
日本語教育の現状（内容と方法）についての実態の調査 50, 51
日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究 50, 51
日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究 50, 51
中国の文字改革に関する調査 33, 34
中国の言語・文字問題に関する調査 37

科学研究費による研究題目一覧

年度	種類	題 目	代表者
24	試験研究	白河市および附近の農村における言語生活の実態調査	西尾 実
"	刊行費	言語生活の実態 ——白河市および附近の農村における——	西尾 実
25	試験研究	鶴岡市および附近の農村における言語生活の実態調査	西尾 実
26	総合研究	平曲の研究	評議員 土居 光知
27~28	総合研究	敬語の社会心理学的研究	西尾 実
27	刊行費	言語生活の実態 ——鶴岡市および附近の農村における——	西尾 実
28	各個研究	都會の女性における接頭辞「お」の使用に関する調査	柴田 武
"	助成研究	法華経の訓詁についての研究	廣濱 文雄
28~29	試験研究	当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究	岩淵悦太郎
28	機械購入	Sonagraph (KAY Electric Co. 製)	西尾 実
29~30	総合研究	青年の新聞への接近・理解とその影響 ——新聞記事の表現と効果——	西尾 実
29	各個研究	現代チベット語（とくにラサ方言） の文法・語彙の調査研究	北村 甫
"	刊行費	点本書目	廣濱 文雄
30	各個研究	一方言体系の記述的研究	柴田 武
"	助成研究	文章論史研究——文の展開論の考察——	市川 孝
"	"	琉球首里方言の形態論的・意味論的研究	上村 幸雄

31~33	試験研究	伝達の効率化に関する基礎的言語研究	西尾 実
31	助成研究	福島県方言の研究	飯豊 育一
32	各個研究	方言調査基礎地図の作成	柴田 武
33~35	総合研究	北海道の言語の実態と共通語化の過程	岩淵悦太郎
33~34	各個研究	基本語彙設定のための語義分類表作成に関する研究	林 大
34~35	"	文音調より見た京都方言	宮地 裕
36	"	現代標準語における文型の実態調査	林 四郎
37	"	日本語のイントネーションの研究	宮地 裕
37~38	"	教育基本文型の研究	宮島 達夫
38~39	"	言語地理学的方法についての検証	柴田 武
39~40	総合研究	現代語誌記述のための基礎的研究	林 大
"	各個研究	就学前児童の語彙の実態	大久保 愛
40~41	"	電子計算機による自動言語単位分割の研究	岩淵悦太郎
40	"	移入集団の言語と被移入地域語・共通語との交渉に関する研究	飯豊 育一
41~42	総合研究	地方における話しことば教育法改善のための基礎的研究	大石初太郎
42~44	各個研究	作品用語の類似度の研究	宮島 達夫
43	奨励研究(A)	音韻知覚の発達についての実験心理学的研究	天野 清
43~44	試験研究	言語情報処理における漢字処理の実験的研究	林 四郎
44~46	一般研究(B)	現代語の形成過程に関する基礎的研究	岩淵悦太郎
44~45	" (C)	語の情緒的意味の Semantic Differential による研究	西尾 實弥
45~46	総合研究(A)	日本語の電子計算機処理のための基礎的研究	岩淵悦太郎
46~47	試験研究(1)	社会変化と言語生活の変容	岩淵悦太郎

47~48	一般研究(B)	電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究	岩淵悦太郎
48	" "	(C) 幼児・児童のかな文字の筆順に関する教育心理学的研究	村石 昭三
" "	" "	(D) 語彙の教育的構造化の研究	林 四郎
49	総合研究(A)	大都市における言語生活の実態	野元 菊雄
" "	一般研究(B)	作品用語検索組織の研究	石綿 敏雄
" "	" "	(C) 現代の国語表記におよぼした洋学・漢学の影響	斎賀 秀夫
51	総合研究(B)	表現法の全国的地域差を明らかにするための 調査方法に関する研究	飯豊 毅一
51~53	一般研究(A)	幼児・低学年児童の語彙調査	芦沢 節
" "	" "	(A) 現代の漢字使用の実態と意識に関する 計量言語学的研究	斎賀 秀夫
52~53	特定研究(2)	談話行動の実験社会言語学的研究	渡辺 友左
" "	" "	(2) 日本語教育のための基本的な言語能力の測定 に関する研究	野元 菊雄
" "	" "	(2) 児童の概念形成過程における言語の役割りと その教育効果に関する研究	林 大
" "	総合研究(A)	表現法の全国的調査研究	飯豊 毅一
" "	一般研究(B)	雑誌用語の変遷に関する研究	宮島 達夫
53	特定研究(1)	言語運用メカニズムの発達的研究	上野田鶴子

II 研究成果の紹介

1. 共通語、話し言葉、音声

談話語の実態

(報告8, 昭和30年〈1955〉, 195ページ)

担当者：中村通夫，大石初太郎，飯豊毅一，宇野義方，進藤咲子

補助者：樋口きよ子，芳賀俊子，染谷佳子

未開拓の研究分野であった話し言葉につき、準備調査のあとを受けて、構造の諸特徴把握・諸問題の所在闡明を行おうとした概観調査の結果である。

東京の日常談話を調査資料の主体として録音テープ80巻に収集して分析し、ラジオのニュース・ニュース解説や座談会・芸能・講義等の録音テープ20巻の収集資料と比較した。結果のあらましは、次のごとくである。

1. イントネーションについて。日常談話の文末には、K. L. パイクの4段階を細分したことになる42種が現れ、場面の違いによる現れ方の違いが注目される。ニュース・ニュース解説の文末には4種類しか現れない。
2. 文の長さについて。日常談話の一文は平均3.8文節=7.7語=16.2音節から成る。1文節文が31.8%, 1語文が20.4%を占める。ニュース・ニュース解説は、談話語との差が著しく、一文平均 18.8 文節=34.5 語=89.6 音節から成り、1~4文節文8.6%, 1~5語文6.6%である。
3. 文の構造について。日常談話の文は、73.5%が二次以上の成分を含まず、73.6%が主語を含まない。ニュースでは、90.9%が二次以上の成分を含み、62.9%が主語を含む。
4. 品詞について。日常談話の延べ語は、体言 20.5%, 用言 16.1%, 副詞 6.1%, 感動詞4.7%, 接続詞1.9%, 連体詞0.8%, ほか付属語等である。コソアド語4.6%がある。ニュース・ニュース解説では、それぞれ31.3%, 17.6%,

2.1%, 0.2%, 2.0%, 1.3%で、コソアド語2.0%である。

語形確定のための基礎研究

(年報7, 昭和30年〈1955〉, 87ページ)

担当者：中村通夫，大石初太郎，飯豊毅一，宇野義方，吉沢典男

補助者：樋口きよ子，染谷佳子

現代語で、語形が不確定である、いわゆるゆれているとされている語が少なからずあって、言語生活の上でしばしば問題になっている。そこで、この研究では、ゆれている語にはどのようなものがあるか、ゆれの種類にはどんなものがあるか、そしてまた、人々がそれらのゆれに対してどのような意見を持っているか、等を明らかにして、標準語制定のための一資料を作ることを目的とした。

この研究は昭和29年度、30年度の2年間にわたって行われた。29年度は、先行の各種研究文献および雑誌・新聞等から、ゆれている語例を収集し（のべ1041例）、整理した（年報6）。この際の方法その他は、このメンバーも参加して昭和24年度に行われた「東京方言の実態調査のための基礎的研究（年報1）」を参考にしている。

また、昭和30年度は、前年度に収集した語例の分析とあわせて、話すことばにおける実態、人々の意識などの調査を、アンケート方式により、準備調査を含めて3回行った。被験者は、年齢層別、東京を中心とした地域別、専門別などの面でかたよらないように配慮して、のべ361名（準備11人、第1回50人、第2回300人）選び、261名（準備11人、第1回43人、第2回207人）から回答があった。そして、現代語のゆれの現象を(1)アクセントに関するもの、(2)音声に関するもの、(3)語法に関するものに分類し、ゆれの実態と人々の意見とを整理したものがこの年報の記述である。

なお、29年度に収集された各事例は、「アクセントの変異に関する調査1」（昭和29年7月）、「アクセントの変異に関する調査2」（昭和29年9月）、「アクセントの変異に関する調査3」（昭和30年6月）、「類似の用法を持ち、従来

問題とされていた文法的事実の調査」(昭和29年8月),「語形の変異に関する調査1」(昭和29年9月),「語形の変異に関する調査2」(昭和29年9月)のプリント資料としてまとめられた。

話すことばの文型(1)——対話資料による研究——

(報告18, 昭和35年 <1960>, 347ページ)

担当者: 大石初太郎, 飯豊毅一, 宮地裕, 吉沢典男

補助者: 木積きよ子, 染谷佳子, 栗原徳子, 大平富美子, 泉喜与子, 吉村香苗

対話形式の資料に基づき, 話すことばに用いられる文表現の典型を, 表現意図・構文・イントネーションの観点から総合的に掲えることを目的とした。表現意図とは言語主体が一般的に意図する文内容であり, 詠嘆・判叙・要求・応答に大別される。構文は文末述語を中心とし, 述語と直接関係のある構成要素の配列組み合せにより構文の型を抽出し, 自動詞文・他動詞文・形容詞・形容動詞文・名詞文・副詞文・感嘆詞文に分類した。イントネーションは文の成立に直接関係のある文末のイントネーションに限定し, 文末部の発話段階の音調形式から5種(平調・昇調I(／)・昇調II(へ)・降調・(α)型)の別を立て, 表現意図との対応を明らかにした。総合的文型の抽出は表現意図を中心として進められ, 表現意図に応ずる各種の文表現に用いられる構文の型, イントネーションの型が整理され明らかになっている。

話すことばの文型(2)——独話資料による研究——

(報告23, 昭和38年 <1963>, 283ページ)

担当者: 大石初太郎, 宮地裕, 南不二男, 鈴木重幸

補助者: 泉喜与子, 吉村香苗

話すことばの文型(1)に続く研究であり, 講演・講義・演説・祝辞・テーブルスピーチ・ラジオニュース解説等の独話形式の資料に基づき, 文の文法的類型

を明らかにすることを目的とした。研究方法は、基本的には「話すことばの文型(1)」の場合と同様であるが、細部においてはかなりの修正を加えている。特に構文の分析範囲を単純文から句を含む文にまで広げ、陳述的成分に関する構造をも対象とした点などがあげられる。イントネーションの文型への参与のしかたについてもより明確な把握が試みられている。

本書の主要部は「II 表現意図」、「III 構文」、「IV イントネーション」、「V 総合的文型の試み」の四章から成り、II, III, IVでは文をそれぞれの面から分析し、文法的特徴を抽出し、Vにおいてそれらの総合文型について考察がなされている。残された問題としては、総合的文型を体系的に把握すること、語順の変換と陳述的変容の問題、待遇表現の実態と文型の関係、イントネーションの実証的研究、言語教育等のための実用的文型設定、および「話すことばの文型」に対して「書きことばの文型」についての研究等が指摘されている。巻末にはこれまでの文型研究について国内外の諸説が紹介されており参考になる。

X線映画資料による母音の発音の研究

——フォネーム研究序説——

(報告60 昭和53年3月<1978>, 165ページ)

担当者：上村幸雄、高田正治

補助者：衛藤蓉子（現姓石川）

現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴などを主にX線映画資料によって検討する一連の研究のうち、単独の母音に關した部分をとりまとめたもので、以下の4章からなっている。

第1章「序章」は、現代の支配的な音韻論におけるフォネームの生成と認識に関する理論の根底にひそむ問題点を指摘し、また、この研究全般における方法論についてのべてある。

第2章「母音の調音の生理学的基礎」は、はじめに母音にとって唯一の音源となっている声帯の機能を、声帯筋の制御、呼吸筋の制御、声道の形状の制御

と、これらの相互関係および時間的变化として解説し、つぎに、音響管としての声道の形成に関与する各種音声器官が、解剖学的な拘束のもとで母音調音のためにどのように機能しているかをのべ、さいごに、休止状態にある声道、発話の準備状態にある声道、中立的な母音調音時における声道の特徴について言及している。

第3章「声道による母音の調音の可能性——D.Jonesの基本母音についての検討——」は、D.Jonesが提案し、ひろく実用化されている基本母音の正当性、実用性についての検討を、筆者（上村）の発音による基本母音のX線映画資料からえられた結果、および、ドイツ語、ロシア語などの母音についての同様な情報（他の研究者による）によって批判的に検討し、修正すべき点を指摘している。

第4章「日本語の5母音」では、フォネームの音韻論についての基礎を明らかにするために第1に必要な、contextに依存しない単独の母音に対象をしづり、X線映画資料にもとづいて、そのような母音の「標準的な発音」のばあいの声道の特徴を5個の母音ごとに、また、各種音声器官ごとにのべ、その他、「誇張的な発音」、「よわまつた発音」のばあいの5個の母音の声道の特徴についても言及している。

巻末には、付属資料としてX線映画のテキスト、および、単独の標準的な5母音の発音時における声道各部のうごきの時系列分布図なども収めてある。

2. 書き言葉、漢字、漢語

送り仮名法資料集

(資料集3, 昭和27年〈1952〉, 219ページ)

担当者：大野弥穂子，水谷静夫

補助者：青木久美子

明治以降の送り仮名法に関する文献，すなわち明治22年〈1889〉内閣官報局「送り仮名法」より，昭和26年（1951）日本速記協会「会議録用字の手引き」まで16編（うち2編は送り仮名法の解説・批判に関するもの）を集め，そのうち12編の送り仮名法については，一一の言葉を書く際にどんな異同があるか一覧できるようにした「送り仮名対照表」を掲載する。さらに「送り仮名文献集」として，対照表に用いられた送り仮名法のうち7編について全文を翻刻し，対照表に用いなかった2編（昭和8年〈1933〉大阪毎日新聞『スタイルブック』の「送り仮名法」と上記日本速記協会『会議録用字の手引き』）の必要部分と，昭和14年〈1939〉の「送り仮名法（案）」に対する解説・批判2編を掲載する。最後に，送り仮名問題発生の基盤，送り仮名法の略史，文献解題よりなる解説を添える。

送りがな意識の調査

(報告40, 昭和46年〈1971〉, 183ページ)

担当者：斎賀秀夫，土屋信一，野村雅昭

補助者：菅野裕子，小幡利子

この調査のねらいは二つある。一つは，個人の表記行動における送り仮名の

「ゆれ」をとらえることである。送り仮名は個人の表記行動の中における「ゆれ」が大きく、それを分析することによって、はじめて送り仮名の「ゆれ」の本質に迫ることができる。いま一つは、送り仮名表記の実態をとらえることである。この調査は昭和42〈1967〉年に行ったもので、昭和34〈1959〉年内閣訓令告示「送りがなのつけ方」と、昭和48〈1968〉年内閣訓令告示「改定送り仮名の付け方」の中間に位置する。ただし、書かれたものを調査したのではなく、各個人にどう書くかという意識を聞いたものであること、および調査対象がサンプリングで選ばれたものではないので全国民的な実態ではないことなど注意を要する。調査対象は中学生・高校生・大学生および文字生活に関連のある職種の社会人（一般公務員・広報社内報関係者・教員・研究者など）計2955人で、年齢的には、十代から六十代に及ぶ。

結果は、磁気マークカードにより電子計算機に読み込み、各種集計を行った。集団間の比較からは、年齢の差が顕著で年齢が高くなるに従い少なく送ること、最終学歴と送り仮名表記、新聞を読む時間・雑誌を読む程度と送り仮名表記とは相関があるが手紙を出す回数などとは相関がないことがわかった。また、個人の表記行動の「ゆれ」の分析からは、表記行動の場面での「ゆれ」が非常に大きく、調査語の配列・選択肢の配列などに影響されること、複合語は誤読のおそれが少ないにもかかわらず、他の部分に引かれて単純語よりも多く送ること、高年齢層は、複合語の意味の軽重によって送り仮名を変える向きのあること、名詞は動詞よりも少なく送る傾向があるが個人差が大きいこと、動詞と名詞との関係を年齢別にながめると、年齢が高いほど名詞を少なく送る傾向があること、29歳以下では動詞と名詞とを同じに送る傾向も強いこと、類語の相関関係はまちまちで、数語をまとめて一つの傾向を見出すことはできないこと、などがわかった。

総合雑誌の用字

(報告19, 昭和35年〈1960〉, 55ページ)

担当者：林 大，永野賢*，斎賀秀夫，水谷静夫，石綿敏雄 *印執筆者

補助者：岡本美奈子，黒木玲子，小林茂子，高木翠，西尾美美子，広吉玲子，松垣玲子，宮地美保子

この調査は、現代書きことばにおける語の表記および漢字の用法の実態を分析して、表記法体系の改善への基礎的な資料を作成しようとするものである。そのため、「総合雑誌の用語」(報告12, 13)の調査に並行して、その用語の表記および漢字の用法を調査することにした。調査対象は、総合雑誌の調査で取り上げた全標本の半数で、延べ約十一万六千語である。これに使われた漢字の字数は、延べ約十一万七千字、異なり 2,781 字であった。そのうち、この報告書には、次の結果表を収めた。

- (1) 表記にゆれのある語の表
- (2) 漢字の使用度数分布表
- (3) 度数 9 以上の漢字とその音訓の表（付、当用漢字の五十音順索引）
- (4) 度数 9 以上の表外漢字とその用法の表（付、標本に現れた表外漢字の五十音順表）

なお、この調査は、「当用漢字の適用によって生ずる問題とその解決法の研究」という題目で、昭和 28 年度の文部省科学試験研究費補助金の交付を受けた。この研究では、上記の報告書に収めた調査とは別に、表外漢字のみを対象にした調査を実施し、その結果を年報 5 (36 ページ～58 ページ) に、「当用漢字の実施によって生じた問題とその解決法の研究」として報告した。

これらの調査の特徴は、漢字の単なる頻度数調査ではなく、どういう語を表すものとして用いられたかを明らかにしようとした点にある。つまり、漢字調査と語彙調査とを連関させて行ったところに特色があり、その後、国語研究所で実施した現代雑誌や現代新聞の語彙調査・漢字調査の先導役をつとめたものである。

現代新聞の漢字調査（中間報告）

（資料集8，昭和46年〈1971〉，90ページ）

担当者：野村雅昭*，田中章夫，南不二男，江川清，中野洋，齋岡昭夫，土屋信一，石綿敏雄，斎藤秀紀，村木新次郎 *印執筆者

補助者：美甘（菅野）裕子，小幡利子，武田道子，小高京子，神山（阿部）典子，小林尚美，紺野雅子，沢田さち子，沢村都喜江，篠田美代子，柴崎香苗，下山いくよ，田中由紀子，谷内レイ子，中野三千子，花井夕起子，堀江久美子，益子芳江，安藤陽子，白木千夏，桜井敏子

『現代新聞の漢字』（別項）の調査の中間集計の結果を報告したものである。標本数は、異なりで2,879，延べで630,313である。内容は、解説のほか、第I表—使用率順漢字表、第II表—層別使用度数順漢字表、第III表—五十音順漢字表の3種の漢字表からなる。

中間集計の報告であるため、使用率と使用度数のみを示し、用語例等の分析は行っていない。また、この結果は、全体集計の中に含まれることになる。ただし、全体集計では、テレビ番組欄や株式相場表などの表の類および案内広告を除いているが、ここでは、それを含んだ数値が示されている。さらに全体集計では、6種の層別に分類されているが、この報告では、12種類に細分されている点に特色がある。

現代新聞の漢字

（報告56，昭和51年〈1976〉，527ページ）

担当者：野村雅昭*，田中章夫，南不二男，江川清，中野洋，齋岡昭夫，土屋信一，石綿敏雄，斎藤秀紀，村木新次郎，佐竹秀雄，米田正人 *印執筆者

補助者：美甘（菅野）裕子，小幡利子，田島（武田）道子，宮田（小林）信子，白木千夏，小高京子，神山（阿部）典子，小林尚美，紺野雅子，沢田さ

ち子，沢村都喜江，篠田美代子，柴崎香苗，下山いくよ，田中由紀子，谷内レイ子，中野三千子，花井夕起子，堀江久美子，益子芳江，安藤陽子，桜井敏子

昭和四十一年の朝日・毎日・読売三紙一年分を母集団として行われた、電子計算機による新聞の語彙調査のデータに基づき、漢字の使用量・用法などにつき、調査を行ったものの報告である。標本数は、異なりで3,213、延べで991,375であった。母集団の推定延べ字数は、約一億一千万である。

報告書の内容は、4部に分かれる。「第1部 調査の概容」は、調査の目的・対象・経過方法などについて述べたものである。「第2部 調査結果の概容」は、使用度数分布、漢字の種類、音訓別の使用状況、用法別の使用状況について、分析結果を概説している。「第3部 主要調査結果一覧」には、第I表—全体使用率順表、第II表—用語例表、第III表—層別使用率順表、第IV表—総合用法別表、第V表—類別用法別表の5種の表を収める。「第4部」は、付録として、索引のほか、3種の資料を載せる。

報告書の中心となるのは「第3部」である。全体使用率順表は、出現頻度の大きい順に、2,013字について、全体の使用率、6種の層ごとの使用率、人名と地名に用いられた割合などを示したものである。用語例表は、各字母ごとに、その字がどのような語を表記するのに用いられたかを、音訓別に示し、さらに、その中を語構成単位別に分類している。そして、それぞれの用法別に、頻度数の大きいものを掲げたのが用法別表である。

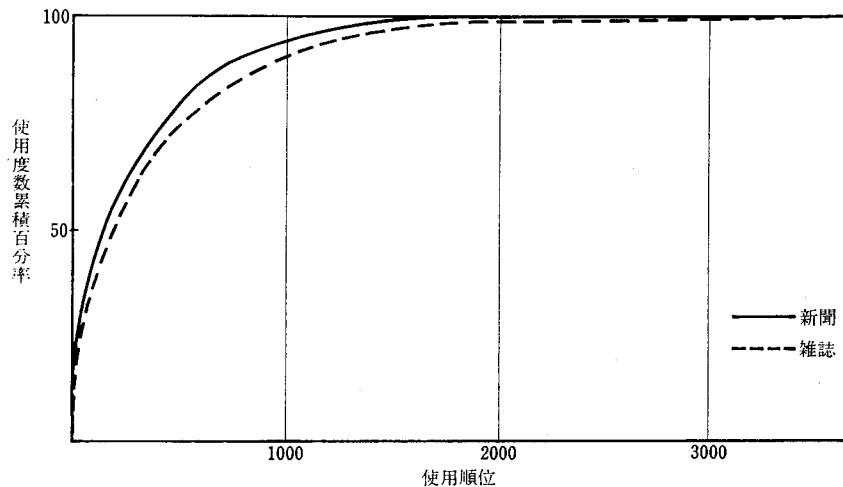
この調査の特徴は、漢字を単に使用率の面からだけとらえるのではなく、どのような言語単位を表記するのに用いられたかを、形態論的観点から、詳細に分析し、それを量的な構造としてとらえた点にある。単なる使用頻度調査では、これよりも大規模なものは存在するが、約百万字について、綿密な分析を施したものは、他にない。これによって、昭和40年ごろの新聞における漢字使用の実態が明らかになったのは、いうまでもないが、同時に、現代語における漢字の機能を考察する上で、基礎的な資料としての役割をも果たしている。さらに、日本語の表記の将来の姿を考える上でも、示唆的な内容を含んでいるということができる。

新聞語彙調査と雑誌九十種調査の使用度数分布の比較

(国語研報告56「現代新聞の漢字」より)

	新 聞	雑 誌		新 聞	雑 誌
上位の 10字	10.6%	8.8%	全体の 80%	512字	638字
50	27.7	25.5	85	633	777
100	40.2	37.1	90	800	992
200	56.1	52.0	95	1,081	1,358
500	79.4	74.5	96	1,168	1,479
1,000	93.9	90.0	97	1,277	1,617
1,500	98.4	96.0	98	1,426	1,832
2,000	99.6	98.6	99	1,659	2,157
2,500	99.9	99.5	100	3,213	3,328
3,000	99.9	99.9			

使用順位と使用度数累積百分率の関係



3. 文法、語彙

比喩表現の理論と分類

(報告57, 昭和52年〈1977〉, 632ページ)

担当者：中村 明

補助者：衛藤蓉子（現姓石川）、林実知代（現姓塚田）

日本語の表現力を確認し、現代文章における新しいレトリック理論を構築することを目指す一連の研究のうち、比喩表現の部分をまとめたものである。全体の構成は、第1部が理論的考察、第2部が分類で、その前後に序章と終章を配し、末尾に文献リストを添えた形になっている。

まず、序章で、比喩研究において残っている重要な課題を指摘する。第1部「比喩論」の第1編「比喩に関する基礎的考察」は、比喩表現のあらゆる分析の土台となる基本的な問題をとりあげたものである。その第1章「比喩の基本的性格」は、比喩という表現手段をとる目的、方法や機構の上の特色、コミュニケーション上の条件などについて論じたもの、第2章「比喩法の種類」は、修辞学における各種の比喩法を概説し、問題点を指摘したもの、第3章「比喩性の段階」は、比喩的である度合と中間性の問題を論じたものである。第2編「比喩研究の諸問題」は、いわゆる実用的文章と芸術的文章とにおける実際の比喩表現例をとりあげたもので、第4章「比喩的転換の諸相」は、関係の移行のいろいろなあり方を扱ったものであり、第5章「比喩効果の分析」は、イメージラーの観点から文学作品を扱った分析例である。第3編「比喩における思考と表現」は、比喩を表す言語形式とそこに実現する比喩的対比事実との関係を考察したので、第6章「言語形式と比喩的対比」は、その基本的考察、第7章「比喩の成立と言語的条件」は、より一般的な考察にあたる。

第2部「比喩表現の分類」は、比喩表現の言語的な観点からの分類を泉鏡花から大江健三郎に至る文学作品の実例を資料として実施したもので、言語形式面を中心とした受け手の視点からの分類試案を提出し、それに基づく指標比喩・結合比喩・文脈比喩の分類結果を整理して掲げ、そこから導かれる情報を表形式にまとめた二次資料を添え、比喩索引を付している。そして、終章は、本書の各部分の論及領域を明記して互いの関連を示したのち、この研究の位置づけと今後の方向を指したところで閉じられる。

現代語の助詞・助動詞——用法と実例——

(報告3、昭和26年〈1951〉、302ページ)

担当者：永野賢

補助者：石田渥子、永平孝子

本書は、現代語の実態調査の一つであって、文法的に大切な働きをする助詞助動詞の意味用法を、大量の実例にもとづいて帰納的に分類・整理したものである。構成は二部からなり、第一部では75の助詞が、第二部では27の助動詞が、それぞれ五十音順に配列されていて、細かく分類された意味・用法ごとに若干数の用例が付されている。

資料は、共通語として最も一般的な新聞雑誌34種（昭和24〈1949〉年4月から翌年3月までの1年分）から、任意抽出の方法で採集された約48,000の用例である（資料外の用例も適宜補われている）。新聞雑誌からの用例であるから、当然書きことばが中心であるが、会話文も用例としているので、「ねえってば」「何だい、それ？」のような話しことば特有のものも記述されている。本書以前には見られなかった大量のデータにもとづく網羅的な調査であり、それゆえにまた、意味用法の記述にも多くの新見が含まれている。

また本書では、記述の対象を従来のいわゆる助詞・助動詞に限らず、「とは」「からには」とか「なければならない」「において」とか「が早いか」のように、複合語的、慣用句的に用いられる“連接形式”や、「～さえ～ば」とか「～ほど～はない」とか「よほど～ないと」のように、前後相呼応して用いられる

“呼応形式”を積極的に取り上げている。これもまた従来見られなかつたことで本書の特色の一つに数えることができよう。

なお、本書は大量のデータにもとづく実態調査ではあるが、使用度数など数量的な扱いは行っていない。むしろその種の調査の基礎作業としての性格をもつていたのであるが、本書の後に実施された種々の語彙調査においては、本書の分類をもとに用法別使用度数の調査が行われている。

(参照 報告4『婦人雑誌の用語』295~314ページ、報告25『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊分析』69~114ページ)

動詞の意味・用法の記述的研究

(報告43、昭和47年〈1972〉、761ページ)

担当者：宮島達夫

補助者：高木翠、田原圭子、谷内レイ子

この調査の目的は、現代語動詞の意味・用法をくわしく記述することである。ふつうの辞典における記述にくらべて、つぎの二つの点がちがっている。(1)大量の用例にもとづいていること。(2)一つ一つの動詞を孤立させずに意味体系のなかであつかっていること。(資料とした用例については『動詞・形容詞問題語用例集』の解説を参照。)

「第1部 意味特徴の記述」では、日本語の動詞を区別するおもな意味特徴をあげ、これらの特徴をもつ動詞の意味を、類義語・反対語・上位下位語などの意味グループのなかで具体的に記述している。意味特徴は、1. 主体 2. 対象 3. 動作・作用の属性 4. 環境 5. 結果 6. 意図 7. 原因 8. 評価 9. その他 に大別し、さらに細分した。たとえば「3. 動作・作用の属性」のなかには、段階、量・程度、いきおい、はやさ、方向、などの項目をたて、また「方向」のなかを、上下、左右、前後などの特徴にわけて、それぞれの特徴をもつ動詞の意味が記述してある。

「第2部 個別の記述」では、基本的な動詞12語（あがる、のぼる、あげる、うく、うかぶ、でる、あける、のびる、のむ、くう、はかる、よむ）と感

覚動詞の一群とを分析している。とくに重点がおかれてているのは、多義語の内部構造、つまり、基本的な意味からどのようにして派生的な意味が生じるか、ということである。

「第3部 意味とほかの性質との関係」では、二つの問題をあつかっている。「1. 動詞の意味と文法的性質」では、動詞の語彙的意味がアスペクト・ボイスなどの文法的カテゴリーとどのような関係にあるかをみるとともに、「AがBにかつ ⇔ BがAにまける」のように構文的に対応する動詞、「AがBにみちる ⇔ BがAでみちる」のように同義的な二つ以上の文型をつくりうる動詞などを記述している。「2. 動詞の意味と文体的性質」では、文体的にたかい（文章語的な）動詞は、大規模な、公的な、抽象的な、またはよい現象に、文体的にひくい（俗語的な）動詞は、あらあらしい動作をあらわす傾向があることが指摘されている。

形容詞の意味・用法の記述的研究

(報告44、昭和47年〈1972〉、467ページ)

担当者：西尾寅弥

補助者：高木翠、田原圭子、谷内レイ子

調査の目的・特徴・資料などは動詞のばかりと共通なので、『動詞の意味・用法の記述的研究』の解説を見ていただきたい。なお、ここで対象とする形容詞には、ナ型形容詞（いわゆる形容動詞）もふくまれている。

「第1部 形容詞の意味の諸側面」はこの報告のおもな部分である。おなじ意味グループに属して反対語・上位下位語などの関係にある形容詞を分析し、これにもとづいて、いくつかの問題を論じている。「1. 感情形容詞と属性形容詞」では、両者を区別する形式的特徴、両者の相互交渉、感情形容詞の下位区分についてのべてある。「2. 属性の主体と内容」では、形容詞のあらわす属性の主体を、広汎なものごと、もの・ひと・ことの四つにわけ、そのおののグループのなかで、どのような意味特徴がみられるかが、あきらかにされている。「3. 程度」では、形容詞とこれを修飾する程度副詞との関係、ある

現象に対して「ながい」「おおきい」など程度性をもった形容詞を適用する基準、形容詞における反対語などの問題がとりあげられている。「4. 形容詞の意味における主観的側面」では、意味内容における客観的因素と主観的因素との関係を論じ、評価的因素をふくむ形容詞の意味を記述している。第1部には、また、主体・程度・評価などの意味特徴に重点をおいた、形容詞84組の分析例が付してある。

「第2部 個別的記述」では、基本的な形容詞6語（厚い、うすい、たかい、ふかい、かたい、あかるい）をとりあげて、その意味をくわしく記述している。重点は、動詞のばあいと同様、基本的な意味から派生的な意味が生じていくようす、特に、そのさい形容詞がどのような名詞とむすびつくか、ということである。

動詞・形容詞問題語用例集

(資料集7、昭和46年〈1971〉、272ページ)

担当者：西尾寅弥、宮島達夫

補助者：高木翠

動詞・形容詞の記述的研究にあたって利用した大量の用例の一部を、いくつかの観点から整理したものである。これらの用例は、52の文学作品、24の科学説明文・論説文、および現代雑誌九十種・総合雑誌の語彙調査資料からえたもので、総計動詞約45万、形容詞約15万にのぼる。内容は、つぎの4部からなる。

- I 辞典にあまり登録されていない動詞・形容詞の用例
- II いくとおりにも読みうる動詞・形容詞の用例
- III 自動詞か他動詞か決めてくい語の用例（辞典によって自他の認定がやれているものの一覧表を付す）
- IV 語末からの遊びきによる動詞・形容詞一覧

同音語の研究

(報告20, 昭和36年 <1961>, 290ページ)

担当者：松尾拾，市川孝，大久保愛，田中章夫

補助者：山田立子，露峰裕子

現代日本語には同音語が多いと言われる。この同音語は誤解や難解を引き起こす原因となり、コミュニケーションの上で障害となることが少なくない。そして、その障害の程度や性質はさまざまあって決して単純なものではない。

この調査研究の目的は、同音語によるまぎれやすさが意志の伝達を妨げるとするならば、その支障がどの程度のものかを調査すること、同音語を判別する際にどのような要因が働くかを分析すること、そして、円滑なコミュニケーションを行う上で何が問題になるかを調べることにある。

一口に同音語と言っても、まぎれやすいものと、まぎれる可能性が少ないものとがある。そこで、まず同音語を次の規準にてらしあわせて分類した。その規準とは、(1)位相、(2)品詞性の異同、(3)慣用的用法の有無、(4)アクセントの異同、(5)造語力、(6)使用頻度の6つである。

さらに同音語の判別には、これらの規準の他に、言語使用者の言語的環境が影響を与えると考えられる。そこで、この点に関して、高校生、大学生を対象とする調査を実施した。その結果、同音語のまぎれやすさは、その語がもっている性質、つまり、品詞性・慣用的用法・造語力・語の構成法などを手がかりにしても、あるいは、文中にあっては、適切な文脈やその語の位相などを手がかりにしても、ある程度までは見分けられるものであることがわかった。また、真にまぎれやすい、つまり、判別の手がかりのない同音語は案外少なくて、それには同音類義語が多いということが明らかになった。そして、同音語の問題は、それを使う人の知識量・年齢などに左右される面がきわめて大きいことが実証された。

なお、この報告書の後半部分には、同音語集として、7,803の同音語の表が掲載されている。

類義語の研究

(報告28, 昭和40年 <1965>, 336ページ)

担当者：松尾拾，西尾寅弥，田中章夫

補助者：露峰裕子，河東はるみ

日本語には、漢語や外来語が非常に多いので、ほとんど毎日のように類義語の問題にぶつかる。そこで、この研究は、類義語をいろいろな面から考察し、類義語研究の一般的方法の確立をはかった。

この報告書の前半は、語の意味や語感という面から、討論によって次のことをについて考察している。

1. 類義語間における客観的な意味の相違（例、林／森）と、その相違に関して、人々の間でどの程度一致がみられるか。
2. 非常に近い類義語（例、女性／婦人）の間の情意的な意味の相違と、その相違に関して、人々の間でどの程度一致がみられるか。たとえば、所与の条件のもとで人々はどの語を選ぶか、それを好んで選ぶ要因は何か、また類義語群（例、石けん／シャボン）の中から普段選んで用いる語について老年層と若年層の間にどのような違いがあるか、など。

この考察の結果、一般に類義語の正しい使い方がなされていること、しかし類義語間の解釈については個人間の相違というものが不可避であるということが明らかになった（もっとも、情意的な問題に関しては類義語間で、予期したよりも多くの人々の間で一致が見られた）。

この書の後半は、マスコミで論議をひき起こしているいくつかの事例をとりあげ、なぜそれらが問題になったのかを、いくつかのポイントを決めてアンケート調査を行って調べた。その結果、外来語が氾濫していること、同音類義語がはっきり規定されていないこと、に問題があることがわかった。また、いろいろな経路を通ってはいって来て、音や意味の似たあいまいな類義語ができるということとか、同音類義語と言っても、はっきりと区別されて用いられるものやそうでないものがあるということなどもわかった。これらは、日本語語彙

の再編成にとって基礎的データの一つとなりうる。

この書の巻末に1422組の同音類義語の語彙表が付いている。

分類語彙表

(資料集6, 昭和39年〈1964〉, 362ページ)

担当者: 林 大

報告21『現代雑誌九十種の用語用字(1)』に報告のある語彙調査で得られた高使用率の語に、阪本一郎氏『教育基本語彙』に収める語その他を合わせた約三万三千語を、意味の上から分類して、798項に配分した、一種の類義語集である。その分類は、報告4『婦人雑誌の用語』及び報告13『総合雑誌の用語(後編)』に収める分類語彙表の組織を大体において踏襲したものであるが、それらよりも分類が細かく分野が広がって、偏りが修正されている。

本表に先立って分類項目一覧をおき、後に収載語の五十音順索引を附する。

分類は、まず品詞論的に、1. 体の類(名詞), 2. 用の類(動詞), 3. 相の類(形容詞, 形容動詞等), 4. その他(接続詞, 感動詞等)の4類に大別し、体の類に次の5部を立てている。

- .1 抽象的関係(人間や自然のあり方のわく組み)
- .2 人間活動の主体——人・社会・機関等
- .3 人間活動そのもの——精神及び行為
- .4 人間活動の生産物——生産の結果及び用具
- .5 自然——自然物及び自然現象

用の類、相の類もこれにならってそれぞれ、.1, .3, .5の3部を立てた。分類番号を附した小項目798は、以上の類及び部に、次のように配分されている。

- | | | | |
|---------------|-------------|--------------|------------|
| 1.1 (10項156目) | 2.1 (9項61目) | 3.1 (10項40目) | 4. (7項23目) |
| 1.2 (9項60目) | — | — | |
| 1.3 (9項192目) | 2.3 (9項69目) | 3.3 (7項31目) | |
| 1.4 (8項77目) | — | — | |
| 1.5 (9項60目) | 2.5 (3項15目) | 3.5 (6項14目) | |

この分類語彙表は、現代日本語についての最初の試みとして、ことばがとらえうる意味の世界におけることばの分布を見渡して基本語彙、基本漢字を選ぶための資料たることを主目的として編まれたが、同時に、特定語彙間の比較、特定語彙の性格づけのための物指しともなり、また一種の実用的な表現辞典としても利用されている。

4. 語彙調査

語彙調査——現代新聞用語の一例——

(資料集2, 昭和27年〈1952〉, 104ページ)

担当者: 林 大, 斎賀秀夫

補助者: 金丸路得子, 長橋紀江

これは語彙調査の方法論を確立するための一つの試みとしてなされた調査である。調査の対象として、朝日新聞東京本社最終版の昭和24年6月1日から6月30日までの1か月間の全紙面をとりあげ、全数調査を行っている。この調査の目的は、ある1種の新聞について、1か月間にどれほどちがった種類の語が用いられるか、それぞれの語がどれほどくりかえし用いられるかを知ることにあった。その結果、助詞・助動詞を除いて、延べ約237,000語、異なりで約15,000語が採集された。また、この資料には、出現度数10以上の語、約3,300語の語彙表が掲載されており、さらに附説として、用語の度数分布について、(1)日と用語、(2)記事別と用語、(3)用語の品詞別という3つの観点からの分析が述べられている。

現代語の婦人雑誌の用語 語彙調査

(報告4, 昭和28年〈1953〉, 338ページ)

担当者: 林 大, 永野賢, 大野弥穂子(現姓水野), 斎賀秀夫, 水谷静夫, 字野義方, 古田東湖

補助者: 青木久美子, 赤川光永, 色川澄, 潮田悦子, 大島禎子, 岡田録子, 岡本美奈子, 書上文子, 坂田俊子, 高木翠, 滝井昭子, 富永洋子,

中込芳子，永平孝子，野口喜久子，橋本圭子，松垣玲子，宮城曜子，森田倭文子，頬稠子

昭和25年の1年間ににおける『主婦之友』，および『婦人生活』を調査対象とした現代語の語彙調査である。婦人雑誌を選んだのは，日常の家庭生活用語，とくに衣食住に関する語彙の実態を明らかにしようとしたためである。

調査方法は標本調査（抽出比約1%）によった。『主婦之友』では全体約90万語（推定）から約15万語の延べ語数を，『婦人生活』からは，全体約33万語（推定：実用記事のみ）から約5万語の延べ語数を抽出し，調査した。その結果得られた異なり語数は，『主婦之友』で約二万七千語，『婦人生活』で約一万語であった。このうち，報告書には，使用度数9回以上の語，約二千七百語の語彙表（五十音順のものと，使用率順のもの）を収めた。

また，この報告書には，次のような項目についての分析結果がのせられている。

- (1) 語の使われる度合に関する分析（基本語彙をきめる尺度として，使用率の大小，散らばり度などについて分析したもの。語の基本度を定めるうえでの理論的試みとして貴重なものである。）
- (2) 意味論上の試み（度数5以上の語約四千三百について，それらの語が表す意味の世界の分野を，分類語彙表の形で示したもの。日本語の意味分野に関する研究としては最初のものである。）
- (3) 語構造に関する分析（標本に現れたすべての語の中から，字音要素をその構成の一部または全部として含む語を取り出し，その形式的な構造について分析したもの。）
- (4) 助詞・助動詞の分析（『婦人生活』の実用記事の中から，ランダム抽出により約一万例の助詞・助動詞を抽出し，語別，用法別に使用度数を調査したもの。）

この調査でとった層別法・抽出法には，進んだ統計的技術が用いられており，その意味で，国語研究所における本格的な語彙調査の先駆をなすものである。また，結果の分析においても，上記(1)および(2)に見られるような新分野の研究を開拓したものとして評価される。

現代語の 総合雑誌の用語 語彙調査

前編（報告12, 昭和32年〈1957〉, 182ページ）

後編（報告13, 昭和33年〈1958〉, 117ページ）

担当者：林 大, 永野賢（前編のみ）, 斎賀秀夫, 水谷静夫, 石綿敏雄

補助者：岡本美奈子, 黒木玲子, 高木翠, 西尾美美子, 西山洋子, 橋本圭子, 広吉玲子, 松垣玲子

総合雑誌『世界』『中央公論』『文芸春秋』の類と, それに似よりの雑誌合計13種（昭和28年7月～29年6月号）の語彙を調査した結果の報告書である。総合雑誌を選んだのは, 知的な思想的な面での普通用語の実態を明らかにしたいと考えたためである。

調査方法は標本調査（抽出比 $1/40$ ）によった。13種の総合雑誌一年分の延べ語数約900万語（推定）から約二十三万余語を標本として抽出し, 調査した。その結果得られた異なり語数は約二万三千語であった。このうち, 使用度数7回以上の語約四千二百語について, 五十音順ならびに使用率順の語彙表と, その使い方を, 前編に収録した。

後編では, この調査の輪郭と方法について記述し, さらに, 調査対象にした語彙に関する, 下記のような分析結果を収めた。

- (1) 語彙構造の量的分析……語彙量の推定（調査対象が全体でどのくらいの異なり語を含むか）と, 使用率の分布函数を求めることとの二つの問題を扱った。
- (2) 意味から見た語彙の構造……報告4に引き続いて, 総合雑誌語彙の意味分類を行い, 分類語彙表の形で示した。
- (3) 語構成に関する分析……標本の半分に当たる延べ約十二万語の品詞別による分布について一つの結果を示すとともに, 使用度数10回以上の語をおもな対象として, 語構成の実態を分析した。

また, 付録として, 「語彙調査の成立根拠と基本的諸概念の定義」「この調査

で採った抽出・推定法」「同じ語か異なる語かの線型判別函数による決定」などを、卷末に添えた。

この調査は、婦人雑誌の語彙調査に続くものであるが、方法論的にも、また結果の分析においてもさらに深められたものといえる。語彙表については使用率の大きい方から約一千語に対して、推定精度および信頼度95パーセントのもとでの信頼区間が算出されているが、これは世界でも最初の試みである。また、上記(1)～(3)の分析項目についても、婦人雑誌のそれに比べて研究がさらに広くかつ深く進められている。

なお、この調査の進行の過程において、『国立国語研究所年報』に、次のような各報告をのせた。

語彙調査に生ずる狂いの種類・原因・対策（年報5 22ペ～35ペ）

総合雑誌の語彙調査 6万語の分析（年報6 25ペ～52ペ）

語彙の総量の推定（年報6 52ペ～59ペ）

語彙調査の作業過程で生ずる狂いの数量的分析（年報7 94ペ～105ペ）

用言30語の用法（年報8 32ペ～53ペ）

現代雑誌九十種の用語用字

第一分冊 総記および語彙表

（報告21、昭和37年〈1962〉、321ページ）

第二分冊 漢字表

（報告22、昭和38年〈1963〉、256ページ）

第三分冊 分析

（報告25、昭和39年〈1964〉、337ページ）

担当者：林 大、見坊豪紀、斎賀秀夫、水谷静夫、石綿敏雄、宮島達夫、松本昭

補助者：橋本圭子、高木翠、鈴木百合子、小林さち子、植田房子、池田稔子、岡本美奈子、松垣玲子、西尾美美子、西山洋子、渡辺嘉子、宇野瑠美子、本多レイ子

婦人雑誌・総合雑誌の語彙調査（報告4、12、13）に続く、雑誌の全分野を

対象とした調査である。

調査対象は、成人用でかつ発行部数の割合に多い雑誌（季刊、月刊、旬刊、週刊）である。ただし学術・技術・専門雑誌を含まない。以下の五部門九十種の雑誌の、昭和31年刊行分の本誌・増刊号および付録の本文、全体で22.6万頁、延べ語数1.6億 β 単位（うち助詞・助動詞6千万語）が対象である。

〔評論・芸文〕12種（世界、群像、短歌、芸術新潮、中央公論等）

〔庶民〕14種（文芸春秋、家の光、サンデー毎日、週刊朝日等）

〔実用・通俗科学〕15種（ダイヤモンド、時の法令、科学朝日等）

〔生活・婦人〕14種（主婦の友、暮らしの手帖、装苑、スタイル等）

〔娯楽・趣味〕35種（オール読物、アサヒカメラ、映画の友、野球界等）

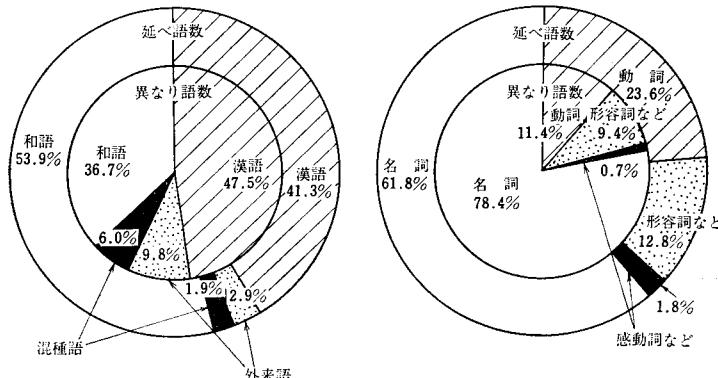
調査語数は、自立語43.8万語、助詞・助動詞9.5万語である。

この調査では、1/10,000台の小さな度数に対しても推定精度を保証するような新しいサンプリング法をとった。これは層化集落抽出法の一種である。抽出単位は、ランダムに組み合わせて操作的に作られた、各層内でその延べ語数がほぼ一定になるような、雑誌 $1/8$ ページ大に当るものである。これによって手作業による場合の用語調査の方法はほぼ確立したと考えられる。

報告21 調査の概観、標本抽出法と使用率推定法についての理論的説明、および語彙表をのせる。標本使用度数7以上の語を、助詞・助動詞（140語）は

雑誌九十種調査の語種・品詞別の異なり語数と延べ語数（百分比）

（国語研報告25「現代雑誌九十種の用語用字」第3分冊より）



五十音順表にして、その他は全体の五十音順表と使用率順表および各層の使用率順表にして掲げた。また標本度数50以上の語には使用率の推定精度もあわせて示した。

度数分布	(標本度数)	(異なり語数)	(総延べ語数に対する割合)
1 ~ 6	32,782	14%	
7 ~	7,234	86	
(50 ~)	(1,220)	(63)	
計	40,016	100	

報告22 語彙調査用標本の冒頭から無作為に抽出した標本（全体の%）での度数9以上の漢字1,995の度数表と、音訓用法別漢字表およびいくらかの分析を示す。最後に標本にあらわれたすべての漢字の索引をつけた。

度数分布	(標本度数)	(異なり字数)	(総延べ字数に対する割合)
1 ~ 8	1,333	1.4%	
9 ~	1,995	98.6	
計	3,328	100.0	

注1) 当用漢字は度数9以上1,673、度数8以下162、度数0は15である。

注2) 語彙調査の標本全体に使われた異なり文字数は3,505である。

報告25 次の章と三冊の内容索引・データの概略・報告書要目を含む。

1. 語の基本度……基本度函数 ($f = a + b \log p + c \log sc$) は、使用率と散らばり度の観点で量的性質が似た語 - 5語の組 - 25組に対する専門家の評価を使い、最小二乗法によって設定された。使用率の大きい1,200語の基本度表、基本度の大きい700語の意味分類表をのせた。
2. 語彙の量的な構造……次の三つの観点から分析されている。(イ) 使用率しかじかの値以上の語がいくつあるか。それで延べ語数の何割をおおうか。(ロ) 語種・品詞間における分布の差異(ハ)動詞・形容詞の活用形の分布。
3. 助詞・助動詞の用法……意味・用法別度数表、文節形度数表を示す。類義表現および〈かかり〉の量的性質について分析した。
4. 語構成……4,381の複合語の表を示し、それについて分析した。
5. 同じ語か異なる語かの判別……語の歴史的な変化や体系のずれの面からこの問題を概観した。判別一覧表(974項)を示す。

上記の研究に関連したいくつかの内容が年報(10, 11)に報告されている。

5. 電子計算機利用

電子計算機による新聞の語彙調査

- I (報告37, 昭和45年 <1970>, 342ページ)
- II (報告38, 昭和46年 <1971>, 314ページ)
- III (報告42, 昭和47年 <1972>, 159ページ)
- IV (報告48, 昭和48年 <1973>, 530ページ)

担当者：大石初太郎（Iのみ），林大（Iのみ），林四郎，石綿敏雄，斎藤秀紀，木村繁（Iのみ），田中章夫，南不二男（I, IIのみ），江川清，中野洋，土屋信一，野村雅昭，村木新次郎（II, IIIのみ），齋岡昭夫（III, IVのみ）

補助者：小高京子，小幡利子，神山(阿部)典子，小林尚美，紺野雅子，沢田さち子，沢村都喜江，篠田美代子，柴崎香苗，下山いくよ，田中由紀子，谷内レイ子，中野三千子，花井夕起子，堀江久美子，益子芳江，安藤陽子，白木千夏，桜井敏子

昭和41年発行の新聞三紙（朝日，毎日，読売）に関する語彙調査の報告である。調査集計及びデータ管理は昭和41年度に導入されたコンピュータ HITAC - 3010と漢字入力装置を使用して行った。調査単位としては、文節に相当する“長い単位”，形態素に相当する“短い単位”的二単位を定めた。

I, II, IIIはその中間報告である。

Iは長単位，短単位について各々度数順語彙表，五十音順語彙表が中心となっている。その他，新聞紙面の記事（文種，話題，署名態度，位置）ごとに付けられた四層四十七種の層別情報による語彙表が報告されている。この調査に

おける語彙は短単位 94万、長単位 67万である。長単位は度数 6 までで 11,044 語、短単位は度数 5 までで 13,206 語で、延べの累積は全体の 94% に達する。

II は短単位についての語彙論、文法論からの分析にたえられる資料提供を目的とするもので、語彙表は外来語、品詞別の出現度数順表、五十音順語彙表、その他、同形及び同音語について報告した。なお、品詞別表は、動詞、サ変語幹、形容詞、形容動詞、副詞、助詞、助動詞、非用言的接辞の八表である。

III は造語要素、接辞、語構成の実態を知る手がかりとなる資料提供を目的とする。追加された表は、1) 語末の形で分類した形容動詞表、2) 助詞、助動詞のつながり方の実態を示す連接表である。

IV は長単位に関する最終結果の報告である。調査対象は昭和41年の朝日、毎日、読売の三紙、推定母集団一億二千万語、データ抽出方法は抽出比六十分の一のエリアサンプリングである。サンプリングによって得られた語数は延べ約二百万語であるが、本報告は、これらを集計した異なり約十九万語について度数順表（層別表を含む）、五十音順表の語彙表を示したものである。

この調査は、電子計算機を使った最初の語彙調査である。これまで国立国語研究所で続けられてきた、婦人雑誌・総合雑誌・現代雑誌九十種の語彙調査のあとを受けて、大量データを短期間に集計すること、さまざまの計量的分析を行うことを目標とした。全出現漢字を入力するための盤外字（漢字テレタイプの盤面にない文字）処理システム、そのための漢字テレタイプの設計、配列作業のための簡易五十音順配列システム、文脈付き用例表（K W I C）作成システムなどが作成された。これらについては「電子計算機による国語研究」に発表されている。なお、この語彙調査にともない、次の研究報告があった。

言語単位としての形態素（昭和40年〈1965〉5 ページ、宮島達夫）

言語単位としての単語（文節）（昭和40年〈1965〉13 ページ、鈴木重幸）

調査単位案（昭和41年〈1966〉13 ページ、進藤咲子、鈴木重幸、田中章夫、林大、宮島達夫）

この調査は、日本語の情報処理の研究に多くの影響を与えた。また、文脈付き用例表（K W I C）作成システムは、用語総索引システムとして発展し、「志賀直哉『城の崎にて』用語索引」（1971）が作成され、さらに、「漱石鷗外

の用語の研究」において、「森鷗外『寒山拾得』用語索引」(1974)が作成され、「山椒大夫」「雁」「青年」「硝子戸の中」「坊つちゃん」「草枕」などの総索引の作成も試みられた。

電子計算機による国語研究

- I (報告31, 昭和43年 <1968>, 178ページ)
- II (報告34, 昭和44年 <1969>, 199ページ)
- III (報告39, 昭和46年 <1971>, 164ページ)
- IV (報告46, 昭和47年 <1972>, 131ページ)
- V (報告49, 昭和48年 <1973>, 255ページ)
- VI (報告51, 昭和49年 <1974>, 188ページ)
- VII (報告54, 昭和50年 <1975>, 198ページ)
- VIII (報告59, 昭和52年 <1976>, 202ページ)
- IX (報告61, 昭和53年 <1978>, 138ページ)

昭和41年以来、電子計算機HITAC 3010(後HITAC 8250に更新)・漢字テレタイプライト・高速漢字プリンタ(昭和49年導入)を用い、新聞や教科書の用語用字調査、文学作品の用語索引の作成、およびその言語学的分析をおこなってきた。本書には調査の概要、プログラムシステムの説明、言語の自動処理に関する研究、言語の分析等が報告されている。掲載論文は次の通り。

報告31……新聞語彙調査の概略と語彙分析法試案(林四郎), 語彙調査第一段階のプログラムの基本的な考え方(石綿敏雄), 国研用漢字テレタイプと同機利用の言語情報処理(松本昭), 電子計算機と漢テレによる用語総索引の作成(斎藤秀紀), 新聞語彙調査のサンプリング・プログラム(田中章夫・斎藤), 電子計算機によるワードリスト作成上の一問題(田中), 漢テレ・入力データのチェック(木村繁), 言語の意味と言語情報処理(石綿)

報告34……新聞語彙調査における層別とその意味(林四郎), 電子計算機による語彙調査(斎藤秀紀), 層別特徴語の判別(木村繁), 語彙調査の類別語彙表

について（中野洋）、「活用形処理」の自動化に関する一方式（江川清）、C O B O Lによる漢字索引作成（石綿敏雄）、新聞使用漢字の試行的分析（野村雅昭）、漢字かなまじり文を全文カナ書き・ローマ字書きに変換するシステムについて（田中章夫）、構文解析自動化の研究Ⅰ（石綿）、構文解析自動化の研究Ⅱ（木村）

報告39……語彙調査と基本語彙（林四郎）、新聞用語調査の用例印字プログラム“C O B O L - K W I C”（石綿敏雄）、電子計算機による語彙調査Ⅱ（斎藤秀紀）、品詞認定の自動化（中野洋）、新聞語彙調査の同音語と同形語（田中章夫）、新聞漢字調査の機械処理システム（野村雅昭）

報告46……漢字かなまじり文の文字連続（野村雅昭）、カナ入力による日本語文総索引の作成（土屋信一）、あいまいさを伴う表現の構造についての一考察（村木新次郎）、助詞「に」を含む動詞句の構造（石綿敏雄）、指示連体詞「この」「その」の働きと前後関係（林四郎）

報告49……電子計算機による語彙調査と同語異語の処理（石綿敏雄）、電子計算機による語彙調査Ⅲ（斎藤秀紀）、用語の集中度と共通度（村木新次郎）、複次結合語の構造（野村雅昭）、現代日本語における音素連続の実態（中野洋）、文語形・口語形活用語の代表形の変換処理について（鶴岡昭夫）、自動抄録処理におけるキー・ワードの性格（田中章夫）、人間の精神活動を意味する動詞の用法（石綿）、コンピュータによる言語資料の研究（林四郎）

報告51……漢字プリンターを使用したターンアラウンドシステム（斎藤秀紀）、パターン分類による音声の分析（野元菊雄・江川清）、三字漢語の構造（野村雅昭）、抽象的関係を意味する動詞の用法（石綿敏雄）、動詞を中心とした語彙の分類（石綿）

報告54……新聞の用語と雑誌の用語（石綿敏雄）、新聞における漢字のまぜ書き表記について（土屋信一）、四字漢語の構造（野村雅昭）、現代日本語における音素連続の実態Ⅱ（中野洋）、漢字プリンターを使用したターンアラウンドシステムⅡ（斎藤秀紀）、文節タイプ連続の研究（鶴岡昭夫），“文の長さ”的統計学的一考察（米田正人）、名詞・形容詞述語文の構造（石綿）、日本語の生成語彙論的記述と言語処理への応用（石綿）

報告59……国語研究のための索引作成システム（鶴岡昭夫），索引作成のためのプログラムライブラリ（中野洋），言語処理におけるターンアラウンド・システム（斎藤秀紀），変形とその逆探知を含む構文解析（石綿敏雄），現代新聞の片仮名表記（土屋信一），漢字調査における統計的尺度の問題（田中章夫），表記のゆれを測る（佐竹秀雄）

報告61……高校教科書の同語異語判別システム（土屋信一），言語処理における一貫処理の研究（中野洋），多目的漢字入力システムの試案（斎藤秀紀），人工知能のための言語分析（田中卓史），「～な」と「～の」について（鶴岡昭夫），接辞性字音語基の性格（野村雅昭）

なお，関連内部資料として漢テレコードブック（1968年），漢テレ盤外字逆引表（'71），基本語い・言語情報処理資料—論文翻訳集（'66，7編），コンポーテ（1963），月報（'65～'68論文数33編），LDP—月報別冊（'68～'74，70編），季報（'75～，69編）がある。

6. 各 地 方 言

日本方言の記述的研究

(報告16, 昭和34年〈1959〉, 368ページ)

国立国語研究所地方研究員および同所員が全国50地点で行った方言の記述的調査研究の中から, 15地点分を選んで編集したもの。地点名および執筆者名は次のとおり。

1. 北海道檜山郡江差町 (石垣福雄)
2. 山形県北村山郡東根町 (斎藤義七郎)
3. 千葉県館山市竹原 (大岩正仲)
4. 神奈川県愛甲郡煤ヶ谷村 (日野資純)
5. 石川県金沢市彦三一番丁 (岩井隆盛)
6. 愛知県西春日井郡北里村 (野村正良)
7. 奈良県磯城郡織田村 (西宮一民)
8. 和歌山県東牟婁郡高池町 (村内英一)
9. 兵庫県高砂市伊保町 (和田実)
10. 愛媛県宇和島市 (杉山正世)
11. 大分県大野郡川登村 (糸井寛一)
12. 宮崎県西臼杵郡日の影町 (野元菊雄)
13. 鹿児島県薩摩郡高城村 (上村孝二)
14. 鹿児島県揖宿郡頴娃町 (柴田武)
15. 鹿児島県西之表市西之表 (上村幸雄)

本書は、それぞれの地点ごとに、音韻 (アクセントを除く) と文法 (活用語の活用形式・個々の活用形の用法・特徴的な助詞の用法など) について、一定

の基準に従って体系的に記述しており、方言記述の方法を知る上で、また、諸方言の音韻・文法上の特徴を概観するのに役立つ。執筆者によって記述法にかなりの差がみられる部分もあるが、それぞれに特色があり、記述のモデルとして参考になる。本書の編纂はその後の方言の記述的研究に影響を与える、また、類書の刊行を生む契機となった。なお、本書への掲載について割愛した地点の報告書は国立国語研究所図書館で見ることができる（「各地方言報告書」の項を参照）。

沖縄語辞典

（資料5、昭和38年〈1963〉、854ページ）

主たる担当者：島袋盛敏（研究委託）、上村幸雄

補助者：白沢宏枝

沖縄の首里（琉球王朝時代の首府、現在は那覇市の一部）の方言の辞典である。首里方言は琉球方言の中で、もっとも有力な地位を占めるもので、この辞典は特に首里の士族の用いる方言を扱っている。

本文の見出し語数は約15,000で、そのすべてが音韻表記で記され、アクセント記号を添えられている。また、琉歌や組踊りに使われる語には伝統的な表記を付した。例文も豊富である。解説篇では、首里方言の解説に続いて、首里方言の音韻と、動詞・形容詞の形態論が詳細に論じられている。首里方言から引くだけでなく、索引篇を用いれば標準語から引くこともできる。巻末には付録として地名一覧がつけられている。

なお、この辞典は国立国語研究所が島袋盛敏氏に稿本の作成を委託し、その稿本をもとに服部四郎氏の助言を受けつつ、上村幸雄が比嘉春潮氏とともに検討を加え、上村幸雄が最終的に書き直して完成したものである。

方言談話資料(1)——山形・群馬・長野——

(資料10, 昭和53年 <1978>, 368ページ)

編集担当者：飯豊毅一, 佐藤亮一, 真田信治, 沢木幹栄, 白沢宏枝

収録・文字化担当者（協力者）：山形——矢作春樹, 群馬——上野勇（杉村孝夫）, 長野——馬瀬良雄

言語変化研究部第一研究室が、昭和49年度から同51年度にかけて、「各地方言資料の収集および文字化」のための研究」というテーマのもとに、全国各地で行った方言談話の録音文字化資料である。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で収録・文字化（標準語訳・注つき）し、国語研究の基礎的な資料とすることを目的として、当研究所地方研究員の協力を得て実施されたものである。この成果は、今後順次刊行される予定であるが、本書は、その第1集である。本書（の一部分冊）にはカセットテープが付けられている。なお、本書とは別に、当研究所では、昭和40年から、方言録音資料シリーズ（1～15）を作成してきた。これは、本研究の基礎となった資料である。以下に列記する。

- 1 『鹿児島市方言録音資料』（昭和40年 <1965> 64ページ）

担当者：上村幸雄, 徳川宗賢, 柴田武, 上村孝二

- 2 『宮崎県都城市方言録音資料』（昭和42年 <1967> 49ページ）

担当者：宮地裕

- 3 『鹿児島県川辺郡笠沙町片浦方言』（昭和43年 <1968> 88ページ）

担当者：上村孝二

- 4 『岐阜県不破郡垂井町岩手方言』（昭和43年 <1968> 89ページ）

担当者：奥村三雄

- 5 『高知県高知市朝倉米田方言』（昭和43年 <1968> 42ページ）

担当者：土居重俊

- 6 『秋田県男鹿市脇本大倉方言』（昭和43年 <1968> 75ページ）

担当者：北条忠雄

- 7 『鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦方言』(昭和43年 <1968> 39ページ)
担当者：上村孝二
- 8 『高知県幡多郡大方町方言』(昭和43年 <1968> 39ページ)
担当者：土居重俊
- 9 『石川県羽咋郡志雄町荻市方言』(昭和43年 <1968> 68ページ)
担当者：岩井隆盛
- 10 『愛知県小牧市藤島方言』(昭和43年 <1968> 30ページ)
担当者：山田達也
- 11 『京都市方言』(昭和44年 <1969> 127ページ)
担当者：上村幸雄, 徳川宗賢, 高橋太郎
- 12 『沖縄・瀬底島方言』(昭和46年 <1971> 61ページ)
担当者：内間直仁
- 13 『静岡市旧大川村方言(1)』(昭和47年 <1972> 92ページ)
担当者：山口幸洋
- 14 『静岡市旧大川村方言(2)』(昭和47年 <1972> 63ページ)
担当者：山口幸洋
- 15 『沖縄県八重山鳩間島方言』(昭和48年 <1973> 163ページ)
担当者：上村幸雄, 加治工真市

各地方言報告書

当研究所地方調査員（現、地方研究員）の提出した年次報告書のうち整本され当研究所図書館に保管されている方言関係のものは、次の通りである。

〈地区〉	報告書名	担当者
〈北海道〉	北海道南部方言研究の概観（昭26・23ペ）	石垣 福雄
	北海道（札幌）方言の概観（昭26・40ペ）	芳賀 綏
	北海道南部方言語法の特徴形の実態（昭26・48ペ）	石垣 福雄
	北海道方言動詞の特徴形の実態（昭26・29ペ）	芳賀 綏
	終助詞による待遇表現（北海道）（昭27・30ペ）	地方調査員

	網走郡小清水町方言の記述（昭29・39～）	五十嵐三郎
	北海道檜山郡江差町方言の記述（昭29・41～）	石垣 福雄
〈東北〉	共通語と方言の交渉（秋田・山形）（昭26・90～）	北条 忠雄 斎藤義七郎 佐藤喜代治 斎藤義七郎
	疎開児童の言語調査（宮城・山形）（昭26・35～）	地方調査員
	終助詞による待遇表現（東北）（昭27・210～）	
〈青森〉	青森県方言音韻語法の特徴形の実態（昭26・6～）	北山 長雄
	青森県方言の概観（昭26・113～）	北山 長雄
	青森県南津軽郡尾上町方言の記述（昭29・45～）	此島 正年
〈岩手〉	岩手県方言研究の概観（昭29・45～）	小松代融一
	岩手県方言助詞「さ」の実態（昭26・73～）	小松代融一
	岩手県紫波郡見前村方言の記述（昭29・45～）	小松代融一
〈宮城〉	宮城県方言音韻の特徴形の実態（昭26・31～）	佐藤喜代治
	宮城県方言の概観（昭26・75～）	佐藤喜代治
	仙台本草（抄）（昭26・50～）	佐藤喜代治
	仙台市北四番町方言の記述（昭29・45～）	堀籠 敬藏
〈秋田〉	秋田県方言の概観（昭24・48～）	北条 忠雄
	秋田県方言研究の概観（昭24・18～）	北条 忠雄
	秋田方言の国語学的観察（昭26・52～）	北条 忠雄
	河辺郡豊島村方言の記述（昭29・96～）	北条 忠雄
〈山形〉	山形市香澄町弁の調査（昭25・62～）	斎藤義七郎
	山形県楯岡高女の言語改善（昭25・38～）	斎藤義七郎
	米沢弁（昭26・18～）	斎藤義七郎
	山形県方言研究の概観（昭26・44～）	斎藤義七郎
	山形県開拓移住部落の言語（昭26・31～）	斎藤義七郎
	山形県方言音韻語法の特徴形の実態（昭26・19～）	斎藤義七郎
	北村山郡東根町方言の記述（昭29・48～）	斎藤義七郎
〈福島〉	福島県方言研究の概観（昭25・80～）	一谷 清昭
	福島県方言音韻の特徴形の実態（昭26・81～）	一谷 清昭
	福島県方言の概観（昭26・41～）	一谷 清昭
	福島県喜多市方言の記述（昭30・42～）	一谷 清昭
〈関東〉	終助詞による待遇表現（関東）（昭27・268～）	地方調査員

〈茨城〉	茨城県方言の概観 (昭25・44~) 田口 美雄
	茨城県方言音韻語法の特徴形の実態 (昭25・380~) 田口 美雄
	茨城県方言研究の概観 (昭25・26~) 田口 美雄
	新治郡田余村方言の記述 (昭29・94~) 田口 美雄
〈栃木〉	栃木県方言研究の概観 (昭25・12~) 多々良鎮男
	栃木県方言音韻の特徴形の実態 (昭25・62~) 多々良鎮男
	那須郡親園村方言の記述 (昭29・88~) 多々良鎮男
〈群馬〉	群馬県方言研究の概観 (昭25・188~) 中沢 政雄
	疎開児童の言語調査 (群馬) (昭25・99~) 中沢 政雄
	勢多郡横野村方言の記述 (昭29・21~) 上野 勇
〈埼玉〉	埼玉県方言研究の概観 (昭25・143~) 池之内好次郎
	北足立郡北本宿村方言の記述 (昭29・86~) 大久保忠国
〈千葉〉	千葉県方言研究の概観 (昭25・18~) 大岩 正仲
	安房上総方言の行子音脱落の実態 (昭25・24~) 大岩 正仲
	館山市竹原方言の記述 (昭29・92~) 大岩 正仲
〈東京〉	八丈島方言の概観 (昭25・256~) 菊地 正文
〈神奈川〉	神奈川県方言の概観 (昭25・210~) 寺田 泰政
	神奈川県方言の概観 (昭25・178~) 金田 元彦
	神奈川県方言「来る」の未然形・仮定形および「ください」の 実態 (昭25・73~) 金田 元彦
	愛甲郡煤ヶ谷村方言の記述 (昭29・48~) 日野 資純
〈中部〉	終助詞による待遇表現 (中部) (昭27・280~) 地方調査員
〈山梨〉	中巨摩郡白根村方言の記述 (昭29・91~) 清水 茂夫
〈長野〉	共通語と方言の交渉 (長野) (昭24・180~) 青木千代吉
	長野県方言の概観 (昭25・100~) 青木千代吉
	長野県方言音韻語法の特徴形の実態 (昭25・10~) 青木千代吉
	上高井郡高井村方言の記述 (昭29・77~) 青木千代吉
〈岐阜〉	岐阜県方言研究の概観 (昭25・36~) 篠 五十里
	岐阜県方言の概観 (昭26・34~) 篠 五十里
〈静岡〉	静岡県方言の概観 (昭25・47~) 望月 謙三
	静岡県明治二十一年方言調査 (昭25・20~) 望月 謙三

	静岡県方言音韻の特徴形の年齢別の実態（昭25・40ペ）	望月 誠三
	磐田郡南御厨村方言の記述（昭29・78ペ）	望月 誠三
〈愛知〉	北部三河方言の特徴形の実態（昭25・20ペ）	野村 正良
	西春日井郡北里村方言の記述（昭29・130ペ）	野村 正良
〈新潟〉	新潟県方言研究の概観（昭25・276ペ）	剣持隼一郎
	新潟県方言アクセントの変化の実態（昭25・283ペ）	剣持隼一郎
	中頸城郡吉川村方言の記述（昭29・91ペ）	剣持隼一郎
〈富山〉	富山市太田方言の記述（昭29・35ペ）	大田栄太郎
〈石川〉	石川県方言の概観（昭25・197ペ）	岩井 隆盛
	石川県アクセントと方言の分布の概観（昭25・196ペ）	岩井 隆盛
	石川県方言文法の概観（昭25・110ペ）	岩井 隆盛
	石川県白峰方言の実態（昭25・84ペ）	岩井 隆盛
	金沢市彦三一番丁方言の記述（昭29・91ペ）	岩井 隆盛
〈福井〉	福井県方言研究の概観（昭25・145ペ）	佐藤 茂
	福井県方言音韻の特徴形の実態（昭25・239ペ）	佐藤 茂
	坂井郡東十郷村方言の記述（昭29・86ペ）	佐藤 茂
〈近畿〉	共通語と方言の交渉（京阪地方）（昭24・493ペ）	地方調査員
	終助詞による待遇表現（近畿）（昭27・145ペ）	地方調査員
〈三重〉	亀山市方言の記述（昭29・57ペ）	堀田 要治
〈滋賀〉	滋賀県方言の概観（昭25・50ペ）	井之口有一
	滋賀県方言研究の概観（昭25・19ペ）	井之口有一
	彦根市大藪町方言の記述（昭29・88ペ）	井之口有一
〈京都〉	京都府方言の概観（昭25・320ペ）	煤垣 実
	京都府方言研究の概観（昭25・14ペ）	栗林 貞一
	京都府方言の概観（昭25・50ペ）	奥村 三雄
	京都府方言研究の概観（昭25・51ペ）	奥村 三雄
	丹後言葉と丹波言葉（昭25・81ペ）	奥村 三雄
	京都府方言分布・敬語法不定法の実態（昭25・308ペ）	奥村 三雄
	北桑田郡周山町方言の記述（昭29・82ペ）	奥村 三雄
〈大阪〉	大阪府方言研究の概観（昭25・38ペ）	前田 勇
	大阪府泉北泉州両郡境における動詞特殊打消法の実態（昭25・225ペ）	

		前田 勇
	堺市方言の記述(昭29・81~)	前田 勇
〈兵庫〉	兵庫県方言研究の概観(昭25・117~)	岡田莊之輔
	兵庫県方言研究の概観(昭25・488~)	和田 實
	高砂市伊保町方言の記述(昭29・89~)	和田 實
	豊岡市方言の記述(昭29・70~)	岡田莊之輔
〈奈良〉	奈良県方言研究の概観(昭25・64~)	佐藤 誠
	磯城郡織田村方言の記述(昭29・86~)	西宮 一民
〈和歌山〉	和歌山県方言研究の概観(昭25・189~)	楢垣 実
	和歌山県方言二段動詞の実態(昭25・233~)	楢垣 実
	東牟婁郡高池町方言の記述(昭29・89~)	村内 英一
〈中国〉	終助詞による待遇表現(中国)(昭27・145~)	地方調査員
〈鳥取〉	鳥取県方言研究の概観(昭25・51~)	生田 弥範
	西伯・日野両郡方言の特徴形の実態(昭25・118~)	生田 弥範
	八頭郡中私都村方言の記述(昭29・118~)	広戸 悅
〈島根〉	島根県方言研究の概観(昭25・90~)	岡 義重
	簸川郡伊波野村方言の記述(昭29・58~)	岡 義重
〈岡山〉	岡山県方言研究の概観(昭25・13~)	虫明吉次郎
	岡山県方言の三音節形容詞アクセント・「れる」「られる」の命令形の実態(昭25・52~)	虫明吉次郎
	岡山市高島新屋敷方言の記述(昭29・77~)	虫明吉次郎
〈広島〉	広島県方言の概観(上)(下)(昭25・約1,000~)	村岡 浅夫
	佐伯郡水内村方言の記述(昭29・80~)	村岡 浅夫
〈山口〉	山口県方言研究の概観(昭25・16~)	原 安雄
	山口県方言音韻語法の特徴形の実態(昭25・130~)	原 安雄
	厚狭郡万倉村方言の記述(昭29・47~)	渡辺 保
〈四国〉	終助詞による待遇表現(四国)(昭27・135~)	地方調査員
〈徳島〉	那賀郡今津村方言の記述(昭29・66~)	宮城 文雄
〈香川〉	香川県方言研究の概観(昭25・20~)	武田 明
	丸龜市土器町方言の記述(昭29・80~)	近石 泰秋
〈愛媛〉	愛媛県方言研究の概観(昭25・486~)	杉山 正世

	愛媛県方言の特徴形の実態（昭25・520~）	杉山 正世
	伊予東部方言集（昭25・305~）	杉山 正世
	宇和島市方言の記述（昭29・80~）	杉山 正世
〈高知〉	高知県方言研究の概観（昭25・610~）	土居 重俊
	高知県方言ジヂズヅの実態（昭25・16~）	土居 重俊
	教科書の幡多方言訳（昭25・72~）	土居 重俊
	高知市朝倉方言の記述（昭29・85~）	土居 重俊
〈九州〉	共通語と方言の交渉（九州）（昭24・316~）	地方調査員
	終助詞による待遇表現（九州）（昭27・184~）	地方調査員
〈福岡〉	筑前方言の形容詞語尾の実態・他（昭25・56~）	都築 賴助
	福岡市大字原字本村方言の記述（昭29・125~）	都築 賴助
〈佐賀〉	佐賀県方言研究の概観（昭25・12~）	小野志真男
	佐賀県方言音韻の特徴形の実態（昭25・58~）	小野志真男
	佐賀市本庄町方言の記述（昭29・125~）	小野志真男
〈長崎〉	長崎県方言研究の概観（昭25・9~）	井上 彰
	長崎県方言ぢょんこげんの実態（昭25・46~）	井上 彰
	大村市萱瀬方言の記述（昭29・71~）	西島 宏
〈熊本〉	熊本県方言音韻語法の特徴形の実態（昭25・126~）	原田 芳起
	熊本県方言研究の概観（昭25・108~）	原田 芳起
	上益城郡浜町方言の記述（昭29・80~）	秋山 正次
〈大分〉	大野郡川登村方言の記述（昭29・92~）	糸井 寛一
〈宮崎〉	宮崎県方言研究の概観（昭25・43~）	岩本 実
	宮崎県方言の概観（昭25・226~）	岩本 実
	宮崎県方言音便現象の実態（昭25・340~）	岩本 実
	児湯郡妻町方言の記述（昭29・86~）	岩本 実
	西臼杵郡日の影方言の記述（昭29・108~）	野元 菊雄
〈鹿児島〉	鹿児島県方言の概観（昭25・185~）	上村 孝二
	鹿児島県方言ジヂズヅの実態（昭25・96~）	上村 孝二
	薩摩郡高城村方言の記述（昭29・81~）	上村 孝二
	揖宿郡頬娃町方言の記述（昭29・127~）	柴田 武
	西之表市西之表方言の記述（昭29・92~）	上村 幸雄

7. 日本言語地図

8. 地域社会の言語

日本言語地図(1)～(6)

(報告30—1～30—6, 昭和41年〈1966〉～昭和49年〈1974〉, 言語地図各集50面計300面, 参考地図各集1面計6面, 別冊解説書7冊計749ページ)

担当者：上村幸雄, 加藤正信, W. A. グロータース, 佐藤亮一, 柴田武, 高田誠, 徳川宗賢, 野元菊雄, 本堂寛

補助者：芥川豊子（現姓湊）, 石塚房江, 白沢宏枝, 中野文子, 山下道代（現姓栗沢）, 山田千枝子, 渡辺泰（現姓上村）

調査担当者：青木千代吉, 秋山正次, 阿波陽, 五十嵐三郎, 石垣福雄, 糸井寛一, 岩井隆盛, 岩本実, 上野勇, 上村幸雄, 江原襄, 遠藤邦基, 大岩正仲, 大久保忠国, 大田栄太郎, 岡義重, 岡田莊之輔, 奥村三雄, 小野志真男, 寛五百里, 寛大城, 加藤信昭, 加藤正信, 金沢直人, 上村孝二, 菅野宏, 熊谷直孝, 慶谷寿信, 劍持隼一郎, 後藤和彦, 後藤利雄, 此島正年, 小松代融一, 斎藤義七郎, 佐藤茂, 佐藤亮一, 柴田武, 清水茂夫, 杉浦茂夫, 杉山正世, 須佐善信, 田口美雄, 多々良鎮男, 近石泰秋, 都築頼助, 土居重俊, 徳川宗賢, 仲宗根政善, 西島宏, 西宮一民, 野村正良, 野元菊雄, 長谷川清喜, 日野資純, 広戸惇, 北条忠雄, 外間守善, 堀田要治, 堀籠敬蔵, 前田勇, 馬瀬良雄, 三浦芳夫, 宮城文雄, 宮島達夫, 虫明吉治郎, 村内英一, 村岡浅夫, 望月誼三, 谷開石雄, 山田達也, 和田實, 渡辺保臨地調査に基づく全国方言分布地図集。全国2,400地点で, 計285の項目について調査し, そのうち260の項目について地図化したもの。原則として, それ

ぞれの項目ごとに1枚の分布地図を作成し、音声または語形の変種を各種の符号（色刷り）で表しており、全国的地域差を一瞥看取することができる。地図集の内容は、第1集が「カガミ（鏡）の一G一音」「カジ（火事）のKA一の音」「大きい」「赤い」等の音声・形容詞など、第2集が「坐る」「あぐら（胡座）をかく」「炊く」「煮る」等の動詞ほか、第3集が「頭」「旋毛」「曾孫」「玄孫」「お手玉」「肩車」等の身体・人倫・遊戲関係語彙、第4集が「貨幣」「釣銭」「陶磁器」「甘藷」「南瓜」「玉蜀黍」等の生活・栽培植物語彙、第5集が「牛」「馬」「牛の鳴き声」「董」「蒲公英」等の動植物名称、第6集が「太陽」「月」「雷」「冰柱」「地震」「明後日」「明明後日」等の日時・自然関係語彙ほか。各集には、「カッテクルを“買ってくる”“借りてくる”のいずれの意味で使うか」のような同一語形の意味的変異に関する分布図や、「“大きい”と“太い”と“(網の目が)粗い”との総合図」のような複数意味分野にかかる体系的分布図も含んでいる。また、別冊解説書では、「方法」編で調査の目的・方法、実施の概要等を記し、「各図の説明」(1～6)で、各図ごとに作図の方針を述べた上で、地図の解釈を行っている。

調査・編集の経緯については、準備調査に昭和30・31〈1955・56〉の2か年、本調査に昭和32〈1957〉～昭和39〈1964〉の8か年、結果の整理、言語地図の作成・編集に約10年の歳月を費した。被調査者は、各地点明治36年〈1903〉以前に生まれた男性1名ずつ。居住歴等に厳しい条件をつけた。調査法は、調査員が被調査者に直接面接し、一定の調査票を用いて質問する方法を採り、調査のはほとんど（総地点の92%）が国立国語研究所地方研究員の手によって行われた。調査法および言語地図作成の方法については、ベルギー生まれの言語地理学者、W. A. グロータース神父（国立国語研究所非常勤所員）の指導と助言によるところが大きい。

本書は、厳密な言語地理学的手法によって調査・作成した言語地図集として、また、語彙を中心とした全国的分布地図集である点でわが国最初のものであり、これによって、方言語彙の全国的分布状況を概観し、各種方言語形の歴史的関係や、現代標準語の地理的背景とその成立過程等を解明することができる。また、各図の解釈と文献語史との関係についても、この地図集を利用しても

研究すべき課題の一つである。

本書刊行のための調査研究が契機となって、日本における言語地理学的研究は急速に進展し、各地で本格的な調査研究が行われるようになった。

なお、54万枚に及ぶ原カードや、各種草稿地図、注記一覧、内容一覧（見出し語形としてまとめた音声・語形の変種一覧）等の資料は、「日本言語地図資料」として当研究所資料室に保管されている。

八丈島の言語調査

（報告1、昭和25年〈1950〉、419ページ）

担当者：中村通夫、柴田武、飯豊毅一、北村甫、石川咲子、島崎稔、山之内
るり（以上国立国語研究所）、大間知篤三（民俗学研究所）、丸山文
行（統計数理研究所）、青木千代吉（長野県派遣内地留学教官）

補助者：高田正治

昭和24〈1949〉年6月から7月にかけて行われた八丈島の言語調査及びその分析結果の報告である。本論と附録から成る。

八丈島が調査地点として選ばれた主な理由は、次の二つである。

- (1)八丈島は社会的条件が比較的単純であり、その上、島だけで独立の生活体をなしている。
- (2)八丈島固有の言語は共通語とはかなり違った言語であるから、共通語を話す度合を見ることは比較的たやすい。

また、この調査の主な課題は次の二つであった。

- (1)共通語を話す要因はなにか。
- (2)島内五か村の言語はいかに違うか。

実施の際には、上述の課題(1)のためにランダムサンプリングによって選ばれた216名の被調査者を戸別訪問調査票にもとづいて調査した。また別に、課題(2)のために観察および質問によって特定の被調査者について、できるだけ詳しく調べた。

調査結果の分析により、(1)の課題に対しては、「共通語を話さなければなら

ない場面がつみ重ねられることによって“共通語を話す度合”は高まってゆく」という結論が得られた。(2)の課題に対しては島内五か村の言語的な違いの意識は、純粹に言語的条件以外に村の間の交通やほかの村に対する主観的意識などと密接な関係を持つことがあきらかにされた。

以上が本論の主な内容である。附録の内容は次の通り。

- (1)八丈島及び属島の音韻的特徴。文法的事実と敬語に関する報告。
- (2)「一話一言」の語彙が今も使われているかどうかを調査した通時的研究。
- (3)八丈島に関する文献解題と目録。
- (4)統計的資料。
- (5)語彙集（文献から採集したもの）。

言語生活の実態——白河市および附近の農村における——

（報告2、昭和26年〈1951〉、357ページ）

担当者：岩淵悦太郎、柴田武、北村甫、宇野義方、島崎稔、山之内るり、中村通夫、林大、上甲幹一、森岡健二、永野賢、飯豊毅一、斎賀秀夫
(以上国立国語研究所)、林知己夫、石田正次、丸山文行、西平重喜(以上統計数理研究所)、大藤時彦、大間知篤三(以上民俗学研究所)、青木千代吉(長野県派遣内地留学教官)

補助者：高田正治、岡部英子、山崎英子、長橋紀江

昭和24年の秋から冬にかけて、当研究所が福島県白河市およびその郊外で実施した言語調査の報告である。この調査・報告は、言語の構造的分析よりもむしろ言語の実態をその使用者の社会的環境との関わりにおいて把握しようと試みたものであり、その点で日本における社会言語学的調査研究のいわば先駆として注目されている。本書では、二つの課題、すなわち「地域社会における方言と共通語」および「個人の一日の言語生活」が取り上げられている。第一の課題では、共通語（方言と対立し、標準語とは次元を異にする概念を表すものとしてこの用語が使われたのは本調査が最初である）化の過程における社会的条件についての検討がなされ、特に“学歴”“父母の出身地”“本人の生育地”

が共通語を話す度合を決定する強い要因となっていることが明らかにされた。第二の課題では、特定の個人に一日中つきそって、そのことばのいっさいを記録するという方法が取られた（24時間調査）。対象は白河市に住む農民、商家の主婦、美容院主の三人で、話題を単位にすると三人とも約700話題、文を単位にすると2,600～3,000文、文節（自立語）を単位にすると8,500～10,000文節であった。これらは一日の延べ数であるが、一日の自立語の異なりは、農民2,324、商家の主婦2,138であることが明らかにされた（美容院主は未集計）。なお、この調査では、これら課題以外にもいくつかの試みがなされた。「疎開児童・生徒の言語の調査」もその一つである。これは、京浜地方から白河に疎開して、そのまま住みついた約500人の児童・生徒（小学1年生～高校3年生）について、かれらが京浜地方のことばをどのように保存し、また白河のことばにどのように変りつつあるかを面接によって調べたものである。なお、上記に関連のある報告に、北村甫「子どもの言葉は移住によってどう変るか」（『言語生活』8、昭27.5）がある。

地域社会の言語生活

（報告5、一鶴岡における実態調査—昭和28年〈1953〉、309ページ）

（報告52、一鶴岡における20年前との比較—昭和49年〈1974〉、332ページ）

担当者：（報告5の調査）中村通夫、柴田武、飯豊毅一、北村甫、島崎稔、山之内るり、金田一春彦、浅井恵倫、森岡健二、上甲幹一（以上国立国語研究所）、林知己夫、青山博次郎、西平重喜（以上統計数理研究所）

（報告52の調査）岩淵悦太郎、野元菊雄、飯豊毅一、徳川宗賢、本堂寛、佐藤亮一、中村明、高田誠、江川清、村木新次郎、渡辺友左、高田正治（以上国立国語研究所）、南不二男（東京外国语大学）、鈴木裕久（東京大学新聞研究所）、倉沢進（東京都立大学）、林知己夫、西平重喜、鈴木達三、林文、高橋和子、平野秀子、大高道子、時永沙代子（以上統計数理研究所）

補助者：（報告5の調査）岡部英子、山崎英子、山本尚美、安藤舎予子（以上国立国語研究所）、田熊雅子（統計数理研究所）

（報告52の調査）小林信子、堀江よし子、日高貢一郎、田中ハル子（以上国立国語研究所）

第1回の調査は、山形県鶴岡市の住民の広範な言語生活に関するものであったが、その元となるものは、地域社会住民の共通語化についてのものであった。この共通語化については、それ以前の八丈島、白河市の調査を追試して方法論を確立するとともに、共通語化のモデルを、いろいろな社会的要因によって確定した。

第2回の調査は、第1回の調査の共通語化のところを取り上げて、これを20年後（第1回の調査は昭和25年、第2回の調査は昭和47年）にもう一度同じ地域で同じように実施して、この間における地域社会の共通語化の進展を見ようとしたものである。

結果はいうまでもなく、この20年の間に共通語化が大いに進んだことが明らかとなつたが、特に年齢別の共通語化について大きな違いがあることがたしかめられた。すなわち、第1回調査では、30歳を中心とした年齢層が一番共通語化していて、その両側に年齢が遠ざかるほど低くなっていることが明らかとなり、これを、社会的に一番活躍している年齢層の共通語化が進む、というように解釈した。ところが、第2回調査では、調査の対象となった15～69歳の範囲の限りでは、若ければ若いほど共通語化が進んでいる、という結果となった。

これは報告52によれば、地域社会の成員のことばが共通語化していくには四つの段階があって、第I段階は全員がほとんど方言だけを話す段階、第II段階は、第1回の鶴岡市のように、20代後半から30代前半という、社会的な活動の活発な年齢層の共通語化が進み、その前後に山の裾部を作る段階、第III段階は、第2回の鶴岡市のように、若い方が共通語化している段階、そして最後に第IV段階として、地域社会の全員がほとんど共通語を話すという段階がくる、というように解釈できる。

この推移は、全体としてだけではなく、各言語項目についてもいえることである。アクセントはなかなか共通語化しないといわれているが、第2回の鶴岡

市の調査でもまだ第Ⅱ段階にあるのに対して、たとえば、「カをクッ」ということとか、「セをシェ」というようなものは、特に前者では、既に第Ⅳ段階に達していると認めることができる。

第2回調査は特に整理技術で新しいものを取り入れたことに特色がある。

共通語化の過程

(報告27、昭和40年〈1965〉、301ページ)

担当者：岩淵悦太郎、柴田武、野元菊雄、上村幸雄、徳川宗賢（以上国立国語研究所）、五十嵐三郎（北海道大学）、長谷川清喜、佐藤誠（以上北海道学芸大学）、石垣福雄（道立札幌北高校）

補助者：白沢宏枝

この調査は合計6回の現地調査からなっている。調査Ⅰは、1世から3世までがそろっている4地点での移住家族での世代差の調査で事例研究である。調査Ⅱは、札幌・帯広・釧路での3世のある程度の人数の調査である。調査Ⅲは、宗良野町（当時）での200人のサンプルについて、北海道共通語化に世代と年齢とどちらがきいているかを知るための調査である。調査Ⅳは、集団移住地における状況を知るためにものである。調査Ⅴは、北海道各地の高等学校40校で3世の高校生を調べた、言語地理学的な調査である。調査Ⅵは調査者の個人差を吟味する調査である。

これらの調査で得られた知見のうち主なものを次に述べよう。

調査Ⅰによると語彙は1世と2世との間で変化することが多く、文法や音韻では2世と3世との間で共通語化していることがわかった。3世のアクセントは無アクセントに近くなっているようである。

調査Ⅱによれば、この三つの都市でも、合同共通語化は違っていて、札幌が一番共通語化し、釧路が一番遅れている。

調査Ⅲによれば、世代がきくか年齢がきくかは、調査項目によって違いがある。なお、このような土地における、年齢と世代別の住民構造が明らかとなつた。

調査IVによれば、移住の形態が集団的であるか混住的であるかによって、共通語化も相当違っていることが明らかとなった。なお、同じ混住でも、地域によって相当の差があることが確かめられた。

調査Vによれば、半島部・海岸部とその他にはっきり分かれ、前者が比較的強く東北方言の影響を受けている。東北との比較では、日本海側（特に秋田）の影響が強いようである。

言語使用の変遷(1)——福島県北部地域の面接調査——

（報告53、昭和49年〈1974〉、388ページ）

担当者：飯豊毅一（協力者については同書「刊行のことば」を参照）

補助者：東郷はるみ、中島美智子、米田容子、角田令子

この調査は昭和40年度から昭和46年度にかけて行われた。調査地点は、福島県北部の、伊達郡保原町及び福島市飯坂町茂庭である。前者は都市郊外の平地農村であり、後者は山村としての性格を持つ。音声・音韻、文法、語彙にわたって、地域社会内における言語使用の変遷の様相を明らかにしようとしたものである。

調査そのものの内容はかなり広範囲にわたり、(1)録音資料による日常会話の調査、(2)調査票による面接調査、(3)調査票によるアンケート調査、(4)場面による変容の調査（観察と録音による実態調査）、(5)社会生活、社会構造の調査に及ぶ。

本書は、そのうち、(2)調査票による面接調査の一部をまとめて報告したものである。被調査者は両地区の農家の20歳代、40歳代、60歳代を合わせて、227名で、調査内容は、音声・音韻22項、35語、36問、文法・表現法18項目46形式、52問、語彙41語、55問、言語生活8項、20問である。

その結果を概観すれば、総じて、年齢の若くなるほど、また学歴の高くなるほど共通語化の傾向が著しく、言語的特徴においては、音声・音韻、語彙が、より共通語化していて、文法・表現法は比較的に方言形式を保存する傾向が見られた。

個々の特徴について見れば、音声・音韻では、イとエの混同、シとス、チとツ、ジとズの混同、語中・語尾におけるカ・タ行音の濁音化と称される特徴は保存されやすい。文法・表現法では、意志・推量の～べー、「来る」の命令形コー、過去の経験等を表わす～タッタ、敬語法等は方言形式がよく使用される。語彙は地域生活の特性を示す語、共通語と意味が対応しない語等は方言形が保存されがちである。また、物事が廃亡すれば、一般的にはそれについての名称は急速に消失する。

敬語と敬語意識

(報告11、昭和32年〈1957〉、468ページ)

担当者：西尾実、岩淵悦太郎、柴田武、北村甫、野元菊雄、上村幸雄、山之内るり、島崎稔（以上国立国語研究所）、林知己夫、石田正治、西平重喜、赤池弘次（以上統計数理研究所）、島津一夫（国立教育研究所）

補助者：上村泰、栗沢道代、石塚房江

敬語使用に関する、地域社会における社会言語学的調査の報告書である。調査は、上記の担当者によるものとしては、昭和27年度に三重県上野市で、昭和28年度に愛知県岡崎市で行われた。報告書は後者の結果を主体として書かれているが、そのほか、国立国語研究所の地方調査員（当時）に依頼しての全国調査をこの兩年度に実施し、この結果についても報告してある。なお、この調査については、「地域社会の言語生活」の調査と同様、20年後の実態を知るために、昭和47年度に岡崎市において追跡的な調査を実施したが、その結果はまだ発表されていない。

結果について簡単に列挙すれば、次のとおりである。

1) 否定的要素を含む敬語形式に、発話全体としていねいであると一般に意識されている。2) 特定の敬語形式が個人によっていつも好んで使われるということはなさそうである。3) 長い発話ほどいねいな敬語行動であると一般に意識されている。4) 同じく、方言形式を含む発話は、そうでない発話より

も乱暴であると一般に意識されている。5) ある部分に漢語を使う発話の方が漢語を使わない発話よりもていねいであると意識されている。6) 心理的に弱い立場に立つとき敬語行動はていねいになり、その逆の場合に比較的乱暴になる。7) この場面ではこの程度のていねいさで敬語行動をすべきであるという意識と実際の敬語行動のていねいさとは必ずしも一致しない。8) 知っている人への敬語行動よりも知らない人への敬語行動の方がていねいである。9) 同じ事態をあらわす敬語行動が相手によって変わる変わりぐあいは、平均して3通りである。地域的には、東から西へ移るに従って使い分けが細かくなる。10) 敬語行動の場合、性別が社会的要因の中で最も大きい。年齢は敬語行動を規定する要因として最もきいていない。11) 男の方が場面によってよく使い分けるが、女はいつもていねいな敬語形式を使い、場面によって使い分けない傾向がある。12) 敬語についての意見は年齢で大きく開く。13) 一般にていねいな敬語行動を支持する者は、実際にも敬語行動はていねいである。14) 女は男に対して、若い人は老人に対して、下層の人は上層の人に対してそれぞれていねいに言うべきであると意識（期待）されている。15) その場合、話し手と聞き手との間の敬語行動を最も強く規定するのは階層であるべきであると一般に考えられている。

なお、上述のようにこの調査と時期を同じくして、全国での調査を実施している。第1年度はいくつかの場面について、5人の相手にどのようなことばを使い分けるかを調査した。この主な結果は、上記の結果の9)で示したものである。

待遇表現の実態——松江24時間調査から——

(報告24、昭和46年〈1971〉、231ページ)

担当者：南不二男、松本昭

補助者：沢田さち子、益子芳江

性別・年代・職業などからみた市民各層がどのような言語生活を営んでいるかを求めて、昭和38年度に島根県松江市で実施された「国民各層の言語生活の

実態調査」の事例調査のひとつ、「24時間調査」によって得られた話しことば資料の分析結果報告書である。資料は、市内の一家庭で、ある一日（午前6時から午後10時まで）の間に、家族や来客が行った発話の録音文字化資料である。

分析は、丁寧、尊敬、要求、呼びかけなどもっぱら待遇表現に関与する言語要素（形態素）と、これら要素の選択を規定する文章（Discourse）論的な条件との関連を明らかにすることが目標とされ、次の手順で行われた。

1. 資料の発話を、前後のポーズや内部の連續性など形の上でのまとまり、話し手・聞き手など参加者の統一性、Communication 上の function（あいさつ、用談、雑談など）、ことばの調子（あらたまり、べだけ、皮肉など）、話題（世間・時事、個人うわさなど）の統一性を基準として、「談話」と呼ぶ文章論上の単位に分割する。
2. 各「談話」の、参加者、Communication 上の function、ことばの調子、話題それぞれの特徴ごとに、問題とする言語要素の現れをみる。
結果として、例えば、「あいさつ」「しらせ・用談」にはラレルが少なく、ナサルが多いのに対して、「おしゃべり」はその逆である、というように、待遇表現に関わる言語要素の現れが、文章論の立場から明らかにされた。

分析作業には電子計算機（HITAC-3010）が用いられたが、これは話しことば資料処理への最初の適用であった。出力結果の一部が巻末に示されている。

なお、同じ資料を扱った論考として次のものが発表されている。

- 「この人の敬語行動」南不二男 1965（『言語生活』162号、1965年3月号）
- 「日常会話の構造」南不二男 1972（『言語』Vol.1, No.2, 1972年5月号）
また、松江市での別の調査の結果は、一部が次のものに発表されている。
- 『松江調査の結果（調査報告資料の抜き書き）』（国語研、1965年2月）
- 「外来語の普及度」石綿敏雄 1965（『言語生活』161号、1965年2月号）
- 「言語行動のタイプ」林四郎 1966（『文体論入門』、日本文体論協会編）

「現代の敬語意識」に関するアンケート調査（集計表）

（部内資料、昭和40年〈1965〉、55ページ）

担当者：松尾拾、飯豊毅一、田中章夫

補助者：露峰裕子、河東はるみ

この調査は昭和39年度に行われた。現代の敬語についての当面の問題点を整理しようとしたものである。調査内容は次の四種である。（1）文献資料による敬語問題の調査と整理、（2）現代敬語の表現上の問題点の調査、（3）アンケート調査、（4）小規模な実態調査。

本書は、（3）アンケート調査の結果をまとめたもの。調査対象は、東京都、栃木県大田原市、奈良市、高松市における学生・生徒の父兄 708 名。調査内容は敬語について的一般的意見、敬語の使い方や問題となる敬語形式についての意見、敬語形式の選択意識等（50問）である。回答者の社会的条件により、かなり差のあることが明らかにされた。これについて年報16および田中章夫の「敬語論議はなぜ起る」（「言語生活」213号）に記述がある。

9. 言語と社会

戦後の国民各層の文字生活

(報告29, 昭和41年〈1966〉, 226ページ)

担当者：永野賢，高橋太郎，渡辺友左

補助者：宮地美保子，屋久茂子

表記法に関して戦後実施された一連の国語政策が、国民各層の間にどのように普及しているか。とりわけ戦前・戦中に学校教育を受けた世代にどのように普及しているか。その実態を明らかにすることを主たる目的にして、昭和37年、新潟県長岡市で市民各層について「国民各層の言語生活の実態調査」を実施した。調査は、岩淵悦太郎所長（当時）を委員長に、「国民各層の言語生活の実態調査委員会」を組織して進めた。幹事研究室は、第2研究部言語効果研究室である。長岡市の調査後、さらに別の地点で調査する必要を感じ、言語効果研究室の永野・高橋・渡辺は、東京その他の地点で継続して調査を試みた。本書は、この37・38年度の調査の結果をまとめたものである。

調査結果は、次の観点から記述されている。

1. どういう事項が普及しやすいか——当用漢字表・同音訓表・同字体表・現代かなづかい・送りがな・人名用漢字などについて、それぞれどのような事項が普及し、どのような事項が普及していないか。
2. どういう人に普及しやすいか——年齢・学歴・職業・性などの観点からみて、どういう属性の人に普及しているか。
3. どういう経路で普及しやすいか——本人自身やその子弟が受けた学校教育、新聞その他のジャーナリズム、従事した仕事、その他一般的な社会生活などの経路を通して、どういう事項がどのように普及しているか。

以上の調査とは別に、これから社会の中堅として活躍するはずの大学生が日本語の表記法全般についてどのような意識・意見をもっているか。その実態を知るために、前記「国民各層の言語生活の実態調査委員会」は、広く全国の大学生を対象にして調査を試みた。この調査の実施内容と結果のあらましは、『国立国語研究所年報14』に収録されている「国民各層の言語生活の実態調査」の中に報告してある。

表記法に関する戦後の一連の国語政策を国民がどう受け入れているかについてのこの調査の結果として、最も強く指摘されていることは、彼らが学校教育、とりわけ義務教育において、表記法に関してどのような教育を受けたかという体験的事実と最も深くかかわり合っていたということである。

社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)(2)(3)

(報告32・35・47、昭和43・45・48年<1968・1970・1973>、104ページ・197ページ・107ページ)

担当者：渡辺友左

補助者：河東はるみ、中島美智子

第四研究部第二資料研究室（室長飯豊毅一、室員渡辺友左）は、昭和40年度から同48年度まで、「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」という研究課題の調査研究に従事した。本報告書は、この共同課題について渡辺が分担した仕事の一部をまとめたものである。報告書は、調査が部分的にまとまり次第、逐次刊行していくので、結果的に3分冊の形をとっている。報告書には、それぞれ相互にほぼ独立した、次の6論文が収録されている。

第1分冊（報告32）

1. 「『方言社会の社会構造と言語およびその用法の構造との関係についての基礎的研究』について」
2. 「戦後の方言社会の農業構造の変動と農家の消費構造の変動の概観」
3. 「親族語彙の用法の構造と社会の構造との関連について」

第2分冊（報告35）

4. 「俚言としてのマキ・マケと学術用語としてのマキ・マケ」

5. 「日本人の親族呼称についての事例研究(1)」

第3分冊

6. 「性向についての価値観と性向語彙の意味用法の構造の関連についての調査研究」

なお、この共同課題について渡辺が分担した部分の一部をまとめたものは、ほかに次の論文がある。

「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系」(国立国語研究所論集3『ことばの研究』昭和42年3月)

個々の論文の内容をひとくちで述べるのは難しい。一つだけ例をあげておく。オヤコは「オヤとコ」だというのは、柳田国男の有名な学説である。これに対して渡辺は、いくつかの事実をもとに、オヤコは「オヤであるコ」だという大胆な仮説を提唱した。(第4論文)

家庭における子どものコミュニケーション意識

(報告33、昭和43年〈1968〉、149ページ)

担当者：渡辺友左

補助者：屋久茂子、中島美智子

現代の子どもは、親子を中心とした家庭内のコミュニケーションについてどのような意識をもっているか。その意識は、小学生と中学生と高校生とではどう違うか。同じ小・中・高校生でも、男子と女子とではどう違うか。都市の子どもと農村の子どもとではどうか。職業の違う家庭の子どもの間ではどうかななどなど。これらの事柄について、第二研究部言語効果研究室の渡辺友左は、室長林四郎、室員高橋太郎の協力のもとに、福島市とその近くの農村、福島県伊達郡梁川町で小・中・高校の子どもを対象に質問紙法による意識調査を実施した。昭和39年秋のことである。渡辺は、その前年度にも、「国民各層の言語生活の実態調査委員会(B)」の一員として、他委員の協力のもとに同種の調査を島根県松江市で実施した。本書は、この両年度の調査の結果のあらましを記述

したものである。調査結果は、次の観点から記述してある。

- (1), 子どもは、困ったことの相談を家族のだれにしたいと思っているか。
- (2), 子どもにとって、話しやすい相手、話しくい相手はだれか。(3), 家庭で、子どもがよく話す相手、話さない相手はだれか。(4), 子どもは、親と話をすることが好きか嫌いか。(5), 子どもは、親に自分の希望や意見をいうか。
- (6), 子どもは、親と話すとき話すほうが多いか、聞くほうが多いか。(7), 子どもは、家庭でだれに叱られることが多いか。(8), 叱る人を親に限った場合はどうか。(9), 子どもは、親をどう呼ぶか。(10), 子どもは、家庭でいざつをどの程度しているか。(11), 子どもは、親といっしょに仕事をしたり遊んだりすることがあるか。(12), 家庭の中で、よく話す人、あまり話さない人はだれか。(13), コミュニケーションの上からみて、子どもと親はどのように結びついているか。(14), 家庭外の場面では、子どもは、どのような言語行動をとるか。(15), 農家の子どもの言語行動の特徴について。その他。

調査結果の多くを述べる余裕はないので、一つだけ例をあげておく。「子どもの意識を通しただけ」という条件はつくが、親・きょうだいなど家族員と子どもの間のコミュニケーションのパイプは、異性同士よりも同性同士の場合のほうが相対的にいって太いことが確認されている。

10. マス・コミュニケーション

少年と新聞——小学生・中学生の新聞への接近と理解——

(報告6, 昭和29年〈1954〉, 156ページ)

担当者：岩淵悦太郎，奥水実*，高橋一夫，芦沢節，森岡健二*（以上国立国語研究所），三宅東洲，高須正郎，田中融二，亀井一綱*，宮地進吾，秋吉健次（以上日本新聞協会），戸川昂（千葉県教育研究所），
他に調査実施校関係者。 *は報告書執筆者

補助者：根本今朝男，岡田録子，川又瑠璃子

本研究は小・中学生の新聞への接近の実態調査であり，とくに新聞への正しい接近に有利・不利な条件を探り，その不利な条件の除去の仕方を明らかにしようとするものである。この目的のために以下の6種類の下位調査が行われた：1) 新聞閲読状況調査（質問紙法），2) 新聞閲読度合調査（面接法），3) 新聞記事の理解度調査，4) 漢字・語彙力調査，5) 読書速度調査（以上ペーパーテスト），6) 生活環境調査（面接法）。なお，調査は昭和27年12月～翌年1月，東京都，千葉県香取郡神崎町，同印旛郡八街町の小・中学校各1校（小学4年生から中学3年生。各50名前後、総計914名）を対象に行われた。

この調査で得られた主な結論は次のとおりである。

- 1) 少年は漫画から読み始め，スポーツ，広告，子ども欄，社会記事，ラジオ欄の順に読むようになる。
- 2) 少年の新聞閲読の度合は居住地域の文化的圧力，家庭の文化度の高さに比例している。
- 3) 新聞への関心と記事の理解力はほぼ平行的に発達する。
- 4) 新聞接触度・理解力は，国語能力，社会的意識との相関が高い。

高校生と新聞

(国立国語研究所・日本新聞協会共編、昭和31年〈1956〉、秀英出版、252ページ)

担当者：西尾実、岩淵悦太郎、平井昌夫*、林四郎、寺島愛*（以上国立国語研究所）、江尻進、前田雄二、三宅東洲、大和田能夫、伊藤慎一、亀井一綱*、宮地進吾*（以上日本新聞協会）、堀川直義*（立教大学）、斎藤定良*（和洋女子大学）、高月東一*（日本女子大学）、森岡健二（東京女子大学） *は報告書執筆者

補助者：高森美保子

この研究は高校生の新聞閲読量、新聞理解度およびマスコミ接近への条件を明らかにしようとするものであり、以下の観点から調査が行われた。

- 1) どんな記事から読み始めるか
- 2) 1日の新聞閲読時間
- 3) 記事をどう読んでいるか
- 4) 何故読むか
- 5) 新聞記事の難易度
- 6) 新聞への信頼度
- 7) 新聞接近を規定する条件
- 8) 新聞内容の理解度
- 9) 地域や家庭環境の新聞理解度に及ぼす影響
- 10) 学校新聞の読まれ方
- 11) 新聞を通じて国際的な事件がどの程度理解されているか
- 12) 記事表現の効果に及ぼす影響
- 13) 購読書物
- 14) ラジオや映画への接近

以上を明らかにするために、昭和29年9月～11月にかけて、東京都（16校、サンプリング）、秋田市（2校、任意選択）、秋田県角館町（2校、全数）の全日制高校約5,000名を対象に調査が行われた。

上記の観点について、地域、学年、性別による多くの分析が行われた。

なお、この研究は昭和29、30年度文部省科学研究費総合研究「青年の新聞への接近理解とその影響」（代表者 西尾実）の第一年次の報告である。

青年とマス・コミュニケーション

(日本新聞協会・国立国語研究所共著, 昭和31年〈1956〉, 金沢書店, 252ページ)

担当者：西尾実・岩淵悦太郎・輿水実・平井昌夫・林四郎*・寺島愛（以上
国立国語研究所）, 江尻進・前田雄二・三宅東洲・大和田能夫・伊
藤慎一・亀井一綱*・宮地進吾*（以上日本新聞協会）, 堀川直義（立
教大学）, 森岡健二（東京女子大学）, 斎藤定良（和洋女子大学）,
高月東一（日本女子大学）, 杉溪一言（横浜国立大学） *は報告
書執筆者

補助者：高森美保子

本書は、昭和29, 30年度文部省科学研究費総合研究「青年の新聞への接近理
解とその影響」（代表者 西尾実）の第二年次のまとめである。第一年次の調
査（「高校生と新聞」に報告）が全日制高校生を対象としていたのに対し、こ
の研究では定時制高校生と非就学勤労青年とを対象としている——調査地点は
東京, 三重県渡会村, 総計約2,700名。新聞への接触と理解の程度の高さは,
東京の定時制高校生, 同非就学勤労青年, 渡会村青年（定時制高校生+非就学
青年）の順であった。

また、この調査では第一年次の調査に加えて、青年の関心や悩み、漢字含有
率・文の長さからみた新聞の読みやすさに関する調査などが行われた。漢字含有
率では35%程度のものが、文の長さでは50字位のものが最も読みやすいとい
う結果が得られている。

横組みの字形に関する研究

（報告24, 昭和39年〈1964〉, 195ページ）

担当者：永野賢, 高橋太郎, 渡辺友左

補助者：宮地美保子, 屋久茂子

この研究の目的は、横組みのための活字の字形として、正体（真四角）、長体（たて長）、平体（よこ長）のどれが読みやすいかをあきらかにすることであった。

この目的のために、つぎの4種の実験・調査がおこなわれた。

(1) 文章を読む速さと理解のテスト

三つの文章をそれぞれ3種の字形で印刷し、三つの文章がそれぞれ字形を異にするように、6種のセットをくみ（正長平・正平長・長正平・長平正・平正長・平長正）、中学・高校生1,500人に対して、各セットそれぞれ250ずつを無作為にばらまいて、1文章ずつよませて時間をはかり、また、各文章ごとに簡単な理解テストを付して、統計的に処理した。その結果、速度は、わずかの差であるが、長体がもっともはやく、正、平の順にこれにつづいた。理解のほうは、有意差がなかった。

(2) オフサルモグラフによる眼球運動の観察

10人の被験者に、2回にわたって（最初は正・長・平、次回は長・平および長体わかつがき）3種の字形の文章をよませ、読了速度、停留数、停留時間を見たところ、長体が読了時間が最も短く、停留数も最も少ないが、平均停留時間が最も長いことがわかった。

(3) 抹消検査による、語・文字レベルでの字形の比較

(1)(2)は文章レベルであるが、(3)は、単語列および無意味ひらがな列を使って、語・文字レベルでの速さを比較したものである。前者は、「あかり」「ひたい」の2語のみ抹消する、後者は、「あ」「め」「ふ」「り」の4字のみ抹消するテストである。これを中・高生にこころみた結果、単語レベルでは長体が最も弁別しやすく、正・平の順にこれにつづくのだが、文字レベルになると、それが正・平・長の順にかわることがわかった。

(4) 集団調査（学生）およびアンケート調査（一般知識人）による個個人の意識と意見の調査

学生・社会人それぞれ約300人に対する調査。ページごとに字形をかえた横組み一般に対する質問、字形の異なる文章を左右に配して印象を比較させる6対、横組みの字形に対する質問の3部からなる。第1部で字形がページごとに

異なることに気づいたと答えたのは、学生2割、社会人5割で、その大部分が出版・印刷・宣伝関係者。6対の比較に矛盾のないのは社会人でも5割をわり、全体として、字形の差がそれほどきいていない感じであった。

第3部には、有益な意見が多かったが、とくに、評価の観点は、速さ以外にもあること、おなじ正・長・平体といっても、字体によってかなりちがうことを指摘したものなどは、この研究への批判として有意義であった。

なお、関連するものとして、「新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究」(年報10~11)、「新聞の漢字使用に関する実験的研究」(年報8~9)、「文字配列の合理化に関する実験的研究」(年報1~5)、「読みやすさの基礎的研究」(年報3~4)などがある。

11. 国語の歴史的発達

明治初期の新聞の用語

(報告15, 昭和34年 <1959>, 319ページ)

担当者：山田巖, 見坊豪紀, 廣瀬文雄, 市川孝, 進藤咲子

補助者：上村泰, 田中喜一, 丸山敦, 石田秋子

明治時代の新聞には大新聞と小新聞とがある。前者は知識人向けで、後者は童蒙婦女子向けのものである。本書は、大新聞の代表的存在である『郵便報知新聞』を選び、その明治10年11月から11年10月までの自立語について調査した。本書の構成は語彙表と分析篇とから成る。調査方法は全記事を紙面の上から五つの層にわけ、行を抽出単位として、どの層も $1/12$ の抽出比で標本を抽出してある。そして採集した延べ約10万語の標本から資料全体の約128万語の使用状況を推定したものである。語彙表は五種類あり、(1)五十音順A表（使用度数10以上の語）、(2)使用率順A表、(3)五十音順B表（使用度数9～1の語）、(4)五十音順C表（補充調査の結果を示した異なり語）、(5)分類式別表（接辞的要素を六種類にわけたもの）からなる。分析は、表記・漢字語の構成・文体と用語との連関について行った。表記の分析では送りがなについて、特に動詞に何通りもの送り仮名の種類の見られることを明らかにした。また、文の表記においては漢字カタカナ交り文・漢字ひらがな交り文の使いわけについて調査した。a層（公布・公聞・録事など）は候文体で漢字カタカナ交り文、b層（社説）は「硬文体」で漢字カタカナ交り文、c層（雑報）は記事内容とか文体の違いによって両方に分れている。d層（外電・外国通信記事など）では、電報の翻訳は「硬文体」で漢字カタカナ交り文、外国事情の説明には「硬文体」だが漢字ひらがな交り文も使われている。e層（投書など）は内容も文体も雑多

で、両方が見られる。漢字語の構成については、三字の漢字語を取り上げている。文体と用語との連関については、上記の b・d 層によく使われる「硬文体」と c 層によく使われる「軟文体」とを比較対照した結果、それぞれの文体を特徴づける用語群が見出され、「硬文体」における〈有様・状〉に対する「軟文体」の〈様子〉のような例が列記されている。なお、本書に関連のある報告に次のようなものがある。「『郵便報知新聞』の助詞・助動詞の概要」(年報10), 「明治11, 12年の小新聞の用語調査」(年報12), 「語種の調査」(年報13), 「文体と用語についての考察」(年報14), 「文体と語種との関係についての量的な考察」(年報15), 「明治初期文献の用字調査」(年報16), 「語形の変遷のとらえ方とその枠組みの設定」(年報19)。本書によって、明治10年前後の書きことばの状態が、まとまった形で明らかになった。その価値は大きい。

牛店 安愚樂鍋用語索引 雑談

(資料集9, 昭和49年〈1974〉, 208ページ)

担当者：斎賀秀夫, 飛田良文, 梶原滉太郎

補助者：牧野正子（現姓上田）, 中山典子

『安愚樂鍋』(三編五冊)は仮名垣魯文の代表的作品で明治4～5年に刊行された。牛店を舞台に、異なる階層の男女が登場し、そのことばが書き分けられている点に特色がある。この用語索引は、先に自立語につき山田巖, 補助者中曾根仁, 付属語につき見坊豪紀, 飛田良文, 補助者牧野正子によって一応できあがっていた原稿を、あらためて飛田良文が梶原滉太郎, 斎賀秀夫の協力を得て、全面的な修正・整備を加えたものである。本用語索引の構成は、刊行のことば、はじめに、凡例、本文編、索引編からなる。「はじめに」では、『安愚樂鍋』の国語資料としての特色、諸本の種類、索引作成の経過を説明する。本文編は、底本に採用した国立国会図書館蔵本を約 $\frac{1}{2}$ に縮写して覆刻してある。索引編は自立語編と付属語編からなり、見出しには漢字表記（異体字）を示し、見出し語の所在は、会話、地の文、歌など用語の使用された部分によって、区別して示した点に特色がある。

12. 国語教育

読みの実験的研究

——音読にあらわれた読みあやまりの分析——

(報告9, 昭和30年 <1955>, A 5, 283ページ)

担当者：平井昌夫，上甲幹一，高橋進，寺島愛

補助者：高森美保子

1952, 53の2か年間に行なった「文字言語の学習負担についての研究」の主要部分を占める調査である。調査表による読みの困難・欠陥などについての全国調査と、特定の学校の児童についての録音器による音読の調査との二つに分れている。この本は後者の結果の報告である。11校（東京都内9校165人，山梨県1校，千葉1校 80人）計245人の1年から6年生まで，一学級2～3名を被験者とし，平均して5分以内で読み終わるなどの基準を決めて選定した材料を用いて行われた。これによると読みあやまりの多いものは次のようである。
①くりかえし読みをする 22.5% ②おきかえ読みをする 18.0% ③休止が不自然である 16.4% ④発音作用が正常でない 9.5% ⑤文字の読みがわからない 9.3% その他計10種類を中心調査されている。

入門期の言語能力

(報告7, 昭和29年 <1954>, A 5, 217ページ)

担当者：輿水実，高橋一夫，芦沢節，村石昭三，岡本圭六（非常勤）

補助者：根本今朝男，岡田録子，川又瑠璃子

入門期を児童が小学校に入学した4月（1953年）から10月までとして，ひら

がな・かたかな・漢字がどれだけ読めるか、書けるか、入学前にどうして文字を習得したか、どういう文字がおぼえやすいか、その他の言語能力たとえば発音・語い、などはどうか等について、実験学校（東京四谷第六小学校男女42名）、協力学校14校計29学級、男女各約700名を委嘱して調査した結果の報告である。その他、入門期の言語能力の発達を規定する要因、および入学前後の家庭における読書、入門期における国語学習指導の実態、この問題に対する研究の大勢（内外の文献紹介）が述べられてある。この研究の結果は当時の実状を反映しているので、現在と見比べると興味深いものがある。

低学年の読み書き能力

（報告10、昭和31年〈1956〉、410ページ）

担当者：鷲水実、高橋一夫、芦沢節、村石昭三、岡本奎六（非常勤）

補助者：根本今朝男、川又瑠璃子、久保陽

この調査は、入学した1年生の児童の言語能力の発達を6年間追跡しようとしたものである。本報告書は、そのうち1年、2年時の調査を報告している。この言語能力調査は、主として文字（ひらがな、かたかな、漢字）や文の読み書き能力を扱っている。次の事項が課題とされた。

- 1) 黙読速度と默読理解は、音読技能の進歩とどのように関連して発達するのか。
- 2) 文を書く能力が、質的、量的にどのように発達するのか。
- 3) どんな面から、又、どの程度に、児童の語いや文法能力が発達するのか。

文字の読み書き能力、特に漢字に関しては、その発達の様子を、個人差、地域差、性差の要因に分け、詳細に記述している。

更に、言語能力を規定する要因として知能、人格、身体、家庭環境、学校生活をとりあげ、言語能力との関連性、相関性を論じている。

この調査に参加した児童の中から6名の児童に関しては詳しい事例研究による分析がなされている。

家庭における読書の実態、新聞、ラジオなどのマスコミへのかかわりが調査報告されている。

別表としては1、2年生の教科書に使われている漢字表がのせられている。

この報告書を通して、小学1、2年生における読み書き能力の発達の概観を見ることができる。（この学令期における話す能力、聞く能力の発達に関しては、報告書8〈1956年〉で報告されている。）

中学年の読み書き能力

（報告14、昭和33年〈1958〉、389ページ）

担当者：輿水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三

補助者：根本今朝男、川又瑠璃子、久保陽

この調査は、低学年の読み書き能力（報告10、1956年）における児童が3年の1学期から4年の終りまでに示した言語能力の発達を扱っている。

默読における文理解の発達、読書速度や音読技能の発達の実態とその特徴を述べている。

以前の報告とちがい、本報告書では、読書時における眼球運動の様子を探り、それを種々の言語能力と関連させて論じている。

「遠足」、「せんせい」のような児童の共通の経験にねぎしたテーマで作文を書く能力の発達の調査を行っている。そして、手紙文や記録文のように、いろいろな目的に応じて文を書く能力をも調べている。更に、作文を書く能力と、それを鑑賞、評価する能力との間の関連性を扱っている。以上のような一般的な作文能力の発達に影響を及ぼす要因（知能、身体、環境、社会性、読書）をも分析している。

低学年にひきつづいて、中学年における文字（かたかな、漢字）能力、主として正書法を使用する能力、語い能力、文法能力の発達が調査報告されている。

なお調査児童のうち、2人は読む能力に関して、1人は作文能力の発達に関する詳しい事例研究にもとづく報告がなされている。

この期に見られる家庭における児童の読書生活の実態も詳しく報告されている。読書態度の変化、読書の興味と時間、具体的にどのような本が読まれているか等である。

付録として、家庭における読書調査用の問題と、社会性調査用の問題がのせられている。本研究の特色は読み書きという言語能力の発達を、種々の要因（環境、知能、身体、人格）と絡ませながら縦断的、多面的に分析されていることである。

この期の児童の話す能力、聞く能力の発達は、報告9〈1957〉に報告されている。

高学年の読み書き能力

（報告17、昭和35年〈1960〉、427ページ）

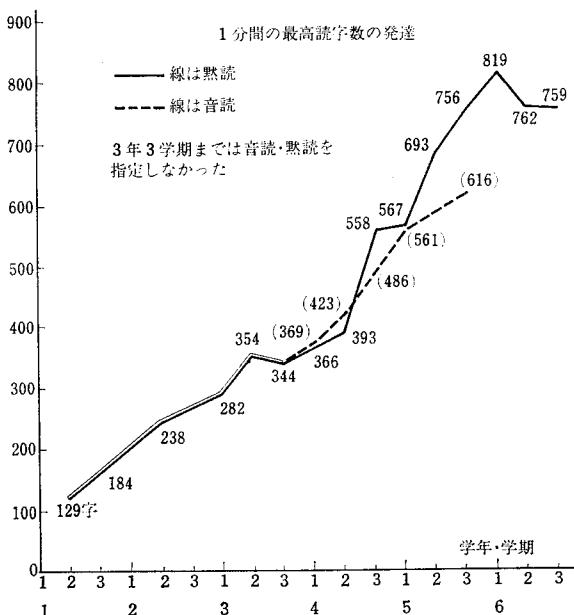
担当者：輿水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三

補助者：根本今朝男、川又瑠璃子

この調査は、「言語能力の発達に関する調査研究」に関する高学年の部の中間報告書である。そして、その内容は、I 読む能力の発達、II 作文能力の発達、III 事例研究、IV 語い能力の発達、V 文法能力の発達、VI 漢字能力の発達、VII 読書生活の発達にわたって報告されており、読み能力の発達、作文能力の発達、読書生活の発達の項に比較的多くページ数を割いている。

読む能力の発達の項では、読書速度の発達の報告があり、1年2学期では1分間129字平均であるのが6年3学期では759字となるが、中学年期に発達の遅滞現象が見られ、能力構造の変化を示唆している。そのほか、読書練習器による速読、遅読み、普通読みの調査や、読みにおける眼球運動の発達も記述されている。

作文能力の発達の項では、課題作文（「ともだち」「わたくしのうち」「せんせい」）のほか、いろいろな目的に応じて文を書く能力の発達が報告され、手紙文、記録文、感想文、また、作文の基礎的能力として、動物のシーソー遊びの絵を見せて、まとまった文章を書かせるなどの報告もある。



読書生活の発達の項では、どんな本を読んでいるか、どう読んでいるかの報告を主に、新聞、ラジオ、テレビへの接近、興味調査も含んでいる。そして、家庭における読書点数と言語能力との相関では、書字力 ($\gamma = .75$) 作文 ($\gamma = .71$) とあり、家庭読書の重要性を示唆している。

小学生の言語能力の発達

(報告26、昭和39年〈1964〉、604ページ)

担当者：輿水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三

補助者：根本今朝男、川又瑠璃子

この調査は、小学校入学から卒業までの6年間に、児童はどのような言語能力をどのように獲得していくかの過程を明らかにしようとしたものであり、入門期、低学年、中学年、高学年の各中間報告を受けた、「言語能力の発達に関する調査研究」の最終報告書である。そして、報告書は第1編 研究のあらまし、第2編 言語諸能力及び発達諸要因の相関、第3編 言語要素の習得、第

4編 言語スキルの発達、第5編4人の事例について報告されている。

この調査に関する第一の特徴は、昭和28年度小学校入学児童について小学校卒業まで、同一児童について継続的に追跡調査した通時的調査であるという点にある。このため、従来の調査の横断的調査にくらべて、言語発達の個人間差、個人内差の調査を可能にし、言語能力の相関の学年変化、学年発達に伴う言語能力と要因との相関の変化、各言語能力別にみた学期のへだたりによる相関係数など言語諸能力及び発達諸要因の相関が報告された。そしてたとえば、言語能力の相関関係から、低学年では文字の読み書き、中学年では文法、高学年では語彙力が、また全学年を通じては作文力がそれぞれ中心的な言語能力であることが示唆された。

第2の特徴は、調査の対象になった言語能力は聞く、話す、読む、書く、発音、語彙、文法など総合的にとらえられているという点にある。このためたとえば、読みぶり、読み方は4年生ぐらいで完成されるとか、文章の深い意味をさぐるのは低学年では無理であるとか、それぞれの能力に発達の時期があることが示された。

第3の特徴は、実験学校のほかに、全国的に10数校を協力学校として調査を実施したので、戦後の諸調査の中での広域調査の性格を持っているという点にある。このため、各学年での標準的な能力水準を見通すことを可能にしている。また、経年調査のための比較資料という内容を持っているので、たとえば、昭和42年度に実施された幼児の読み書き能力調査は本調査における入学時の文字の読み書きテスト結果との比較から、現代児童の文字の早期習得という事実を確めることができた。

その他、言語能力発達の要因として、知能、身体、環境のほか、情緒、人格的要因、学習指導的要因が検討されており、それらの機制は6名の発達事例の中で、具体的にとらえられている。

なお、このほか児童・生徒に対する国語学力調査としては次のものがある。
昭和24年度 小学校1年生から高等学校3年生までの読み解力の発達に関する調査研究、特に読み解力検査の方法に関する研究（年報1）
昭和25年度 小学校1年生から高等学校3年生までの語彙尺度設定のための調

査研究（年報2）

昭和26年度 文法能力および文学鑑賞能力検査の方法に関する研究（年報3）
の諸調査を実施し、昭和27年以後は3年計画で始められた教育研究所「全国小
・中学校児童生徒学力水準調査」の国語科部門を分担した。（年報4～6）

中学生の漢字習得に関する研究

（報告36、昭和46年〈1971〉、895ページ）

担当者：芦沢節、根本今朝男、中村明、村石昭三

補助者：川又瑠璃子、小林信子、福田昭子

この研究は、中学生が義務教育を終了するまでに、どれくらいの漢字をどのように習得するか、習得の過程と要因はどうかなどを調べて、国語教育（漢字）国語問題の改善に役立てることを目的として、昭和39年〈1964年〉から実施したものである。

中学生の漢字習得の実態を詳しく調べるために、次のような調査方法がとられている。

1 事例調査方式により、平均的中学生（東京都北区の中学校生徒8名）について、入学から卒業まで3年間にわたる追跡調査を行う。

2 当用漢字全数（1850字）についての読み書きの力を調査する（読みでは当用漢字表外字1000字を含む）。

3 読みでは、当用漢字表内の全音訓（3122音訓）を調べる。

4 習得上の問題点解明のために、問題のある漢字について、同学年の中学生集団（東京、大阪、名古屋の中学生497名）に検証調査を併せ行う。

5 習得要因を明らかにするため、生徒（知能・性格・学力・読書などの言語生活）、指導法（漢字学習指導の実際）、教材（全使用教科書の漢字使用状況）について調べる。

6 習得過程を追究するために、事例生徒の漢字習得に関する全資料を蓄積、分析する。

7 付帯調査として、中学校における漢字学習指導の実態調査を行う。

本書は、研究編と資料編とから成っている。

研究編 第1編 研究のあらまし 第2編 漢字習得の実態に関する研究 第3編 漢字の習得要因に関する研究 第4編 事例研究——生徒の3年間の漢字習得 第5編 漢字学習指導の実態に関する調査

資料編 資料I 中学校の教科書における漢字の出現状況に関する研究 資料II 教科書の漢字出現状況一覧表 資料III 当用漢字全数調査問題提出語形一覧表 資料IV 漢字習得に関する実態調査の文献

これらのうち、次のようなことが明らかになったのは、この研究の成果としてあげることができよう。

- 1 義務教育までに習得が可能と思われる漢字の量や質が推定されたこと。
- 2 漢字の読みにおける音訓の問題。3 正しく書けた漢字の分析。4 当用漢字表外の読める漢字とその習得経路。5 漢字の習得過程。6 漢字の指導と習得との関係。7 教科書の漢字使用と漢字習得の関係。8 漢字の習得における生徒の個人的要因。9 一生徒に見られる漢字習得過程の実例。10 事例調査結果の習得上の問題点と集団の検証テスト結果との類似性。11 中学校における漢字学習指導法の実態。12 中学校における全教科書の漢字使用状況

また資料IIIの問題提出語形一覧、IVの漢字調査例は漢字を調査する問題作成の際に参考になるであろう。なお、これに関係のある報告として、他に次のものがある。

高校生の漢字力に関する研究（年報21、昭和44年〈1970〉、22~37ページ）

児童・生徒の漢字使用に関する研究（年報22、昭和45年〈1971〉、15~22ページ）

中学校生徒の言語能力の発達に関する研究（年報14~16、昭和37~39年）

幼児の読み書き能力

（報告45、昭和47年〈1972〉、527ページ）

担当者：村石昭三、天野清

補助者：福田昭子

昭和42年度から3か年計画で、特別研究「就学前児童の言語能力に関する全国調査」が実施されたが、本書はその中の1部「幼児の文字力調査」の報告である。すなわち、現代の幼児はテレビ・絵本などマス・コミの影響によって、文字力を含めていちじるしく言語能力の向上が予想される。そこで言語能力の水準を全国的規模で明らかにしようとしたものである。

「幼児の文字力調査」は、昭和42年11月、東京、東北、近畿の3ブロックの幼稚園を層別抽出し、被験児2,217名について、ひらがなの清音・撥音(46字)、濁音・半濁音(25字)計71字の読み書きテストと、拗音、長音、促音、拗長音および助詞「は、へ」の読みテストを行った。一方、特定幼児の文字調査として、4~5歳児クラスの幼児72名がどの程度の範囲の文字(ひらがな、かたかな、漢字、アルファベット、数字)をどれだけ読み・書きできるかの調査をしたが、戦前、戦後を通じて、この種の調査で最も大きな規模となった。

a. 読み書きの水準

昭和42年11月調査の時点で、4・5歳児クラスの読み・書きの習得の水準を示したものである。これによると、11月調査時点で、まったく1字も読めない幼児は、5歳児クラスでは1.1%，4歳児クラスで9.3%にすぎず、逆に大部分

幼稚園児のかな文字習得の程度(昭和42年11月)

項目		目	5歳児 クラス	4歳児 クラス
読み	(1)	まったく1字も読めない幼児の割合	1.14%	9.29%
	(2)	21文字以上読める幼児の割合	81.63	52.81
	(3)	60文字以上読める幼児の割合	63.90	33.74
	(4)	上の幼児のうち、すべて特殊音節の読みもマスターしている幼児の割合	7.58	2.44
書き	(1)	まったく1字も、筆順も正しく書けない幼児の割合	5.29	26.77
	(2)	6文字以上、筆順も正しく書く幼児の割合	81.27	45.48
	(3)	21文字以上、筆順も正しく書く幼児の割合	56.68	21.03
	(4)	60文字以上、筆順も正しく書く幼児の割合	3.75	0.37
人		数(N)	1,399	818

の文字が読める（60字以上）幼児は、5歳児クラスで63.9%に達し、しかも就学直前の再調査では、60字以上読める幼児の割合は87.9%に達していた。

b. 昭和28年調査との経年比較

今回の調査結果を、国立国語研究所が昭和28年の小学校入学時に行った調査結果と比較したとき、昭和28年入学当時の小学校1年生の文字の読みの程度は、昭和42年度の幼稚園4歳児クラスの結果に近似し、昭和28年の小学校1年生の書きの程度は、昭和42年の幼稚園の5歳児クラスの結果にはほぼ相当することが認められた。これにより文字習得の早期化現象が認められ、新しい教育内容の必要が示唆された。

なお、別に、幼児の言語発達研究のための文献資料（非売品）として、「言語発達文献——展望、リスト」（担当者、村石・天野）が作成されている。

幼児の文構造の発達——3歳～6歳児の場合——

（報告50、昭和48年〈1937〉、B5、267ページ）

担当者：大久保愛

補助者：鈴木美都代

幼児の話しことばの文がどのような構造をしているか、また、どのような発達の様相を呈しているかを、東京の幼稚園と保育園（各2園計4園）の幼児305名（3歳3ヶ月から6歳6ヶ月まで）に、調査者が10の問を用意した問答方式によって得た資料（録音→文字化→カード化したもの）を用いて分析研究した報告である。

一部では、幼児の話しことばの実際を、文節数の一番多い幼児と一番少ない幼児ほかの例を、年少児、年中児、年長児と分け、実例で示してある。

二部では、幼児の文構造を分析した結果を、1章 文構造の分析の方法、2章 幼児の單文の構造と用法、3章 幼児の複文の構造と用法、4章 連体修飾語の構造と用法、5章 文末の形式と用法、6章 接続詞の用法、付1 幼児の話す長さ、付2 補足文の構造の分析、に分けて述べてある。

幼児の文構造の特色は次のようである。①3歳から6歳の幼児は、わりによ

くしゃべり、不整文もあるとはいえ、いろいろの構文を使用している。②年少児と年長児の間にはめざましい発達があり、年中がその橋渡しの役目をしている。③連体修飾語の節をもつ構文は年少児にほとんどなく、年中児にも少なく、年長児にならないと使えない。④複文構造では、前後の関係をはっきり理由づける「から」が年少児で少なく（終助詞的に用いる）、「て」を用いて並列的に述べる傾向がある。⑤接続詞については、「それで」「そして」を間投詞的に愛用することが多い。また、接続助詞「て」と結びついた「て、それで」「て、そして」の言い方を好み、文が切れない。これは発達ではあるが、文意識が乏しい結果もある、等。

関連した研究には次の二つがある。「幼児の発話の構造の発達——三こまの絵を見せて話させた場合——」（『ことばの研究』第4集）「文の接続関係能力の発達——幼児から小学6年生まで——」（『国研年報26』）

幼児語の形態論的な分析——動詞・形容詞・述語名詞——

（報告55、昭和50年〈1975〉、242ページ）

担当者：高橋太郎

補助者：鈴木美都代

この研究は、3～6歳の幼児が会話のなかで使用した動詞、形容詞、ならびに述語につかわれた名詞について、形態論の面から分析したものである。

資料は、大久保愛が幼稚園・保育園児約300人と、ひとりずつ話しあって作った録音文字化資料にもとづいている。つまり、報告50「幼児の文構造の発達——3歳児から6歳児の場合」（大久保愛）とおなじである。

この研究の形態論のたちは、学校文法に代表される従来の国文法の品詞論とはことなり、動詞・形容詞（いわゆる形容動詞をふくむ）・名詞などにくついた助詞・助動詞をふくめたものを単語の語形としてとらえるものである。
(そのたちは、鈴木重幸1972「日本語文法・形態論」に代表される。)

本書は、各品詞（または、その各部門）ごとに、最初に活用表をかかげて、幼児の使用した語形をチェックし、用例をならべ、つぎに、各語形ごとに、(お

との使用による) 意味・用法を例文つきでならべたて、それにあたる幼児の使用例文を、年長・年中・年少にわけてあげている。そして、これにコメントをつける形で、くみたてられている。

この研究の結果、形態論的な事項については、その基本的なものが年少児(3~4歳児)においてすでにだいたい身につけられていることがわかったが、3~6歳のあいだに獲得される諸事項については、こまかく記述されている。

この研究では、幼児言語の分析の面だけでなく、形態論のくみたてかた、活用表のしめしかたなど、文法研究のうえでも、いくつかの提案がなされている。

なお、この研究とおなじ資料をもちいた業績としては、本書と報告50とのほかに、鈴木美都代によるガリ版ずりの用例集「幼児語の連語論的な分析——名詞の格の用法——」1975(B4, 57ページ)があり、これまでの連語論の研究成果とつきあわせて、精密な用例分析がなされている。

幼児の文法能力

(報告58, 昭和52年<1977>, 414ページ)

担当者：村石昭三、天野清

補助者：福田昭子

本研究の対象は、東京、京都、和歌山の3地域の4歳~6歳児である。

報告は主として2つの研究領域に分けられる。ひとつは、種々の格関係をもつ構文(自動詞、他動詞、存在、付着、授受の構文)の作成能力をモデル図版を用いて調査する。そして、その構文作成テストの中で、自動詞や他動詞、意味の類似している動詞や授受動詞を、どの程度正しく使い分けることができるのかという問題を扱っている。

他方の研究は、一定の構造をもった文の意味を保有したままで別の構造文に、どの程度うまく変換操作できるかという問題を扱っている。具体的には能動文→受動文間の相互変換、補助動詞を使う、やりもらい文の相互変換、使役

文への変換を、子どもに行わせる。この方法は、やはりモデル図版を見ながら遂行させる。ただし、能動文⇒受動文の変換に関しては、文作成のための手がかりとしてのモデル図版なしで単に言語的水準でのみ行わせるという方法もとられた。

結果は、前者の研究において、授受動詞「もらう、かりる、習う、あずかる」の使用は「やる、かす、教える、あずける」より困難であった。また、その困難性（誤反応）は、「～をもらう」と言うべき所を「～をあげた」というような行為の方向性、立場を誤ることが特徴的であった。

後者の研究結果によると、使役文への変換や、やり⇒もらい文の変換は、能動⇒受動文の変換より容易であった。能動⇒受動の変換も5歳後半から6歳にかけて特徴的に改善される。言語的水準での変換は、モデル図版を使ったものよりもつかしかった。

ピアジェ学派の研究に立脚しながら、筆者は二つの構造の異なる文を意味的に等価なものとして操作できる能力と数量の保存能力との関連性を見るための実験調査を報告している。そこで、将来への展望を込めて、文法能力の発達と精神機能の発達の複雑な相互作用をときほぐすことの重要性を説いている。

13. 日本語教育

日本語教育の概観

(昭和51年〈1976〉, B 5, 44ページ)

日本語教育センターの発足にあたり、その情報提供活動の一環となるべきものとして、広く日本語教育の実状をとらえ簡略に紹介しようとした部内資料で、林大、水谷修の執筆による。

内容は、大部分が日本語教育の現状への理解を目的とする解説であるが、巻末に日本語教育推進対策調査会報告「日本語教員に必要な資質能力とその向上策について」が附載されている。各部の標題は次のとおりである。

1. 日本語教育と国語教育
2. 日本語教育の沿革
3. 日本語教育機関と教師の現状
4. 国内の日本語教育
5. 海外の日本語教育
6. 日本語教師の養成と研修
7. 日本語教師の資格
8. 日本語の教授法
9. 日本語教科書・教材
10. 日本語教育センター及びその他

日本語と日本語教育——発音・表現編

(国語シリーズ別冊3, 昭和50年〈1975〉, 199ページ)

国語シリーズ別冊は、外国人に対する日本語教育の研究又は実務に従事している人たちと日本語教育に関心ある人々の利用に供することを第一の目的として編集刊行されたものである。別冊1, 別冊2は文化庁で刊行され、別冊3に至って国立国語研究所と文化庁の共同で刊行されることになった。

内容は、昭和48年8月13日から同月16日までの間、大阪YWCA千里センターを会場として開催された、文化庁主催、昭和48年度日本語教育研修会（現職

研修者)の講義をもとにして、講義担当者が改めて執筆しなおしたものである。収録論文は全部で8編。その題目と執筆者名は次のとおりである。

「日本語の音韻の概説」玉村文郎、「発音教育」水谷修、「アクセント・イントネーション・プロミネンス」和田実、「日本語の表現の類型」宮地裕、「口語の中に現れる文語的表現」佐治圭三、「短歌と俳句の表現」吉田弥寿夫、「表現の比較」ということ」寺村秀夫、「日英比較表現論」模垣実

日本語と日本語教育——文字・表現編

(国語シリーズ別冊4, 昭和51年<1976>, 237ページ)

国語シリーズ別冊3は国立国語研究所と文化庁の共同刊行であったが、この別冊4——文字・表現編からは国立国語研究所が単独で編集刊行した。

別冊4の内容は昭和49年8月20日から24日までの5日間、大阪外国语大学を会場に、文化庁・国立国語研究所共催で開いた日本語教育研修会(現職者研修)の講義をもとに、講義担当者が執筆したものである。収録論文は「漢字・漢語」森岡健二、「仮名とローマ字」玉村文郎、「『ナル』表現と『スル』表現」日英『態』表現の比較」寺村秀夫、「日西比較表現論」大倉美和子、「日朝比較表現論」塚本勲、「待遇表現」宮地裕、「東西の比喩・象徴の表現」八木浩、「日本の象徴詩」吉田弥寿夫、「東西の言語生活」野元菊雄、「翻訳論」春名万紀子、「作文指導」佐治圭三、「外国人学生について—学生の心理一」氏原寛、の12編。

日本語の文法(上) 日本語教育指導参考書4

(昭和52年<1977>, 107ページ)

執筆担当者: 寺村秀夫(大阪外国语大学教授)

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている人たちの指導上の参考に供するため、文化庁編として、「音声と音声教育」「待遇表現」「日本語教授法の諸問題」の3冊がこれまでに刊行されている。国立

国語研究所日本語教育センターは、昭和52年度から教材作成事業の一環として、このシリーズの刊行を文化庁から引き継ぎことになった。その最初の刊行物として出版されたのが本書である。

この上巻の内容は、日本語文法の主要な事項が「問」の形で提起されており、読者がそれについて考えながら読み進むに従って、「答」が得られるよう工夫されている。又随所に日本語学習者が実際に誤りを犯した場合の用例や問題点が示されており、教授者が文法をいかに教えるかという課題を考えるうえで、多くの示唆が得られるものとなっている。

日本語教育映画基礎篇

日本語教育映画基礎篇は、全体が三十課で構成された入門期日本語教育のための視聴覚教材で、49年度にその作成が始まられ、現在も作成が進行中のものである。各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、単独で補助教材として使用することも、また、系列的に学習事項を順次指導する教材として使用することもできるよう配慮して企画・制作されている。映画の作成にあたっては、日本語教育映画等企画協議会を設け、それぞれの主題内容を協議し、原案を検討し、また実際の制作に指導助言を仰いでいる。日本語教育センターに教材開発室が設けられてからは、主として日向茂男が担当した。すでに作成されたものは次の通りである。

第一課 「これはかえるです」——「こそあど」+「は——です」——(49)

第二課 「さいふはどこにありますか」

——「こそあど」+「——がある」——(49)

第三課 「やすくないです たかいです」

——形容詞とその活用導入——(49)

第四課 「きりんはどこにいますか」——「いる」「ある」——(51)

第五課 「なにをしましたか」——動詞——(50)

第六課 「しづかなこうえんで」——形容動詞——(50)

第七課 「さあ、かぞえましょう」——助数詞——(50)

- 第八課 「どちらがすきですか」——比較・程度の表現——(52)
- 第九課 「かまくらをあるきます」——移動の表現——(51)
- 第十課 「もみじがとてもきれいでした」
——です, でした, でしょう——(52)
- 第十一課 「きょうはあめがふっています」
——して, している, していた——(52)

第十五課 「うつくしいさらになりました」——「なる」「する」——(50)

第二十五課 「おかねをとられました」——受身の表現 1 ——(51)

(各課の最後のカッコ内の数字は, 制作年度を示す。)

上記, 第一課～第三課については, 映画教材使用上の留意点を述べた「日本語教育映画解説」を刊行した。解説の執筆には, 日向茂男, 田中望, 石井久雄があたった。

14. その他の編集事業

ことばの研究

国語研究所では、所員の論文を集めた論文集「ことばの研究」を、これまでに5冊刊行してきた。これらの論文集は、論集3を除いて、研究所の10周年、15周年、25周年の記念行事のひとつとして公刊されたものである。ここには、ことばの問題をめぐって、さまざまな角度から研究された以下の論文が収められている。

論集1（昭和34年〈1959〉、448ページ）

- 言語生活についての一考察 西尾 実
コミュニケーションの合理性と非合理性 渡辺 友左
文と文章論 市川 孝
新聞社説の文章と小説の文章 大久保 愛
——その文体論的比較研究——
明治初期の小新聞にあらわされた談話体の文章 進藤 咲子
文章表現と理解 林 四郎
——言語教果の調査法を求めて——
プロミネンスについて 大石初太郎
——東京語の観察にもとづく覚え書——
琉球・与那国島方言の音韻 柴田 武
琉球諸方言における「1・2音節名詞」のアクセントの概観 上村 幸雄
語の受け継ぎの仕組みに関する一研究法 水谷 静夫
文末助辞と質問の昇調 宮地 裕

- 動詞の連体修飾法 高橋 太郎
「雨は降る日」という言い方について 松尾 拾
明治初期の文献にあらわれた尊敬表現
- 「お(ご)....になる」について 山田 巍
八丈島方言の語法 飯豊 純一
語の結合の長さ 斎賀 秀夫
- 総合雑誌における二字の漢語の場合—
話しことばの中での漢語使用 野元 菊雄
新語・流行語 吉沢 典男
- 終戦後の概観—
シャボンの語源 石綿 敏雄
「カマキリ」の方言分布を解釈する 徳川 宗賢
- 糸魚川・青海方言調査報告7—
「和漢混淆文」という名称の起原 見坊 豪紀
日蓮聖人遺文の「まいせ」について 高橋 一夫
国立国語研究所蔵 慶長九年本節用集について 廣濱 文雄
漢字の字体と正誤 林 大
日・中両国の略字について 有賀 憲三
- その統一の限界をさぐる—
中国文字改革の諸問題 村尾 力
幼児の言語発達について 永野 賢
- 主として助詞の習得過程を中心に—
作文能力の発達過程 芦沢 節
—ひとりの児童の文章構造力を中心として—
読書過程の分析 村石 昭三
音読指導の再検討 上甲 幹一
意味論と国語教育 輿水 実
- 論集2（昭和40年〈1965〉、302ページ）
現代日本語の動詞のテンス 鈴木 重幸

——言いきりの述語に使われたばあい——

動詞の連体修飾法(2)……………高橋 太郎

——場所的な結びつきと状態的な結びつき——

「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ……………根本今朝男

いくつかの文法的類義表現について……………宮島 達夫

電子計算機による語彙調査の一実験……………石綿 敏雄

明治初期のかなづかいの様相……………進藤 咲子

複合してサ変動詞を作る漢字語の意味分類(1)……………広浜 文雄

言語地理学の方法と言語史の方法……………柴田 武

地域社会における中央語と地方語……………徳川 宗賢

——長岡市における1000人調査の結果を見る——

敬語の解釈……………宮地 裕

——主としていわゆる「謙譲語」とその周辺——

ユーモアの理解……………永野 賢

——意義・意味・文脈の問題の一考察——

翻訳における正しさの規準……………林 四郎

言語生活研究覚え書き……………渡辺 友左

——言語生活研究における個人と集団・社会の問題——

幼児の疑問表現の形式とその発達……………大久保 愛

——幼児の言語調査 3 ——

作文能力の発達過程(2)……………芦沢 節

——ひとりの児童の作品を中心として——

読みにおける眼球運動の各技能間の発達的相關関係……………村石 昭三

論集 3 (昭和42年 <1967>, 297ページ)

現代語いの形成……………宮島 達夫

就学前児童の単語の音構造の分析能力……………天野 清

福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系……………渡辺 友左

明治初期の新聞の用字……………進藤 咲子

論集 4 (昭和48年 <1973>, 257ページ)

- 現代語彙における同義語 西尾 實弥
無意味形態素 宮島 達夫
否定の接頭語「無・不・未・非」の用法 野村 雅昭
自然現象を意味する動詞の用法 石綿 敏雄
鉛筆とゼロックスによる小さな語彙調査 林 四郎
接続詞の周辺 中村 明

——同帰に属する語の文法的性格——

- 動詞の連体形「する」「した」についての一考察 高橋 太郎
言語地図における孤例 德川 宗賢
「かえる」・「ひきがえる」・「おたまじゃくし」の名称 本堂 寛

——『日本言語地図』から——

- 言語地理学のために 高田 誠

——ヨーロッパの方言研究を中心にして——

構造言語地理学の流れをたどる——

- 曖昧アクセント地域における話者の型意識について 佐藤 亮一

——「比較発音による調査」から——

- ハワイ日系人の読み書き能力 野元 菊雄
多変量解析の社会言語学的調査への適用例 江川 清

——鶴岡市における共通語化の調査資料を用いて——

- 「性の文化とことば」覚え書き 渡辺 友左
幼児の発話の構造と発達 大久保 愛

——三こまの絵を見せて話させた場合——

論集5（昭和49年〈1974〉、262ページ）

- 明治初期東京語の否定表現体系 飛田 良文

——『安愚樂鍋』における「ない」「ねえ」「ぬ」「ん」の用法——

- 江戸語東京語の断定表現 土屋 信一
中世説話における「たり」と「り」 梶原滉太郎
カ変動詞の一段化 飯豊 敏一

——東部方言を中心として——

動詞文の基本型	村木新次郎
——「ハナス」「カタル」「モウス」の場合——	
句のエントロピーにもとづく構文合成	田中 章夫
自動構文解析の構想	中野 洋
電子計算機による代表構文作成の試み	鶴岡 昭夫
新聞の見出しとリード文の構造について	斎藤 秀紀
日本語の母音の発音における下あごのうごき	上村 幸雄 高田 正治
中学生の漢字使用の習熟度に関する調査	根本今朝男
幼児の筆順に関する教育心理学的研究	村石 昭三

研究報告集-1-

(報告62、昭和53年〈1978〉、230ページ)

従来、調査研究の結果は、『報告』、『資料集』あるいは『論集』などに発表してきた。しかし、調査研究の過程においては、独立した報告書としての取りまとめを待たずに公表しておきたいものがある。それらを集めたものが『研究報告集』である。その第1集として以下の8編の論文を掲載した。

- 1) 「も」によるとりたて形の記述的研究 高橋太郎
- 2) 雑誌九十種資料の漢語表記 宮島達夫・高木翠
- 3) 談話行動の実験社会言語学的研究 江川清
- 4) 身ぶりの記述について 江川清
- 5) 身振りを記録する 杉戸清樹
- 6) 談話行動の計量的研究について 米田正人
- 7) 表現法の調査方法について 佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄
- 8) 明治初期東京人の階層と語種との関係 飛田良文

国立国語研究所年報

年報は国立国語研究所における当該年度の研究活動及び事業の経過について

その概要を報告するものである。年刊。昭和24年度以来現在まで29冊が刊行されている。

研究活動については、各研究課題について、その目的・担当者・当該年度の作業の経過並びに得られたる成果・今後の予定などを概説する。

なお、本書には、当該年度に刊行された報告書の概要及び報告書として刊行されるに至らなかった研究成果の小報告も含まれている。

国語年鑑

(昭和29年版～昭和53年版、計25冊、各巻約500ページ)

編集担当者：資料室（昭和29年版）、資料調査室（昭和30年版～昭和33年版）、第3資料研究室（昭和34年版）、第2・3資料研究室（昭和35年版）、飯豊毅一、大久保愛、塙田菊子（現姓伊藤）、小山孝子（現姓市橋）（昭和36年版～昭和40年版）、輿水実、田原圭子、中曾根仁、塙田菊子（現姓伊藤）（昭和41年版）、輿水実、大石初太郎、田原圭子、中曾根仁、塙田菊子（現姓伊藤）（昭和42年版）、見坊豪紀、伊藤菊子、田原圭子、中曾根仁（昭和43年版）、斎賀秀夫、伊藤菊子、田原圭子、中曾根仁（昭和44年版～49年版）、飯豊毅一、伊藤菊子、田原圭子、中曾根仁（昭和50年版～昭和53年版）

昭和29年に創刊されて以来、今日まで毎年出版され、25冊に及んでいる。過去1年間の国語に関連する事項をもれなく採録したもので、第1部展望、第2部文献、第3部雑報、第4部国語関係者名簿、第5部資料に分けて編集されている。

第1部展望は、言語生活（話しことば、書きことば、方言）、国語政策、国語教育（小学校、中学校、高等学校）、国語学、言語学、国文学、マスコミュニケーション（新聞、放送、広告）からの展望で、近年の特色としては情報化社会と言語、外国人に対する日本語教育、海外における日本語の研究と教育、言語関連諸科学（言語心理学、社会言語学、音声生理学、民俗学、言語病理学

等), 対照言語学等の項目も設けられ, それぞれの専門家が執筆し, 過去1年間の動向を明らかにしている。

第2部文献は, 国語・国文学関係の刊行図書一覧, 国語関係の雑誌論文一覧, 国語関係新聞記事一覧, 採録図書・雑誌発行所一覧から成り, 1年間の出版物や研究成果を総覧することができる。

第3部雑報では, 各学会・関係諸団体一覧により, 国語に関連する研究活動を把握できる。また, 文部省科学研究費等の交付状況, 受賞一覧, 学術団体, 審議会等の関係者氏名等も掲載されている。

第4部は国語関係者名簿で, 国内外の国語関係者約1,700名を収録し, 個人の最新情報が紹介されている。

第5部資料では, 政府や文部省の国語に関する告示(「当用漢字音訓表」, 「学习指導要領」等), 国語審議会の建議・報告, NHK用語委員会の決定事項, 新聞協会用語懇談会の決定事項等, 公的機関の発行するもの, 及びことばに関する放送番組, ことしの主な事柄等が掲載されている。

国語関係刊行書目〔昭和17~24年〕

(資料集1, 昭和25年〈1950〉, 59ページ)

担当者: 高橋一夫, 芳賀清一郎, 味岡善子

底本は山田房一氏の作成した書目である。それに当研究所の資料室員が補訂を加え, また昭和24年6~12月までに刊行されたものを加えて出来上ったものである。内容は言語学, 国語学, 国語学史, 国語史, 国語の音韻, 国文法, 国語の語彙, 辞書・索引, 国語の方言, 国語問題, 国語教育, 国語資料, 外国語学, 雜が含まれている。そして, それぞれの図書に通し番号, 著(編・訳)者名, 発行年月などが記され, 卷末に五十音順の著者名別索引が付いている。

明治 国語学関係刊行書目 以降

(資料集4, 昭和30年〈1955〉, 301ページ)

担当者：資料調査室

本書目には明治初年から昭和27年12月までの国語関係全般の刊行図書が収めている。これによって明治初年から85年間の研究を一覧することができる。内容は国語学、国語史、方言、国語政策、国語教育、辞書・索引、言語技術、マス・コミュニケーション、言語学、外国語、雑に分類されている。各図書には全体の通し番号、書名、著（編・訳）者名、発行年月などが記されている。巻末には五十音順の著者名別索引が付いている。なお、昭和28年以降の分は、その年から毎年刊行されている『国語年鑑』によって見ることができる。

国立国語研究所蔵明治文庫目録（付）逐次刊行物明治期目録

(部内資料, 昭和49年〈1974〉, 82ページ)

担当者：飛田良文、中山典子、大浪由紀夫

この目録は、昭和30年以来、近代語研究室（現在、変化第二研究室）が明治時代語の調査研究の資料として収集・購入してきた文献を中心にして作られた明治文庫の書目である。その内容は研究書、辞書、逐次刊行物の類を除いた明治期刊行の文献で、明治初期の翻訳小説や二葉亭四迷・坪内逍遙の著訳書など貴重なものを収めている。本書の構成は、明治文庫目録について、明治文庫目録（凡例、目録、索引）、および付録の国立国語研究所に所蔵されている逐次刊行物明治期目録（凡例、目録）からなっている。排列は書名の五十音順である。

国立国語研究所蔵明治期刊行辞書目録

(部内資料, 昭和50年〈1975〉, 22ページ)

担当者：飛田良文、梶原滉太郎、田原圭子、中山典子、伊藤菊子

この目録は、言語変化研究部第二研究室が明治時代語の研究を進めるため、国立国語研究所に所蔵されている明治期刊行の辞書類を分類した書目である。内容は、(1)国語辞典類、(2)漢和辞典類、(3)対訳辞典類、(4)特殊辞典類、(5)百科事典類からなり、各分類ごとに刊行年代順に配列してある。

新聞所載国語関係記事切抜集

(1. 昭和25年〈1950〉～341・昭和52年〈1977〉。他に昭和24年分1冊、計342冊)

担当者：文献調査室（旧・資料室、文献室、第4研究部第2、第3資料研究室）が継続して担当。

新聞に掲載された国語関係の記事を切抜き、整理・製本したものである。昭和24年3月以降、継続して、全国紙（朝日・毎日・読売・日本経済など）、ブロック紙（東京、西日本、北海道など）の朝・夕刊、週刊紙（日本読書新聞、週刊読書人、図書新聞など）を対象に、国語一般、文字、音声、語彙、文法、方言、言語生活、国語国字問題、国語教育など、はば広い分野の記事が収集されている。切抜き記事数は、当初、年間600点弱（昭和25年）であったが、現在では3,200点を越える。これらは、特集記事・連載記事をまとめた『新聞所載国語関係記事切抜特集』（1～23）とともに、研究所図書館に架蔵され、所員その他の閲覧に供されている。

「言語生活」（雑誌）

筑摩書房の発行することば専門の月刊誌。昭和26年10月創刊、一昨年すでに300号を越えた。発行所は筑摩書房。国立国語研究所の機関誌ではないが、当初、国立国語研究所長西尾実を編集代表者とし、159号までは国立国語研究所監修という名を用いた。監修の肩書きをはずした160号以降においても所員が編集その他の面に協力しており、研究所とは密接な関係にある。国立国語研究所の特集・記念号も数回を数える。

当初の目標は「一般の人々の国語および言語生活に対する関心を高め、言語生活の上に横たわる各種の問題を明らかにして国字・国語問題を解決し、われわれの言語生活を高めるのに役立たせたい」（創刊号編集後記）というところにあった。その後次第に視野を広げ、現在は広い意味でことばや言語生活にかかわるほとんどあらゆる分野の問題を取り上げ、いろいろな角度から扱うようになっている。構成は、その号の特集テーマに関連した巻頭座談会および関係論文を中心とし、「目」「耳」「録音器」欄やその時どきのことばの話題を拾う「言語時評」などを盛り込んでいるのが特徴である。最近はインタビューや分担執筆によるシリーズもの、資料的性格の「ことばのくずかご」欄などが設けられている。

15. 講演会・研究発表会

第1回公開講演会 昭和25・1・28 医師会館講堂

あいさつ	所長	西尾 実
最近の東京語	所員	中村 通夫
言語の構造的全体	所員	興水 実
どうすればいいか	評議員	土岐 善磨

第2回公開講演会 昭和25・5・20 京都大学文学部

あいさつ	所長	西尾 実
東京語の性格	所員	中村 通夫
国語教育について	兼任所員	遠藤嘉基
日本語の系譜について	京大教授	泉井 久之助
国語国字問題の方向	評議員	土岐 善磨

第1回研究発表会 昭和26・6・2 東京大学文学部

あいさつ	所長	西尾 実
疎開児童のことば	所員	北村 甫
語彙論をめぐって	所員	林 大
記号化とパーソナリティ	所員	森岡 健二
読みない子供たち	所員	平井 昌夫

第2回研究発表会 昭和28・3・28 お茶の水女子大学

基本語彙を考える	所員	水谷 静夫
地域社会と敬語	所員	柴田 武
国語学力の水準	所員	興水 実

連合講演会（統計数理・国立教育・国立遺伝・国立国語の各研究所）

（後援 文部省・朝日新聞社）

昭和28・11・28 朝日新聞社

開会のあいさつ	国立国語研究所長	西 尾 実
統計的研究より見たわが国民性	統計数理研究所	林 知巳夫
小中学生の学力水準	国立教育研究所	飯 島 篤 信
現代人の言語生活	国立国語研究所	中 村 通 夫
性とは何ぞや	国立遺伝学研究所	竹 中 要
閉会のあいさつ	国立遺伝学研究所長	小 熊 指

第3回講演会 昭和29・3・10 大阪毎日新聞社

(後援 大阪毎日新聞社)

われわれの言語生活	所 長	西 尾 実
私の見た日本語の性質	京大教授	吉 川 幸次郎
表現の可能性	評議員	中 島 健 蔵

新庁舎開き記念講演会 昭和30・3・26 一ツ橋講堂

あいさつ	所 長	西 尾 実
現代の敬語意識	所 員	柴 田 武
三つの語彙調査	所 員	林 大
ラジオニュースの文章心理学	評議員	波多野 完 治

公開討論会 昭和30・11・21 国立博物館講堂

日本の言語地理学		
あいさつ	所 長	西 尾 実
日本の言語地理学	所 員	柴 田 武
調査地点について	北海道地方調査員	石 垣 福 雄
調査語の選び方	奈良県地方調査員	西 宮 一 民
語彙より語法を	大阪府地方調査員	前 田 勇
どういう項目を選ぶか	所 員	徳 川 宗 賢
会を閉じることば	第1研究部長	岩 渕 悅太郎

第4回講演会 昭和31・12・8 仙台市商工会議所

(宮城県教育委員会・仙台市教育委員会と共催)

ことばの生活と文化	所 長	西 尾 実
言語経験と国語教育	所 員	輿 水 実

話しことばの構造

所員 大石 初太郎

最近の国語研究

兼任所員 佐藤 喜代治

創立10周年記念講演会 昭和34・3・7 一つ橋講堂

現代語の発展のために

あいさつ

所長 西尾 実

明治初期の書きことば

所員 山田 巍

現代語の標準

所員 林 大

話しことばの文法

所員 大石 初太郎

これからの中日本語

所員 岩淵 悅太郎

研究発表会 昭和36・2・24 一つ橋講堂

(後援 東京都教育委員会)

小学校児童の言語能力の発達

あいさつ

所長 岩淵 悅太郎

実験学級を受け持つて

(実験学校) 東京都 四谷第六小学校教諭 川上 潔

読解力指導の問題点

(協力学校) 東京都 方南小学校教諭 萩原 昭

読解力と聞く力との発達的関連

所員 村石 昭三

作文能力の学年的発達

所員 興水 実

文字力発達上の問題

所員 芦沢 節

農村児童の話しことばの発達の事例研究

(協力学校) 神奈川県 比々多小学校教諭 平田 精一

小学校入学時の言語能力の実態と指導の問題

(協力学校) 前大津市中央小学校教諭 大津市指導主事 池田 新市

同一児童の同一問題に対する反応の乱れ 所員 高橋 太郎

質疑応答 司会

所員 林 大

講演会 昭和36・5・28 札幌市 自治会館

(共催 北海道新聞社 後援 北海道教育委員会・北海道大学・

北海道学芸大学)

ことばの混乱 第1研究部長 林 大
国語問題と国語教育 所長 岩淵 悅太郎
北海道における言語生活 (シンポジウム)

方言言語研究室長 柴田 武
北海道大学助教授 五十嵐 三郎
札幌北高等学校教諭 石垣 福雄
北海道学芸大学教授 佐藤 誠
北海道学芸大学助教授 長谷川 清喜

研究報告会 昭和38・10・2 長岡市厚生会館ホール

(長岡市教育委員会・長岡市国語教育研究会と共催)

国民各層の言語調査 A

開会のあいさつ 長岡市教育委員長 小川 清一郎
長岡市における言語調査の概要 言語効果研究室長 永野 賢
ことばの変容とその過程 所員 高橋 太郎
国語政策の影響と普及の経路 言語効果研究室長 永野 賢
講演 国語科学習指導の科学化 第2研究部長 興水 実
謝辞 長岡市教育長 太刀川 浩一郎
閉会のあいさつ 長岡市国語教育研究会長 山峯 義三
講演会 昭和40・2・20 松江市役所集会室(会議室)
(松江市教育委員会と共に、後援 島根大学・島根県教育委員会・NHK
松江放送局・島根新聞社)

松江市民のことば
開会のあいさつ 松江市収入役 漢東 稔一郎
松江調査の概要 第1研究部長 林 大
松江市民の言語生活 所員 林 四郎
市民のことばの使い分け 所員 斎賀 秀夫
出雲方言と中国地方方言
島根大学教授 国立国語研究所地方研究員 広戸 博
方言と標準語 所長 岩淵 悅太郎

閉会のあいさつ 松江市教育研究所長 笹岡昌雄
研究発表会 昭和42・3・14 国立教育会館大会議室

あいさつ 所長 岩淵 悅太郎

新聞の語彙調査について 第1資料研究室長 林四郎

語彙調査における語彙表作成上の問題 所員 田中章夫

言語情報処理における意味の取扱い 所員 石綿敏雄

研究発表会 昭和43・1・20 銀座ガスホール

あいさつ 第1研究部長 大石 初太郎

「日本言語地図」の方法と意義 地方言語研究室長 野元菊雄

どんな資料を使ったか 所員 加藤正信

ある地図の解釈 所員 高田誠

標準語の地理的背景 所員 徳川宗賢

創立20周年記念講演会 昭和44・2・15 新宿紀伊国屋ホール

あいさつ—研究所と語彙研究 所長 岩淵 悅太郎

語彙調査と基本語彙 第四研究部長 林四郎

形容詞の意味の特質 書きことば研究室長 西尾寅弥

研究発表会 昭和45・6・1 岩波ホール

電子計算機による語彙調査

あいさつ 所長 岩淵 悅太郎

語彙調査データの自動処理法 第一資料研究室長 田中章夫

品詞認定の自動化 研究員 中野洋

現代新聞の漢字使用の傾向 研究員 野村雅昭

語彙調査と情報処理 言語計量調査室長 石綿敏雄

質疑応答 司会 第四研究部長 林四郎

研究発表会 昭和45・11・7 銀座ガスホール

幼児の読み書き能力

あいさつ 所長 岩淵 悅太郎

幼児はどれだけ読み書きできるか 研究員 天野清

かたかな・漢字をおぼえるまで 国語教育研究室長 村石昭三

幼稚園における文字の扱い 国語教育研究室長 村石昭三
幼児の読み書き調査から一調査に参加して
亀戸幼稚園長 山内昭道
九段幼稚園 原田愛子

研究発表会 昭和46・11・17 岩波ホール

電子計算機による言語調査

あいさつ	所長 岩淵 悅太郎
語彙調査システムの問題点	研究員 斎藤 秀紀
短単位連接表による語構成の分析	研究員 中野 洋
漢字かなまじり文の機能	研究員 野村 雅昭
表記調査システムの構想	第三資料研究室長 土屋 信一
質疑応答 司会	言語計量調査室長 石綿 敏雄

研究発表会 昭和48・2・17 岩波ホール

現代の漢字・漢語

あいさつ	所長 岩淵 悅太郎
現代漢語の源流	近代語研究室長 飛田 良文
現代漢語の語構造	研究員 野村 雅昭
中学生と表外漢字	第二研究部長 芦沢 節
質疑応答 司会	第四研究部長 林 四郎

シンポジウム 昭和48・3・23～24 国立国語研究所

聾児の言語指導の方法について

第1日

あいさつ	国立聴力言語障害センター 柴田 貞雄
講演 日本の聾教育の歴史的考察 愛媛大学教育学部	相原 益美
発表 聴覚障害幼児の言語指導	福岡聾学校 佐久間 フクヨ
聴障幼児のことばの指導 東京教育大学付属聾学校	大塚 明敏
聾学校における聴能訓練の現状と方向 徳島聾学校	安川 宏
発音指導の技術と補助サイン	松山聾学校 菊地 勝

第2日

あいさつ 所長 岩淵 悅太郎
講演 実験音声学の現況 東京大学医学部 藤村 靖
発表 聾教育に用いられる電子装置について
東北大電気通信研究所 鈴木 久喜
発声の安定化を目的とした訓練装置について
熊本大学工学部 渡辺 亮
討論 聴覚障害者の言語の学習・指導のためにどんな機械が必要で、
また開発可能かについて 司会 上村幸雄・比企静雄
研究発表会 昭和49・1・26 岩波ホール

地域社会と言語

あいさつ 所長 岩淵 悅太郎
地域社会と言語のうつりかわり 第二資料研究室長 飯豊 豪一
言語データの新しい分析法 研究員 江川 清
同一地点の継続研究 第一研究部長 野元菊雄
質疑応答 司会 第四研究部長 林四郎
研究報告会 昭和49・2・7 鶴岡市青年センター

鶴岡市における言語調査

あいさつ 鶴岡市教育長 富樫茂八
調査の概要 第一研究部長 野元菊雄
20年間にどう変ったか 研究員 江川 清
方言と共に語教育 第四研究部長 林四郎
シンポジウム 昭和49・2・27 東北大医学部艮陵会館

発音指導の方法について

座長 話しことば研究室長 上村幸雄
聾児の段階的な発音発語指導の概略
愛媛県立松山聾学校 菊地 勝
口蓋裂児の段階指導について 仙台市立長町小学校 山村 衛
方言地帯における音声と文字の指導
秋田県雄勝郡三梨小学校 駒木 勝一

英語の発音指導における問題点 宮城教育大学 渡辺慎悟
合同講演会（統計数理・東京国立文化財・国立国語の各研究所）

昭和50・6・14 発明会館ホール

あいさつ 統計数理研究所長 林 知己夫
森林の年齢 統計数理研究所第四研究部長 石田 元次
ことばと年齢 国立国語研究所言語行動研究部長 野元菊雄
民家の年齢 東京国立文化財研究所長 関野 克

研究発表会 昭和51・3・24 岩波ホール集会室

用語用字調査と機械処理

あいさつ 所長 林 大

助詞助動詞連接の計量的分析

一言語処理における多変量解析の応用一 研究員 米田正人
漢字プリンタによるターン・アラウンド・システム

研究員 斎賀秀紀

言語処理における一貫処理システム 研究員 中野洋

質疑応答 司会 第三研究室長 石綿敏雄

高校教科書用語調査における言語単位 研究員 露岡昭夫

表記のゆれを測る 研究員 佐竹秀雄

新聞語彙調査のカタカナ表記語 第一研究室長 土屋信一

漢字の計量的調査における問題点 第二研究室長 田中章夫

質疑応答 司会 言語計量研究部長 斎賀秀夫

日本語教育公開講座 国立国語研究所講堂

昭和52・3・5

日本語の特性 所長 林 大

日本語教育の概観 日本語教育研修室長 武田祈

昭和52・3・12

ことばと生活 日本語教育センター長 野元菊雄

日本語教育の実際 日本語教育研究室長 水谷修

日本語と日本語教育公開講座 国立国語研究所講堂

昭和52・11・26

日本語教育と国語教育

前所長 岩 渕 悅太郎

昭和52・12・3

日本語教育の現状

日本語教育研修室長 水 谷 修

日本語の文字

言語計量研究部長 斎 賀 秀夫

昭和53・3・4

日本語教授の実際

日本語教育研究室長 上 野 田鶴子

日本語の音声

日本語教育センター長 野 元 菊 雄

昭和53・3・11

日本語の特質

所 長 林 大

III 予算・機構・名簿・年表

予算の推移

年 度	定 員	歳 出 予 算			科 学 研 究 費	
		総 額	人 件 費	事 業 費	種 别	金 額
昭和 23	名 51	千円 8,175 (8か月分)				
24	52	12,592	5,203	7,389	試験研究, 刊行費	不 明
25	51	14,054	5,933	7,389	試 験 研 究	"
26	52	17,123	11,436	5,686	総 合 研 究	千円 300
27	51	19,200	9,970	9,230	総合研究, 刊行費	不 明 150
28	51	24,161	15,560	8,601	総 各 合 個 研 究 各 試 験 成 果 研 究 助 助 機 構 購 入 費	300 80 20 957
29	49	26,466	16,654	9,812	総 各 合 個 研 究 各 試 験 行 費	610 30 300 90
30	48	24,829	16,468	8,361	総 各 合 個 研 究 各 助 成 研 究 (2件)	200 120 40
31	48	26,633	17,788	8,845	試 験 成 果 研 究	250 20
32	48	29,729	20,533	9,196	各 個 試 験 研 究	120 400
33	48	32,687	22,352	10,335	総 各 合 個 研 究 各 試 験 研 究	700 140 350
34	49	33,216	23,220	9,996	総 合 研 究 各 個 研 究 (2件)	800 150
35	49	36,628	26,512	10,116	総 合 研 究 各 個 研 究	650 80
36	67	49,996	35,418	14,578	各 個 研 究	120
37	71	55,943	40,033	15,910	各 個 研 究 (2件)	150
38	71	60,319	46,798	13,521	各 個 研 究 (2件)	140
39	71	77,554	53,153	24,401	総 合 研 究 各 個 研 究 (2件)	500 200
40	72	103,583	59,666	43,917	総 合 研 究 各 個 研 究 (3件)	945 333
41	75	125,681	64,672	61,009	総 合 研 究 各 個 研 究	1320 180
42	76	151,005	69,873	81,132	総 合 研 究 各 個 研 究	1390 120

年 度	定 員	歳 出 予 算			科 学 研 究 費		
		総 額	人 件 費	事 業 費	種 別	金 額	
昭和 43	名 76	千円 157,172	千円 86,118	千円 71,054	試験研究 一般研究(C) 奨励研究(A)	千円 550 210 110	
	44	75	151,850	84,114	67,736	(B) 一般研究(C) (D) 試験研究(2)	3,200 270 150 940
	45	74	171,981	99,240	72,741	総合研究(A) 一般研究(B) (C)	3,000 2,680 500
	46	75	186,503	110,043	76,460	総合研究(A) 試験研究(1) 一般研究(B)	2,000 1,000 800
	47	75	202,559	127,005	75,554 ※6,530	試験研究(1) 一般研究(B)	1,120 2,600
	48	74	255,816	145,514	110,302 ※1,134	一般研究(B) (C) (D)	2,000 500 260
	49	76	279,534	177,594	101,940 ※3,530	総合研究(A) 一般研究(B) (C)	2,800 3,000 1,100
	50	77	398,002	253,046	144,956	—	—
	51	78	466,576	293,149	173,427	特定研究(1) 総合研究(B) 一般研究(A) (B)	1,000 1,800 1,800 4,900
	52	78	513,049	310,670	202,379	特定研究(2) " " 総合研究(A) (A) 一般研究(B) (B)	3,000 4,000 5,000 5,000 2,000 5,000 3,000
	53	78	537,933	334,957	202,976	特定研究(1) (B) (2) (B) 総合研究(A) (A) 一般研究(B) (B)	1,500 3,500 7,000 6,000 500 2,000 400 800

機構の変遷

昭和 23	昭 和 24	昭 和 25. 9	昭 和 26
総務課	庶務部	庶務部	庶務部
庶務掛	庶務課	"	"
会計掛	会計課	"	"
研究第1部	研究第1部	研究第1部	研究第1部
第1研究室	第1研究室 (東京方言) 各地方言)	" (話し言葉)	"
第2研究室	第2研究室 (共通語)	" (書き言葉)	"
	資料室		
研究第2部	研究第2部	研究第2部	研究第2部
第3研究室	第3研究室 (学力標準 の設定 ほか)	" (学習指導 法 ほか)	" (学習指導 法 ほか)
第4研究室	第4研究室 (学習指導 法 ほか)	" (学力標準 の設定, 言語効果 ほか)	" (学力標準 の設定 ほか)
第5研究室	第5研究室 (言語効果)		第5研究室 (言語効果)
第6研究室	第6研究室 (マス・コ ミニケーション ほか)	資料室	資料室

昭和 27.28	昭 和 29	昭 和 30	昭和 31.32
庶務部	庶務部	庶務部	庶務部
"	"	"	"
"	"	"	"
研究第 1 部	第一研究部 話しことば研究室 (旧第 1 研究室)	第一研究部 " " "	第一研究部 " " "
"	書きことば研究室 (旧第 2 研究室)	"	"
第 6 研究室 (地域 社会 の言 語)	地方言語研究室 (旧第 6 研究室)	"	"
研究第 2 部	第二研究部 国語教育研究室 (旧第 4 研究室)	第二研究部 " " "	第二研究部 " " "
"	言語効果研究室 (旧第 5 研究室)	"	"
"			第三研究部 近代語研究室
資料室	資料室	資料調査室 調査室 編集室 文献室	資料調査室 " " "

昭和 33~35	昭和 36~39	昭 和 40	昭和41~45
庶務部	庶務部	庶務部	庶務部
庶務課	"	"	"
会計課	"	"	"
図書室(33.4.1)	"	図書館(40.10.1)	"
第一研究部	第一研究部	第一研究部	第一研究部
話しことば研究室	"	"	"
書きことば研究室	"	"	"
方言言語研究室	"	"	"
第二研究部	第二研究部	第二研究部	第二研究部
国語教育研究室	"	"	"
言語効果研究室	"	"	"
第三研究部	第三研究部	第三研究部	第三研究部
近代語研究室	近代語研究室 (古代語研究室開設) 準備室	"	"
第四研究部	第四研究部	第四研究部	第四研究部
第1資料研究室	"	"	"
第2資料研究室	"	"	"
第3資料研究室	"	言語計量研究室	"

昭和46~48	昭和49.4~50	昭 和 51	昭 和 52~
庶務部	庶務部	庶務部	庶務部
"	"	"	"
"	"	"	"
"	"	"	"
第一研究部	言語体系研究部 第一研究室(旧話しことば研究室) 第二研究室(旧書きことば研究室)	言語体系研究部 第一研究室(旧言語効果研究室) 第二研究室(旧第2資料研究室)	言語体系研究部
"		"	"
"		"	"
"	言語行動研究部 第一研究室(旧言語効果研究室) 第二研究室(旧第2資料研究室)	言語行動研究部 第一研究室(旧言語効果研究室) 第二研究室(旧第2資料研究室)	言語行動研究部
第二研究部			
"			
"			
"	第三研究室(新設)	"	"
"			
第三研究部	言語変化研究部 第一研究室(旧地方言語研究室) 第二研究室(旧近代語研究室)	言語変化研究部 第一研究室(旧地方言語研究室) 第二研究室(旧近代語研究室)	言語変化研究部
"			
文献調査室	文献調査室	"	"
第四研究部	言語教育研究部 第一研究室(旧国語教育研究室)	言語教育研究部 第一研究室(旧国語教育研究室)	言語教育研究部
"			
"	言語計量研究部 第一研究室(旧第1資料研究室) 第二研究室(旧第3資料研究室)	言語計量研究部 第一研究室(旧第1資料研究室) 第二研究室(旧第3資料研究室)	言語計量研究部
"			
	第三研究室(旧言語計量調査室)	"	"
	日本語教育部(新設)	日本語教育センター(51.10.1名称変更)	日本語教育センター
	日本語教育研究室(新設)	日本語教育研究室	第一研究室(52.10.1) (旧日本語教育研究室)
	日本語教育研修室(新設)	日本語教育研修室	第二研究室(52.10.1) (新設)
			日本語教育研修室 日本語教育教材開発室

国立国語研究所評議員会

歴代会長・副会長

会 長	安 藤 正 次	24. 2. 5~27. 11. 19
	柳 田 国 男	28. 2. 27~32. 2. 4
	土 岐 善 磨	32. 3. 26~36. 10. 31
	久 松 潜 一	37. 1. 16~49. 1. 12
	有 光 次 郎	49. 3. 14~現 在
副 会 長	山 崎 匠 輔	24. 2. 5~32. 3. 26
	波 多 野 完 治	32. 3. 26~36. 2. 3
	有 光 次 郎	37. 1. 16~50. 2. 3
	佐 伯 梅 友	50. 3. 13~現 在

国立国語研究所歴代評議員一覧

(五十音順) ☆印 創設委員 ◎印 現

氏 名	就 任 期 間
碧 海 純 一◎	53. 2. 15 ~ 57. 2. 14
阿 部 真之助	35. 12. 1 ~ 39. 7. 9
阿 部 知 二	26. 2. 4 ~ 30. 2. 3
阿 部 吉 雄	36. 12. 15 ~ 48. 12. 14
有 光 次 郎◎	34. 2. 4 ~ 54. 2. 3
安 藤 正 次☆	24. 2. 4 ~ 27. 11. 19
石 井 庄 司◎	46. 7. 15 ~ 54. 2. 3
石 井 良 助	36. 12. 15 ~ 53. 2. 14
市 古 貞 次◎	51. 4. 1 ~ 57. 2. 14

伊 藤 忠兵衛	28. 2. 4 ~ 42. 2. 3
伊 藤 正 徳☆	24. 2. 4 ~ 26. 2. 3
岩 渕 悅太郎	51. 4. 1 ~ 53. 5. 19
岩 村 忍◎	49. 2. 15 ~ 54. 8. 31
江 尻 進◎	43. 1. 25 ~ 54. 2. 3
円 地 文 子	32. 2. 4 ~ 36. 2. 3
遠 藤 嘉 基◎	44. 12. 15 ~ 57. 2. 14
小 川 芳 男◎	49. 2. 15 ~ 57. 2. 14
尾 高 邦 雄	42. 2. 4 ~ 50. 2. 3
小 野 吉 郎	49. 2. 15 ~ 51. 9. 6
海 後 宗 臣☆	24. 2. 4 ~ 26. 3. 30
何 初 彦◎	50. 2. 4 ~ 54. 2. 3
桂 寿 一	36. 12. 15 ~ 42. 2. 3
川 端 康 成	24. 2. 4 ~ 26. 2. 3
金 田 一 京 助☆	24. 2. 4 ~ 36. 2. 3
倉 石 武四郎☆	24. 2. 4 ~ 36. 2. 3
桑 原 武 夫	26. 6. 30 ~ 38. 2. 3
高 津 春 繁	36. 12. 15 ~ 48. 5. 4
佐 伯 梅 友◎	38. 2. 4 ~ 54. 2. 3
坂 井 利 之◎	50. 2. 4 ~ 54. 2. 3
佐々木 八 郎	36. 12. 15 ~ 48. 2. 3
颯 田 琴 次☆	24. 2. 4 ~ 34. 4. 1
沢 田 慶 輔◎	36. 12. 15 ~ 57. 2. 14
沢 登 哲 一☆	24. 2. 4 ~ 38. 2. 3
高 木 貞 二☆	24. 2. 4 ~ 28. 2. 3
田 中 千禾夫◎	49. 2. 15 ~ 57. 2. 14
千 葉 雄次郎◎	44. 12. 15 ~ 57. 2. 14
坪 井 忠 二	36. 12. 15 ~ 38. 4. 5
東 条 操	24. 2. 4 ~ 32. 2. 3

土居光知☆	24. 2. 4 ~ 36. 2. 3
土岐善磨☆	24. 2. 4 ~ 36. 10. 31
時枝誠記☆	24. 2. 4 ~ 36. 10. 31
徳永康元◎	49. 2. 15 ~ 57. 2. 14
永井健三	38. 2. 4 ~ 50. 2. 3
永田清	32. 2. 4 ~ 32. 2. 14
中村光夫◎	38. 2. 4 ~ 54. 2. 3
中島健蔵☆	24. 2. 4 ~ 36. 10. 31
中島文雄	{ 32. 3. 16 ~ 36. 3. 15 36. 12. 15 ~ 44. 12. 14
西尾実☆	{ 35. 5. 16 ~ 36. 12. 3 36. 12. 14 ~ 51. 2. 16
西脇順三郎	36. 12. 15 ~ 48. 12. 14
野村秀雄	33. 2. 14 ~ 35. 12. 1
波多野完治	26. 3. 30 ~ 36. 2. 3
服部四郎☆	24. 2. 4 ~ 36. 2. 3
久松潜一	36. 12. 15 ~ 51. 3. 2
福島慎太郎◎	49. 2. 15 ~ 54. 2. 3
古垣鉄郎☆	24. 2. 4 ~ 31. 9. 18
細田菊雄	38. 2. 4 ~ 42. 2. 3
堀四志男◎	52. 1. 1 ~ 54. 2. 3
前田義徳	39. 10. 1 ~ 48. 7. 30
松方三郎	{ 26. 2. 4 ~ 38. 2. 3 42. 2. 4 ~ 48. 9. 18
松坂忠則☆	24. 2. 4 ~ 36. 2. 3
宮沢俊義	32. 3. 16 ~ 36. 3. 15
武藤俊之助	38. 7. 1 ~ 44. 12. 14
柳田国男☆	24. 2. 4 ~ 32. 2. 3
山崎匡輔☆	24. 2. 4 ~ 34. 2. 3

山本 勇造	34. 4. 1 ~ 49. 1. 22
横田 実	38. 2. 4 ~ 42. 12. 11
頬 惟 勤○	49. 2. 15 ~ 57. 2. 14
渡辺 茂	42. 2. 4 ~ 46. 5. 10

国立国語研究所歴代所長

井 手 成 三	23. 12. 20 ~ 24. 1. 31 (事務取扱)
西 尾 実	24. 1. 31 ~ 35. 1. 22
岩 渕 悅太郎	35. 1. 22 ~ 51. 1. 16
林 大	51. 1. 16 ~ 現 在

国立国語研究所歴代職員一覧 (五十音順)

- 創設以降現在（昭和53年9月末日）までの職員の名簿である。ただし臨時筆生は別記とする。
- 「職名又は所属」欄は、退職者については退職時のそれを、在職者については現在のそれを記載した。
- 「備考」欄は、退職者の現職を記載した。

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
浅井 恵倫	24. 3. 8~26. 5. 9	研究第2部長	死去
浅香 忠雄	46. 4. 1~現 在	庶務部会計課	
芦沢 節	24. 6. 1~53. 4. 1	言語教育研究部長	
味岡 善子	24. 2. 27~31. 3. 31	庶務部庶務課	
阿部 典子 (神山)	41. 4. 1~44. 3. 31	第四研究部言語計量 調査室	
阿部 るり (山之内)	24. 2. 28~30. 1. 31	第一研究部地方言語 研究室	
天野 清	40. 7. 1~48. 9. 1	第二研究部国語教育 研究室主任研究官	国立教育研究所第 3研究部第1研究 室長
荒川佐代子 (根岸)	32. 8. 1~現 在	庶務部庶務課	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
有賀 憲三	24. 3. 15~35. 12. 31 36. 1. 5~36. 3. 31 36. 10. 1~36. 11. 30 36. 9. 1~53. 4. 1	第四研究部第3資料研究室主任研究官 非常勤(図書室) 庶務部会計課	死去
安藤信太郎			
飯豊 毅一	24. 3. 31~現 在	言語変化研究部長	
井方喜美子	53. 4. 1~現 在	庶務部庶務課(図書館)	
池田 稔子	36. 7. 1~37. 3. 31	第四研究部第1資料研究室	
石井 久雄	52. 4. 1~現 在	日本語教育センター 日本語教育研修室研究員	
石川 明子	53. 6. 12~現 在	庶務部会計課	
石川 蓉子 (衛藤)	39. 4. 1~47. 8. 31	第一研究部話しことば研究室	
石坂 通子	42. 11. 11~43. 3. 31	庶務部庶務課	
石綿 敏雄	29. 1. 1~51. 4. 1	言語計量研究部第三研究室長	茨城大学教授(教養部)
泉 喜与子	33. 4. 1~38. 4. 1	第一研究部話しことば研究室	
市川 孝	30. 4. 1~34. 5. 1	第四研究部第1資料研究室研究員	お茶の水女子大学教授(文教育学部)
市橋 孝子 (小山)	35. 4. 1~40. 6. 15	第四研究部第2資料研究室	
伊藤 菊子 (塚田)	37. 4. 1~現 在	言語変化研究部文献調査室	
伊藤 仲二	25. 5. 31~46. 3. 31	庶務部庶務課課長補佐	
井上 繁	24. 1. 13~25. 11. 15 46. 4. 1~48. 3. 31	庶務部長	東京医科歯科大学施設部企画課課長補佐
井上 政和	52. 4. 1~現 在	庶務部庶務課人事係長	
井口 一郎	26. 1. 4~26. 3. 31	非常勤(研究第2部第4研究室)	
井手 成三	23. 12. 20~24. 1. 31	所長事務取扱	死去
岩佐 正	24. 2. 28~24. 12. 28	研究第2部研究員	広島大学名誉教授
岩田 茂男	42. 6. 1~現 在	庶務部会計課	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
岩田 純一	48. 10. 16~現 在	言語教育研究部第一研究室研究員	
岩田テル子 (松田)	42. 9. 27~44. 3. 30	庶務部会計課	
岩淵悦太郎	24. 2. 28~51. 1. 16	所長	死去
上田 正子 (牧野)	39. 6. 1~48. 3. 31	第三研究部近代語研究室	
上野田鶴子	52. 10. 1~現 在	日本語教育センター第二研究室長	
上原 孝敬	24. 4. 1~28. 3. 31	庶務部庶務課	〔現姓 熊谷〕
上村 幸雄	27. 5. 1~51. 4. 1	言語行動研究部第三研究室主任研究官	琉球大学教授(法文学部)
臼田 治夫	24 年~25. 4. 15	庶務部会計課	死去
宇田川ユキ	24. 1. 31~25. 3. 30	庶務部会計課	
内田 道夫	24. 3. 15~25. 6. 30	研究第2部第4研究室研究員	東京都立大学教授(人文学部)
宇野 義方	24. 3. 5~31. 3. 31	第一研究部話しことば研究室研究員	立教大学教授(文学部)
江頭 健一	27. 11. 1~37. 12. 31	庶務部会計課	死去
江川 清	42. 10. 16~現 在	言語行動研究部第二研究室長	
遠藤 嘉基	24. 2. 4~34. 3. 31	兼任所員	京都大学名誉教授 大谷女子大学教授(文学部)
大石初太郎	25. 4. 15~43. 3. 31	第一研究部長	専修大学教授(文学部)
黄木得二郎	25. 5. 1~35. 6. 20	庶務部会計課長	死去
大久保 愛 (寺島)	24. 3. 15~現 在	言語教育研究部第一研究室長	
大沢 敏子	31. 1. 6~31. 3. 31	庶務部会計課	
太田いくよ (下山)	44. 7. 1~31. 3. 31	第四研究部言語計量調査室	
大滝 弘美	51. 4. 1~53. 3. 31	言語計量研究部第二研究室	
大塚 通子	30. 4. 4~現 在	庶務部庶務課図書主任(図書館)	
大浪由紀夫	42. 4. 1~49. 6. 16	庶務部庶務課(図書館)	日本学術会議図書課資料係長
大間知篤三	24. 6. 1~26. 3. 31	非常勤(研究第2部資料室)	死去

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
岡田 敏子 (桜井)	46. 11. 1~50. 9. 30	言語計量研究部第三研究室	
岡本 奎六	28. 5. 1~48. 10. 31	非常勤(言語教育研究部第一研究室)	成城大学教授(文芸学部)
岡本 まち	33. 7. 18~現 在	庶務部庶務課文書主任	
荻原 混	48. 4. 1~53. 4. 1	庶務部長	国立劇場庶務課長
奥村 雅子	41. 6. 7~42. 1. 14	庶務部会計課	
尾崎源之助	32. 12. 4~40. 3. 31	庶務部長	死去
長田 厚子	50. 11. 1~現 在	言語計量研究部第一研究室	
小高 京子	42. 7. 16~現 在	言語計量研究部第三研究室	
小幡 利子	41. 11. 1~44. 12. 31	第四研究部第3資料研究室	
小原美恵子	51. 4. 1~現 在	言語計量研究部第二研究室	
鹿島 嶽	40. 4. 1~41. 9. 15 53. 4. 1~現 在	庶務部長	
梶原滉太郎	47. 3. 22~現 在	言語変化研究部第二研究室主任研究官	
片岡 裕子	53. 4. 1~現 在	庶務部庶務課	
加藤 ふみ	24. 2. 28~30. 12. 3	庶務部庶務課	死去
加藤 雅子	32. 1. 26~現 在	庶務部会計課	
加藤 正信	40. 4. 1~43. 4. 1	第一研究部地方言語研究室研究員	東北大学助教授(文学部)
加藤美代子 (篠田)	41. 4. 1~44. 6. 30	第四研究部言語計量調査室	
金沢 純子	42. 8. 11~42. 9. 4	庶務部会計課	
金田 とよ	28. 4. 11~現 在	庶務部会計課	
金森 麗子	35. 1. 11~35~3. 31	非常勤(第四研究部第2資料研究室)	
川又瑠璃子	27. 9. 1~現 在	言語教育研究部第一研究室研究員	
神部 尚武	47. 4. 1~現 在	言語行動研究部第三研究室主任研究官	
菊地 貞	46. 4. 1~現 在	庶務部庶務課課長補佐	
北村 甫	24. 2. 28~30. 6. 1	第一研究部地方言語研究室研究員	東京外国语大学教授(AA研所長)

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
君島 幸子	46. 7. 19~47. 9. 30	庶務部会計課	
木村 権治	41. 6. 1~現 在	庶務部会計課	
木村 繁	41. 5. 1~44. 4. 30	第四研究部言語計量 調査室研究員	(株)漢字ソフトウェア代表取締役
金田一春彦	24. 2. 28~28. 3. 31	非常勤(研究第1部 第一研究室)	上智大学教授(文学部)
草島 時介	24. 2. 14~28. 9. 15	研究第2部長	社会福祉法人 海星学園理事長
工藤 浩	49. 4. 20~現 在	言語体系研究部第一 研究室研究員	
国井 和朗	46. 4. 1~52. 4. 1	庶務部庶務課課長補 佐	新居浜高専庶務課 長
W. A. グローテース	40. 10. 11~49. 5. 13	非常勤(第一研究部 方言言語研究室)	上智大学講師(非常勤)
桑山 きよ	46. 3. 1~46. 7. 14	庶務部会計課	
見坊 豪紀	32. 1. 1~43. 3. 31	第三研究部長(近代 語研究室長併任)	
小池 漢 (織田)	30. 9. 3~53. 7. 13	第四研究部第2資料 研究室	
興水 実	24. 2. 28~45. 3. 31	第二研究部長	国語教育研究所長
小原ちい子	49. 4. 1~53. 3. 30	庶務部会計課	
小林 尚美	43. 4. 11~45. 6. 30	第四研究部言語計量 調査室	[現姓 寺田]
斎賀 秀夫	24. 3. 31~現 在	言語計量研究部長	
斎田 真也	51. 2. 3~51. 3. 30	非常勤(言語行動研 究部第三研究室)	
斎藤 恭子	37. 4. 1~42. 5. 31	庶務部庶務課	
斎藤 正	23. 12. 20~25. 10. 11	庶務部長	東京国立博物館長
斎藤 静志	25. 4. 15~32. 3. 26	庶務部会計課	一橋大学経理部経 理課長
斎藤 秀紀	40. 10. 1~現 在	言語計量研究部第三 研究室長	
斎藤瑠美子 (宇野)	37. 4. 1~40. 7. 15	第四研究部第3資料 研究室	
三枝やす江	26. 9. 1~31. 1. 15	庶務部庶務課	
酒井 陸夫	45. 4. 10~49. 3. 31	庶務部庶務課長	愛知教育大学庶務 課長
坂田 満	53. 4. 1~現 在	庶務部会計課長	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
笹森 芳江 (益子)	42. 3. 16~48. 3. 31	第四研究部第1資料研究室	
佐竹 秀雄	50. 4. 1~現 在	言語計量研究部第二研究室研究員	
佐藤喜代治	26. 4. 1~34. 3. 31	兼任所員	東北大学名誉教授 フェリス女学院大學教授(文学部)
佐藤 利男	34. 11. 10~35. 3. 31	非常勤(第一研究部 話しことば研究室)	
佐藤 美子	46. 8. 1~46. 10. 30	庶務部会計課	
佐藤 亮一	43. 8. 1~現 在	言語変化研究部第一研究室長	
真田 信治	50. 4. 1~現 在	言語変化研究部第一研究室研究員	
沢木 幹栄	51. 4. 1~現 在	言語変化研究部第一研究室研究員	
沢田さち子 (小林)	35. 4. 1~42. 8. 31	第四研究部第1資料室	
沢村都喜江	44. 4. 1~現 在	言語計量研究部第三研究室	
塙入 元義	25. 10. 31~27. 3. 31	研究第2部第3研究室研究員	
科野 千夏 (白木)	48. 4. 1~42. 3. 31	言語計量研究部第三研究室	
柴崎 香苗 (吉村)	33. 4. 1~42. 3. 15	第四研究部第1資料研究室	
柴田 武	24. 2. 28~39. 9. 1	第一研究部地方言語研究室長	東京大学教授(文学部)
渋谷 正則	24. 3. 20~45. 6. 25	庶務部会計課課長補佐	熊本大学経理部経理課長
渋谷よね子 (江頭)	24. 1. 10~25. 11. 30 27. 3. 1~30. 6. 30	庶務部庶務課	
志部 昭平	50. 10. 1~現 在	日本語教育センター 第一研究室研究員	
島崎 稔	24. 6. 1~27. 4. 15	研究第1部第6研究室研究員	中央大学教授(文学部)
島袋 盛敏	26. 1. 4~26. 3. 31	非常勤(研究第1部 第1研究室)	
下山いくよ	44. 7. 1~49. 6. 15	第四研究部言語計量 調査室	
正法地幹雄	52. 4. 1~現 在	庶務部庶務課長	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
上甲 幹一	24. 8. 15~34. 4. 1	第四研究部第3資料研究室長	死去
白井 陽子 (安藤)	45. 4. 1~47. 3. 31	第四研究部第3資料研究室	
白沢 宏枝	32. 4. 1~現 在	言語変化研究部第一研究室	
白砂 宏	29. 1. 4~29. 3. 31	非常勤(研究第2部第5研究室)	
進藤 哲子 (石川)	24. 3. 31~41. 3. 31	第三研究部近代語研究室研究員	東京女子大学短期大学部教授
新藤 昭二	24. 9. 1~27. 3. 31	庶務部庶務課	
杉戸 清樹	50. 4. 1~現 在	言語行動研究部第一研究室研究員	
鈴木 昭子 (福田)	39. 4. 1~48. 1. 31	第二研究部国語教育研究室	
鈴木 篠二	28. 5. 16~41. 3. 31	庶務部庶務課人事係長(図書室図書係長兼務)	
鈴木 重幸	35. 4. 16~43. 4. 1	第一研究部話しことば研究室主任研究官	横浜国立大教授 (教育学部)
鈴木美都代	42. 12. 1~現 在	言語体系研究部第一研究室	
鈴木 妙子 (山本)	49. 4. 16~50. 12. 31	非常勤(日本語教育研究部)	
鈴木 亨	25. 4. 15~現 在	庶務部会計課	
鈴木 元彦	41. 9. 16~45. 4. 9	庶務部庶務課長	東京大学物性研究所総務課長
菅野 裕子	40. 7. 1~44. 1. 31	第四研究部第2資料研究室	[現姓 美甘]
杉山美智子 (前田)	24. 2. 14~25. 4. 15	庶務部庶務課	
関 善二	26. 1. 4~26. 3. 31	非常勤(資料室)	
曾根原美智子 (中島)	43. 6. 1~46. 3. 31	第四研究部第2資料研究室	
高木 翠	27. 4. 1~現 在	言語体系研究部第二研究室研究員	
高田 誠	41. 4. 1~現 在	日本語教育センター第一研究室主任研究官	
高田 正治	24. 9. 1~現 在	言語行動研究部第三研究室主任研究官	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
高野美智子	51. 4. 1~現 在	日本語教育センター 日本語教育研修室	
高橋 一夫	24. 2. 28~35. 5. 1	第三研究部近代語研究室長	死去
高橋 進	27. 4. 1~28. 4. 16	研究部第2部第3研究室研究員	筑波大学教授(哲学・思想学系)
高橋 隆子	38. 4. 1~38. 12. 31	第一研究部話しことば研究室	
高橋 太郎	28. 8. 1~現 在	言語体系研究部第一研究室長	
武田喜美子	23. 12. 31~25. 5. 31	資料室	
武田 祈	49. 4. 11~現 在	日本語教育センター 日本語教育教材開発室長	
田島 正幸	41. 4. 1~現 在	庶務部庶務課	
田島 道子 (武田)	45. 4. 1~51. 3. 31	言語計量部第二研究室	
建石 和代	44. 1. 1~44. 1. 31	第四研究部第1資料研究室	
田中 章夫	34. 10. 16~52. 4. 1	言語計量研究部第二研究室長	大阪外国語大教授 (外国語学部)
田中 卓史	52. 1. 1~現 在	言語計量研究部第三研究室研究員	
田中 望	51. 10. 1~現 在	日本語教育センター 日本語教育研修室研究員	
田中美智子	47. 4. 3~47. 9. 16	庶務部会計課	
田中由紀子	43. 8. 1~45. 3. 31	第四研究部言語計量調査室	
谷内レイ子 (本多)	38. 4. 1~41. 11. 1	第四研究部第1資料研究室	
田原 圭子 (橋本)	27. 3. 1~現 在	言語変化研究部文献調査室研究員	
田村夕起子 (花井)	42. 9. 1~46. 12. 31	第四研究部言語計量調査室	
塙田実知代 (林)	48. 2. 16~現 在	言語行動研究部第一研究室	
塙田 吉彦	49. 12. 1~53. 4. 1	庶務部庶務課(図書館)	東京学芸大学附属図書館整理課
対島みどり	45. 10. 26~46. 2. 23	庶務部会計課	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
土屋 信一	39. 9. 1~現 在	言語計量研究部第一研究室長	
筒井 土郎	38. 6. 1~45. 7. 1	庶務部会計課用度係長	死去
拓植 春代	45. 9. 1~46. 3. 30	第四研究部言語計量調査室	
角田 令子	47. 4. 1~49. 12. 31	言語行動研究部第二研究室	
露峰 裕子	33. 10. 1~42. 3. 31	第四研究部第一資料研究室	
齋岡 昭夫	46. 8. 1~現 在	言語計量研究部第四研究室研究員	
齋岡 容子 (米田)	46. 4. 1~47. 3. 31	第四研究部第2資料研究室	
出牛清次郎	35. 7. 7~44. 3. 31	庶務部会計課長	
東郷はるみ (河東)	37. 5. 1~43. 5. 20	第四研究部第2資料研究室	
徳川 宗賢	30. 6. 1~50. 4. 1	言語変化研究部第一研究室長	大阪大学教授(文学部)
土佐南洋夫	52. 4. 1~現 在	庶務部会計課用度係長	
友部 浩	26. 1. 6~28. 6. 1	研究第2部資料室研究員	死去
永井 時雄	36. 1. 4~36. 7. 10	庶務部会計課	
長尾 紀子	38. 4. 1~39. 5. 15	第三研究部近代語研究室	
長沢ハルミ	36. 2. 1~37. 4. 30	第四研究部第2資料研究室	
中曾根 仁	34. 6. 11~現 在	言語変化研究部文献調査室	
中野 洋	43. 4. 1~現 在	言語計量研究部第一研究室研究員	
中野 文子 (山本)	42. 9. 1~46. 3. 31	第一研究部方言語研究室	
中俣久美子 (堀江)	42. 4. 1~現 在	言語計量研究部第一研究室	
中満 知生	49. 4. 1~52. 3. 31	庶務部庶務課長	
中村 明	42. 4. 1~現 在	言語行動研究部第一研究室長	奈良女子大学庶務課長

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
中村 佐仲	38. 1. 1~52. 4. 1	庶務部会計課用度係長	東京国立博物館会計課総務係長
中村 通夫	24. 1. 31~30. 3. 31	第一研究部話しことば研究室長	中央大学教授(文学部)
中本 純晴	49. 4. 16~50. 3. 31 (併任)	日本語教育研究室(文化庁国語課併任)	文部省体育局体育課
中山 典子	47. 4. 1~現 在	言語変化研究部第二研究室	
中山 典子	49. 5. 21~現 在	庶務部会計課	
永野 賢	24. 2. 28~41. 4. 1	第三研究部近代語研究室長	東京学芸大学教授(教育学部)
名古屋恒太郎	32. 3. 26~41. 3. 31	庶務部庶務課課長補佐	
西尾 實弥	36. 3. 1~52. 5. 15	言語体系研究部長	群馬大学教授(教育学部)
西尾 実	24. 1. 31~35. 1. 22	所長	
西山 博 (若宮)	25. 12. 15~46. 4. 1	庶務部庶務課人事係長	東京国立文化財研究所庶務課課長補佐
西山 洋子	32. 4. 1~36. 3. 31	第一研究部書きことば研究室	〔現姓 藤巻〕
根岸 達躬	44. 4. 1~47. 5. 31	庶務部会計課長	東京国立博物館総務部管理課長
根本今朝男	26. 5. 1~49. 4. 1	第二研究部国語教育研究室主任研究官	福岡教育大学教授(教育学部)
野崎 幸久	37. 10. 1~39. 9. 1	非常勤(医師)	
野元 菊雄	25. 12. 31~現 在	日本語教育センター長	
野村 雅昭	42. 4. 1~50. 4. 1 51. 8. 1~現 在	言語計量研究部第二研究室長	
芳賀清一郎	24. 3. 15~42. 3. 31	庶務部庶務課(図書館)	
林 大	24. 6. 1~42. 7. 21 49. 4. 11~現 在	所長	
林 四郎	28. 12. 1~49. 3. 31	第四研究部長	筑波大学教授(文芸・言語学系)
比嘉 春潮	32. 11. 1~33. 3. 31	非常勤(第一研究部)	死去
樋口 敏治	24. 1. 14~25. 4. 15	庶務部会計課	香川大学経理部長

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
飛田 良文	41. 4. 1~現 在	言語変化研究部第二研究室長	
日向 茂男	50. 2. 3~現 在	日本語教育センター 日本語教育教材開発室研究員	
平井 昌夫	24. 2. 28~31. 4. 30	第二研究部言語効果研究室主任	愛知淑徳大学教授 (文学部)
広瀬 二朗	50. 4. 1~現 在	庶務部会計課課長補佐	
広浜 文雄	25. 1. 31~40. 4. 1	第三研究部古代語研究室開設準備室主任 研究官	天理大学教授 (文学部)
福沢 周亮	52. 1. 13~52. 3. 31	非常勤 (言語教育研究部第一研究室)	筑波大学助教授 (心理学系)
伏見 とし (塚田)	24. 6. 30~33. 6. 30	庶務部会計課	
藤田 尚	32. 11. 1~33. 3. 31 38. 1. 1~38. 3. 31	非常勤 (第一研究部 話しことば研究室)	日本放送協会総合技術研究所主任研究員
藤原 与一	24. 2. 4~34. 3. 31	兼任所員	広島大学名誉教授 広島女学院大学教授 (文学部)
藤村 雅子 (紺野)	44. 4. 1~46. 6. 30	第四研究部第1資料研究室	
藤山 健次	24. 1. 31~29. 3. 31	庶務部会計課	
船倉 正章	37. 12. 25~46. 3. 31	庶務部会計課	
古田 東朔	26. 1. 4~26. 3. 31	非常勤 (研究第1部 第2研究室)	東京大学教授 (教養学部)
細井 房夫	25. 10. 11~32. 11. 27	庶務部長	東京家政大学事務局長
堀江よし子	48. 4. 1~現 在	言語行動研究部第二研究室	
本堂 寛	43. 4. 16~49. 8. 16	言語行動研究部第一研究室長	岩手大学教授 (教育学部)
増山 治子	25. 3. 31~38. 2. 15	庶務部庶務課	東京日本語学校講師
松井 利彦	43. 4. 1~47. 4. 1	第三研究部近代語研究室研究員	広島女子大学教授 (文学部)
松尾 拾	31. 6. 1~40. 3. 31	第四研究部長	日本大学教授 (文理学部)
松原英美子	41. 5. 9~41. 6. 4	庶務部会計課	

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
松本 昭	37. 2. 1~42. 4. 1	第四研究部第1資料研究室研究員	広島大学教授(総合科学部)
的場 益雄	43. 4. 1~46. 3. 31	庶務部長	(株)中西製作所東京支店部長
真取 正二	25. 11. 15~31. 8. 31	庶務部庶務課長	
丸山 敦	32. 9. 1~34. 5. 23	第三研究部近代語研究室	
三浦 清伍	24. 2. 14~44. 4. 1	庶務部会計課課長補佐	金沢大学経理部主計課長
三浦 好代 (浜田)	26. 4. 25~30. 1. 31	庶務部庶務課	
三島 良兼	31. 9. 1~40. 3. 31	庶務部庶務課長	名古屋工業大学事務局長
水谷 修	49. 4. 11~現 在	日本語教育センター 日本語教育研修室長	
水谷 静夫	24. 2. 28~39. 3. 31	第一研究部書きことば研究室研究員	東京女子大学教授(文理学部)
水谷 志免	24. 1. 31~25. 3. 30	庶務部会計課	
水野弥穂子	24. 1. 7~28. 3. 31	研究第1部第2研究室研究員	東京女子大学教授(文理学部)
湊 豊子 (芥川)	40. 8. 1~42. 8. 31	第一研究部地方言語研究室	
南 弘一	45. 5. 1~49. 7. 1	庶務部会計課用度係長	筑波大学病院部医事課収納係長
南 不二男	36. 4. 1~52. 3. 31 53. 10. 1~現 在	言語体系研究部長	
宮沢 武司	40. 4. 1~43. 3. 31	庶務部長	
宮沢 幹郎	24. 1. 19~27. 4. 30	庶務部会計課課長	
宮島 秋子 (石田)	33. 4. 1~37. 6. 15	第三研究部近代語研究室	
宮島 達夫	34. 5. 1~現 在	言語体系研究部第二研究室長	
宮田 信子 (小林)	43. 6. 1~49. 2. 5	第四研究部第3資料研究室	
宮地美保子 (高森)	27. 5. 1~37. 12. 15	第二研究部言語効果研究室	
宮地 裕	31. 4. 1~42. 4. 1	第一研究話しことば研究室長	大阪大学教授(文学部)
幸 文雄	47. 6. 1~49. 3. 31	庶務部会計課課長	茨城大学経理部経理課長

氏名(旧姓)	在職期間	職名又は所属	備考
村石 昭三	27. 6. 1~現 在	言語教育研究部長	
村尾 力	26. 8. 15~36. 9. 20	第四研究部第3資料研究室長	死去
村木新次郎	45. 4. 1~現 在	言語体系研究部第二研究室研究員	
森岡 健二	24. 4. 30~28. 9. 30	研究第2部第5研究室研究員	
森 百合子 (鈴木)	33. 4. 1~38. 1. 15	第一研究部書きことば研究室	上智大学教授(文学部)
八島 秀一	24. 1. 31~27. 10. 31	庶務部会計課	
安田 悅子	44. 1. 1~44. 1. 31	非常勤(第四研究部)	
屋久 茂子 (菅原)	37. 6. 16~43. 5. 31	第二研究部言語効果研究室	
山口 恵子	50. 4. 1~51. 3. 31	言語行動研究部第二研究室	
山田 巖	30. 10. 1~42. 3. 31	第三研究部長	駒沢大学教授(文学部)
山田千枝子	46. 4. 1~48. 1. 31	第一研究部地方言語研究室	
山中三千子 (中野)	40. 5. 1~43. 7. 31	第四研究部言語計量調査室	
山本 征子	33. 4. 1~35. 3. 31	第四研究部第3資料研究室	[現姓 今井]
山本 昌志	45. 7. 1~50. 4. 1	庶務部会計課課長補佐	国立西洋美術館庶務課課長補佐
山本 光夫	49. 7. 1~現 在	庶務部会計課経理係長	
吉沢 典男	28. 8. 1~38. 5. 16	第二研究部国語教育研究室研究員	東京外国语大学教授(外国语学部)
吉田芳太郎	29. 3. 31~37. 11. 17	庶務部会計課	死去
米田 純子 (竹内)	48. 4. 1~現 在	言語計量研究部第三研究室	
米田 正人	48. 4. 1~現 在	言語行動研究部第二研究室研究員	
龍福 房子 (植田)	36. 5. 1~37. 3. 31	第一研究部書きことば研究室	
渡部 新一	49. 4. 1~53. 3. 31	庶務部会計課課長	神戸大学経理部経理課長
渡辺 友左	28. 4. 1~現 在	言語行動研究部長	

臨時筆生

創設以降、昭和32年度までの研究補助者——現在の研究補助員に相当する。

姓 氏 名	姓 氏 名	姓 氏 名	姓 氏 名
新 井 俊 子	旧 坂 染 木	栗 沢 代 子	旧 山 下
井 崎 佳 子	田 谷 村	栗 沢 道 德	口 崎 井 竹 戸
石 田 瑛 子	芳 石 斎	栗 沢 か キ よ 子	樋 山 桜 佐 瀬 広 吉
石 塚 房 子	賀 田 藤	栗 沢 英 幸	原 山 清
石 渡 俊 澄	渡 辺	栗 沢 典 稔	田 水
伊 藤 湧 美 智 子	松 垣	栗 沢 ま つ こ	部 山 吉 込
伊 色 川 泰 澄	永 平	栗 沢 葉 玲	池 平 日 中
上 内 遠 大 岡 奥 尾 書 加 門 金 菊 菊 北 城 木 久	森 田	栗 沢 幸 泰	頼 安 藤
内 田 瑠 子	大 阿 島	栗 沢 正 喜	
遠 島 稲 子	平 部	栗 沢 美 立	
大 村 田 幸 平	島 田	栗 沢 康 清	
岡 田 二 倭 文 子	古 川	栗 沢 澄 ミ	
奥 島 孝 平		栗 沢 厚 芳	
尾 崎 傑 文 子		栗 沢 稲 喜	
書 上 文 富 美 子		栗 沢 誠 竹	
加 藤 倉 明 子		栗 沢 莎 田	
門 倉 丸 路 得 子		栗 沢 中 種	
金 井 地 茂 敬		栗 沢 滝 寺	
菊 北 脇 敬 子		栗 沢 一 子	
菊 北 戸 勝 保		栗 沢 子 明	
城 村 陽 陽		栗 沢 一 子	

氏名	姓	名	姓	名	姓	名
戸川 菊江	西岡	本田	藤町	田和	子	旧宮
外池 錄子	岡	田	丸	山	茂	城
富田 玲子			宮	崎	怜	
豊泉 美奈子	岡	本	水	谷	久美子	青木
長橋 紀江			山	本	英子	岡部
西尾 芙美子			山	口	玲子	黒木
野口 喜久子			吉	村	輝一	
樋口 三男			渡	辺	嘉子	
平島 やす江						

歴代職員一覧はまだ不備の点が若干ある。刊行途中で気付いたことは備考欄の〔 〕で示した。

地方研究員名簿

氏名	担当地域(年度)	現職(現住所)
青木千代吉	長野(昭24~40)	(長野市稻里町中水鉋1089)
秋山 正次	熊本(昭27~43, 49~50)	熊本大学教育学部教授
愛宕八郎康隆	長崎(昭42~43, 49~現在)	長崎大学教育学部教授
阿波 陽	山口(昭32~41)	山口県立豊浦高等学校教諭
五十嵐三郎	北海道(昭28~40, 49~現在)	札幌大学教授
生田 弥範	鳥取(昭25)	(米子市諏訪242)
池ノ内好次郎	埼玉(昭25)	(志木市上宗岡4-10-30)
石垣 福雄	北海道(昭25~43)	札幌大学講師
一谷 清昭	福島(昭25~29)	〈死去〉
糸井 寛一	大分(昭28~43)	大分大学教育学部教授
井上 彰	長崎(昭25~26)	
井上 章	秋田(昭51~現在)	秋田大学教育学部教授
井上 史雄	埼玉(昭49~51, 現在), 群馬・埼玉(昭52)	東京外国语大学助教授
井之口有一	滋賀(昭25~29)	聖母女学院短大児童教育科教授
今石 元久	広島(昭49), 鳥取(昭50~現在)	鳥取大学教育学部助教授
岩井 隆盛	石川(昭24~31, 42~43, 49~現在), 富山・石川(昭32~41)	金沢女子短期大学文学科教授・金沢大学法文学部講師
巖佐 正三	三重(昭25)	三重大学教育学部教授
岩本 実	宮崎(昭25~43)	宮崎大学教育学部教授
上野 勇	群馬(昭27~40, 49~51)	(高崎市高闘町95)
模垣 実	京都(昭24), 和歌山(昭25~27)	〈死去〉
江端 義夫	愛媛(昭52~現在)	広島大学教育学部助教授(福山分)

氏名	担当地域(年度)	現職(現住所) 校)
江原 裏	埼玉(昭34~40)	埼玉県入間郡大井町大井小学校教頭
遠藤 邦基	京都(昭37~43)	奈良女子大学助教授
遠藤 潤一	徳島(昭49~現在)	徳島大学教育学部助教授
大岩 正仲	千葉(昭25~31)	〈死去〉
大久保忠国	埼玉(昭26~32)	日本大学教授
大島 一郎	東京(昭41~43, 49, 51~現在)	東京都立大学人文学部教授
大城 健	沖縄(昭41~43)	琉球大学教育学部教授
大田栄太郎	富山(昭26~31)	富山大学講師
大橋 勝男	栃木(昭49~現在)	新潟大学教育学部助教授
岡 義重	島根(昭25~38, 40)	〈死去〉
岡田莊之輔	兵庫(昭24, 27~40)	(兵庫県美方郡温泉町湯)
岡野 信子	福岡(昭41~43), 山口(昭 49~現在)	梅光女学院大学助教授
奥村 三雄	京都(昭24~37), 滋賀(昭 40~43), 福岡(昭49~現在)	九州大学文学部教授
小野志真男	佐賀(昭25~35), 佐賀・長 崎(昭36~40)	佐賀大学名誉教授
鏡味 明克	鳥取(昭41~43)	岡山大学教育学部助教授
寛 五百里	岐阜(昭25~30)	〈死去〉
寛 大城	滋賀(昭33~40, 49~51)	滋賀県立虎姫高等学校教諭
加治工真市	沖縄(昭43, 49~51)	山口大学教育学部助教授
加藤 豪	岐阜(昭52~現在)	岐阜大学教育学部付属中学校教諭
加藤 信昭	千葉(昭32~34, 40, 49~現 在), 千葉・東京(昭35), 香 川・徳島・兵庫(昭41~43)	千葉大学教育学部教授
加藤 正信	宮城(昭33~39, 49~現在),	

氏名	担当地域(年度)	現職(現住所)
	宮城・山形(昭43)	東北大文学部助教授
金沢直人	茨城(昭35~40, 49~現在)	茨城大学教育学部教授・茨城大学 教育学部付属中学校長
金田元彦	神奈川(昭25~27)	国学院大学教授
上村孝二	鹿児島(昭24~43)	鹿児島大学名誉教授
川本栄一郎	宮城(昭41), 富山(昭42~ 43, 49~現在)	金沢大学教育学部教授
菅野宏	福島(昭30~33)	福島大学教育学部教授
神部宏泰	佐賀・長崎(昭41), 佐賀 (昭42~43, 49~現在)	佐賀大学教育学部教授
菊地正文	八丈島(昭24)	(東京都八丈町大賀郷)
北山長雄	青森(昭25)	(青森市茶屋町13-8)
熊谷直孝	滋賀(昭30~31, 52~現在)	滋賀県立長浜商工高等学校教頭
栗林貞一	京都(昭24)	
慶谷寿信	三重(昭35~43)	東京都立大学人文学部助教授
剣持隼一郎	新潟(昭25~43, 49~51)	国立長岡工業高等専門学校講師 (非常勤)
後藤和彦	千葉(昭36~40), 東京・神奈 川(昭41~43), 奈良(昭49~ 現在)	大妻女子大学教授
後藤利雄	山形(昭30~36, 40)	山形大学人文学部教授
此島正年	青森(昭26~42)	東海大学文学部教授
小松代融一	岩手(昭25~42, 49)	アレン短期大学講師
近藤四郎	広島(昭41~43)	広島県立広島国泰寺高等学校教諭
斎藤義七郎	山形(昭24~29), 神奈川(昭 30~31, 49~現在), 東京・神 奈川(昭32)	(川崎市高津区千年新町26)
坂口忠	岩手(昭43)	岩手県下閉伊教育事務所主任指導

氏名	担当地域(年度)	現職(現住所)
		主事
迫野 虔徳	熊本(昭51~現在)	熊本大学法文学部助教授
佐々木隆次	青森(現在)	青森県立郷土館研究員
佐藤喜代治	宮城(昭25~27)	フェリス女学院大学客員教授
佐藤 茂	福井(昭25~43, 49~現在)	福井大学教育学部教授
佐藤 亨	岩手(昭43)	岩手医科大学助教授
佐藤 虎男	山口(昭42~43), 京都(昭49~現在)	大阪教育大学教育学部教授
佐藤 誠	奈良(昭25), 北海道(昭41~43)	(大田区山王 2-28-13)
佐藤 亮一	山形(昭37~41), 宮城・山形(昭42)	国立国語研究所言語変化研究部第一研究室長
清水 茂夫	山梨(昭28~43, 49~現在)	山梨大学教育学部教授
杉浦 茂夫	三重(昭32~34)	甲南女子大学教授
杉山 正世	愛媛(昭25~43, 49~51)	(今治市河南町1-3-42)
須佐 善信	福島(昭34)	福島県立会津高等学校教諭
鈴木 一男	奈良(昭26~27)	大阪樟蔭女子大学教授
田口 美雄	茨城(昭25~31)	〈死去〉
武田 明	香川(昭25)	(香川県仲多度郡多度津町大字多度津甲561)
田尻 英三	鹿児島(昭49~現在)	鹿児島大学教育学部助教授
多々良鎮男	栃木(昭25~43)	作新学院女子短期大学教授
種 友明	大分(昭49~現在)	大分大学教育学部助教授
玉井 節子	香川(昭49)	坂出市立坂出中学校教諭
近石 泰秋	香川(昭26~40, 50~現在)	香川大学名誉教授
長 泰	徳島(昭24)	
都築 賴助	福岡(昭24~40)	〈死去〉

氏名	担当地域 (年度)	現職 (現住所)
寺師 忠夫	鹿児島 (昭41~42)	南日本短期大学講師
寺田 泰政	神奈川 (昭24)	浜松市立高等学校教諭
土居 重俊	高知 (昭25~43, 49~現在)	四国女子大学教授
外山 映次	群馬・埼玉 (昭41~43)	埼玉大学教育学部助教授 (世田谷区梅丘1-26-12)
中沢 政雄	群馬 (昭24~26)	静岡大学教育学部助教授
中條 修	静岡 (昭52~現在)	沖縄国際大学講師
仲宗根政善	沖縄 (昭33~37, 40~43)	琉球大学教育学部教授
中松 竹雄	沖縄 (昭52~現在)	(茨城県鹿嶼郡鹿嶼町港ヶ丘住友 金属第2高天原住宅6-507)
奈良 徹夫	宮城 (昭24)	(札幌市豊平区平岸4条9丁目ド ーエル札幌415号)
新谷 恒蔵	北海道 (昭25)	長崎大学教育学部教授
西島 宏	長崎 (昭27~34, 42~43)	皇學館大学教授 (図書館長)
西宮 一民	奈良 (昭28~36, 41~43), 奈良・大阪 (昭37~40)	新潟県立西新発田高等学校教諭
野口 幸雄	新潟 (昭52~現在)	茨城大学教養部教授
野林 正路	茨城・千葉 (昭41~43)	名古屋大学文学部教授
野村 正良	愛知 (昭25~31)	東京工業大学教授・ルール大学日本語科講師
芳賀 綏	北海道 (昭25~27)	静修短期大学教授
長谷川清喜	北海道 (昭32~47)	大阪教育大学教授
土部 弘	大阪 (昭41~43)	大阪樟蔭女子大学長 (教授)
原 安雄	山口 (昭25)	沖縄県立首里高等学校教諭
原田 芳起	熊本 (昭25~26)	N H K 総合放送文化研究所放送用 語研究部
比嘉 成子	沖縄 (昭42~43)	
日高貢一郎	宮崎 (昭49~現在)	
日野 資純	神奈川 (昭28~29, 35~40),	

氏名	担当地域(年度)	現職(現住所)
	東京・神奈川(昭33~34), 静岡(昭41~43, 49~51)	静岡大学人文学部教授
平松 日吉	大分(昭26~27)	九州女子大学教授
広戸 悅	鳥取(昭26~38), 鳥取・島根(昭39~40), 島根(昭41~43, 49~現在)	京都家政短期大学教授
廣濱 文雄	三重(昭49~52)	天理大学文学部教授
北条 忠雄	秋田(昭24~43, 49~50)	聖霊女子短期大学教授(図書館長)
外間 守善	沖縄(昭38~43)	法政大学文学部教授
堀田 要治	三重(昭26~32)	武蔵大学人文学部教授
堀籠 敬藏	宮城(昭28~32)	宮城県警察本部教養課
本堂 寛	岩手(昭41~42, 50~現在)	岩手大学教育学部教授
前田 勇	大阪(昭25~36, 40)	〈死去〉
馬瀬 良雄	東京(昭36~40), 長野(昭41~43, 49~現在)	信州大学人文学部教授
松本 宙	青森(昭43, 49~52)	宮城教育大学助教授
三浦 芳夫	福島(昭35~40, 49~現在)	学校法人安積商業高等学校講師
三谷 栄一	山梨(昭25~27)	実践女子大学教授(図書館長)
宮城 文雄	徳島(昭26~40)	四国女子大学教授
宮島 達夫	茨城(昭32~33)	国立国語研究所言語体系研究部第二研究室長
虫明吉治郎	岡山(昭25~43, 49~現在)	岡山県立玉野高等学校教頭
村内 英一	和歌山(昭28~43, 49~現在)	和歌山大学教育学部教授
村岡 浅夫	広島(昭24~40)	(広島県佐伯郡五日市町屋代121)
室山 敏昭	鳥取(昭49), 広島(昭50~現在)	広島大学文学部助教授
望月 誠三	静岡(昭24~40)	大垣女子短期大学教授
谷開 石雄	岐阜(昭31~43, 49~51)	岐阜県立岐阜高等学校教諭

矢作 春樹	山形 (昭49～現在)	寒河江市立陵南中学校教諭
山口 幸洋	愛知 (昭49～現在)	(静岡県浜名郡新居町新居1144)
山田 達也	愛知 (昭32～43)	名古屋市立大学教養部教授
山本 俊治	大阪 (昭49～現在)	武庫川女子大学文学部教授
和田 實	兵庫 (昭25～35, 38～43, 49 ～現在)	神戸大学教養部教授
渡辺 保	山口 (昭26～31)	(山口市三の宮 1—3—12)
渡辺 義夫	福島 (昭41～43)	福島大学教育学部助教授

国立国語研究所年表

年 度	月 日	記 事
昭和23	23. 12. 20	国立国語研究所設置法公布施行。(昭和23年法律第254号) 研究所庁舎として宗教法人明治神宮所有の聖徳記念絵画館の一部を借用。文部次官井手成三所長事務取扱に就任。庶務部及び2研究部によって発足。
	24. 1. 31	西尾実初代所長就任。
昭和24		<ul style="list-style-type: none">・各種の調査研究を開始する。・各地方言の実態調査のための準備調査を八丈島で実施する。→報告1・福島県白河市および附近の農村において言語生活の実態調査をする。(統計数理研究所・民俗学研究所との共同調査) →報告2・各地の方言研究者を地方調査員として委嘱し、同一課題による全国的調査を開始する。 東条カード(東条操氏の収集した方言カード約36万枚)の整理を始める。
	25. 1. 28	第1回公開講演会(医師会館講堂)
昭和25		<ul style="list-style-type: none">・推計学的方法に基づく大量の語彙調査を婦人雑誌について始める。→報告4・山形県鶴岡市および附近の農村において言語生活の実態調査をする。(統計数理研究所との共同調査) →報告5・長野県飯田市および久堅村において言語生活の実態調査をする。(信濃教育会教育研究所に統計数理研究所とともに協力)
	25. 5. 20	第2回公開講演会(京都大学文学部)

- 昭和26
- ・初年度より継続の国語の学力標準設定に関する調査を
　今年度より文部省調査課の学力水準調査に協力して行
　うこととする。→年報3
 - ・福島県白河市において、新聞の読まれ方とパーソナリ
　ティとの関係について調査する。(新聞協会との共同
　調査) →年報3
 - ・(月刊雑誌『言語生活』筑摩書房刊が10月から刊行さ
　れる。)
26. 6. 2 第1回研究発表会(東京大学法文経第36番教室)
26. 12. 26 山本有三氏所有の建物(三鷹市下連雀91番地)に国立
　国語研究所仮分室を設け、文部大臣の認可を受けた。
　同日研究部第2部の移転を完了。
- 昭和27
- ・大量の録音資料を使って日常談話語の構造の特性を明
　らかにする研究を始める。報告→8
 - ・三重県上野市を中心に敬語行動の調査をする。(統計
　数理研究所・国立教育研究所の所員との共同調査) →
　報告11
 - ・新聞がどのように利用され理解されているか、この問
　題を東京および千葉県の農村の小・中学校生徒につい
　て調査する。(新聞協会との共同調査) →報告6
 - ・研究第1部の第1研究室を二分して、新たに第6研究
　室を設ける。
 - ・学力水準調査は本年度より国立教育研究所によって全
　国的規模で行われることになり、これに参加協力す
　る。
28. 3. 28 第2回研究発表会(お茶の水女子大学講堂)
28. 3. 31 三鷹仮分室を山本家へ返還、研究第2部は新宿区立四
　谷第小学校内に移転の手続き完了。
- 昭和28
- ・総合雑誌の語彙調査に入る。→報告12・13・19

- ・愛知県岡崎市で敬語と敬語意識に関する一連の調査を実施する。→報告11
 - ・実験学校と協力学校を設けて、児童の言語能力の発達に関する追跡的研究を始める。→報告7・10・14・26
28. 5. 1 三鷹仮分室移転、新たに新宿区立四谷第6小学校内に分室を設け、引き続き研究第2部が勤務。
28. 11. 28 統計数理・国立教育・国立国語・国立遺伝各研究所連合講演会（後援：文部省・朝日新聞社）（朝日新聞社）
29. 3. 10 第3回公開講演会（後援：大阪毎日新聞社）（大阪毎日新聞社）
- 昭和29
- ・語形確定のための基礎調査を始める。→年報7
 - ・地方調査員に委託して、全国各地方言の概観調査を始める。→報告16
 - ・島袋盛敏氏執筆の原稿『琉球語辞典』に検討を加え、訂正増補した上で刊行する作業を始める。→資料集5
 - ・高校生の、新聞への接近・理解とその影響について実態調査を始める。（日本新聞協会その他との共同調査）
→『高校生と新聞』
 - ・『国語年鑑』の刊行を開始する。
29. 10. 1 千代田区神田一ツ橋1丁目1番地の一橋大学所有の建物を借用し分室とも移転。
- 組織規程改正（各研究室の名称変更）
30. 3. 26 新庁舎開き祝賀式並びに記念講演会（一橋講堂）
- 昭和30
- ・日本言語地図作成のための準備研究に入る。
 - ・勤労青年の、新聞への接近理解とその影響について実態調査をする。（日本新聞協会 その他との共同調査）
→『青年とマス・コミュニケーション』
 - ・明治時代語の調査研究として「郵便報知新聞」の用語・表記法・文体の調査を始める。→報告15

30. 10. 1 組織規程改正。庶務部及び4研究部となる。
31. 11. 21 公開討論会（日本の言語地理学）。（国立博物館講堂）
- 昭和31
・話すことばの文型について研究を始める。→報告18・
23
・雑誌一般の用語用字の概観調査を始める。→報告21・
22・25
31. 12. 8 第4回公開講演会（宮城県教育委員会・仙台市教育委員会と共に）（仙台市商工会議所）
31. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
- 昭和32
・日本言語地図作成のための本格的調査に入る。→報告
30（1～6）
- 昭和33
・北海道の言語の実態と共通語化の過程に関する調査を
始める。→報告27
・同音語の研究に着手する。→報告20
・新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究を始め
る。
- 昭和34
・前年度に継続して、各種の調査研究をすすめる。
・創立10周年記念行事を行う。
34. 3. 6 国立国語研究所創立10周年祝賀式
34. 3. 7 国立国語研究所創立10周年記念講演会（一橋講堂）
35. 1. 22 西尾実所長退任。岩淵悦太郎2代所長就任。
- 昭和35
・話すことばの文型の研究は昨年度で対話資料による調
査研究を終了し、今年度より、独話資料による研究を
始める。→報告23
・明治初期の「話すことば（会話文）」の用語調査を始
める。→年報12
36. 2. 24 国立国語研究所研究発表会（後援：東京都教育委員会）（一ツ橋講堂）
- 昭和36
・中学校生徒の言語能力の発達に関する研究を始める。

- 報告36
- ・国語文章の横組みのための印刷条件の研究を始める。
 - 報告24
 - ・類義語の研究を始める。→報告28
36. 5. 28 国立国語研究所講演会（共催：北海道新聞社、後援：北海道教育委員会、北海道大学、北海道学芸大学）
(札幌市自治会館)
- 昭和37
- ・国民各層の言語生活の実態調査を、主として文字生活について新潟県長岡市で実施する。→報告29
37. 4. 1 庁舎移転。現在の北区西が丘3丁目9番地14号（旧北区稻付西山町）（旧陸軍兵器補給廠跡）
- 昭和38
- ・各地方言の共通語との対照的研究に着手する。
 - ・国民各層の言語生活の実態調査を市民の話しことばに主眼を置いて、島根県松江市で実施する。→報告41
 - ・電子計算機の導入を目指して、大量語彙調査機械化のための準備的研究を始める。
38. 10. 2 研究報告会（長岡市を中心とする言語調査）（長岡市厚生会館）
- 昭和39
- ・動詞・形容詞等の意味・用法の記述的研究を始める。
→資料集7, 報告43, 44
 - ・日本言語地図作成のための調査は本年度で臨地調査を終える。
 - ・中学校生徒の言語能力の発達に関する研究は本年度より本調査に入る。→報告36
 - ・現代敬語の調査研究は準備的調査を奈良市、高松市、大田原市で実施する。→部内資料「現代の敬語意識に関するアンケート調査」
 - ・書庫及び閲覧室の新設が行われ、本格的な図書館が完成する。

39. 12. 19 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
40. 2. 20 国立国語研究所講演会（共催：松江市教育委員会）
(松江市役所会議室)
40. 3. 19 図書館竣工。
- 昭和40
- 『日本言語地図』の刊行を始める。→報告30—1～6
 - 言語の表現機能と伝達効果の研究として、本年度より新たに「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」を始める。→報告50
 - 幼児の言語発達に関する準備的研究を始める。
 - 社会構造と言語の関係についての基礎的研究を始める。→報告32, 35, 47, 53
 - 電子計算機（H I T A C 3010）を導入する。
 - 現代語の表記法に関して、「文字使用の実態調査」を始める。→報告40
40. 11. 9～10 地方研究員全国協議会（研究所大会議室）
40. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
41. 1. 10 (旧)電子計算機室竣工（1月11日, H I T A C 3010 設置）
41. 3. 1 電子計算機の使用開始
- 昭和41
- 全国方言文法の対比研究を始める。
 - 電子計算機を使って、新聞の語彙調査を始める。→報告37, 38, 42, 48
 - 電子計算機による話すことば資料の分析・処理等の研究を始める。→報告31, 34, 39, 41, 46, 48, 51, 54, 59
41. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
42. 2. 6 敷地等大蔵省から所管換え。
42. 3. 14 国立国語研究所研究発表会（国立教育会館大会議室）
- 昭和42
- 就学前児童の言語能力に関する全国調査を始める。→

報告45, 58

- ・新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究を始める。
→資料集8, 報告56

42. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
43. 1. 20 国立国語研究所研究発表会（銀座ガスホール）
- 昭和43
- ・X線像による調音運動の研究を始める。→報告60
 - ・明治初期の翻訳小説における漢語の研究を始める。
 - ・『日本言語地図』の検証調査を始める。
 - ・創立20周年記念行事を行う。
43. 6. 15 文化庁設置とともに、文部省から移管され、文化庁附属機関となる。
43. 12. 20 国立国語研究所創立20周年記念日
44. 2. 15 国立国語研究所創立20周年記念講演会（紀伊国屋ホール）
44. 2. 22 // // 公開展示会（研究所）
- 昭和44
- ・「現代語の文法の研究—文体と文法との関係—」の題目で比喩表現の研究を始める。→報告57
 - ・現代語の形成過程に関する基礎的研究を始める。
44. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
- 昭和45
- ・現代語の中での漢字の機能を各字についてとらえる
「漢字機能度の研究」を始める。
45. 6. 1 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
45. 11. 7 // (銀座ガスホール)
45. 12. 19 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
- 昭和46
- ・現代児童生徒の言語能力の動態調査を始める。→報告63
 - ・社会変化と言語生活の変容についての調査を山形県鶴岡市において実施する。→報告52
46. 11. 17 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）

46. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
- 昭和47
- 図形および文字の知覚および認識機構の研究を始める。
 - 「語彙論上の諸問題に関する調査研究」の題目で、同義的な類義語についての調査を東京と大阪で実施する。
 - 「漱石・鷗外の用語の研究」の題目で、電子計算機による諸作品の索引作成を始める。
48. 2. 17 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
48. 3. 23~24 // シンポジウム（国立国語研究所）
- 昭和48
- 各地方言親族語彙の言語社会学的研究を始める。
48. 11. 26 地方研究員全国協議会（私学会館）
49. 1. 26 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）
49. 2. 7 国立国語研究所研究報告会（鶴岡市青年センター）
49. 2. 27 // シンポジウム（東北大学医学部艮陵会館）
49. 3. 22 研究棟（第2号館）竣工。
- 昭和49
- 現代語文法の記述的研究を始める。
 - 各地方言資料の収集および文字のための研究を始める。→資料集10
 - 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究を始める。
 - 電子計算機による高校教科書の用語調査を始める。
 - 日本語教育のための内容と方法に関する基礎的研究を始める。
 - 大都市における言語生活の実態調査を東京と大阪で実施する。
 - 電子計算機による「作品の用語検索組織の研究」を始める。

- ・現代の国語表記におよぼした洋学・漢学の影響について調査を始める。
 - 49. 4. 11 国立国語研究所組織規程を全面改正し、同時に日本語教育部が発足。庶務部、5研究部及び日本語教育部となる。
 - 49. 6. 5 研究棟落成式
 - 49. 7. 15~19 日本語教育研修会（文化庁と共に）=初心者研修（東京会場・国立教育会館）
 - 49. 8. 20~24 日本語教育研修会（文化庁と共に）=初心者研修及び現職者研修（大阪会場・大阪府立中小企業文化会館及び大阪外国語大学）
 - 49. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所会議室）
- 昭和50
- ・近代になって、どのような語がふえたか、を知るための「現代語彙の概観的調査」を始める。
 - ・敬語使用の実態を把握するため「敬語の社会的研究」を始める。
 - ・現代語の文体論的研究を始める。
 - ・「新聞用語調査の短単位語処理」の題目で、短単位語による新聞用語調査を始める。
 - ・日本語教育のための基本的語彙に関する調査研究を始める。
 - ・日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究を始める。
 - ・日本語教育の現状（内容と方法）についての実態調査を始める。
 - ・日本語教育教材および教授資料の作成を始める。
 - ・日本語教育研修の調査および実施を始める。
50. 6. 14 統計数理・国立国語・東京国立文化財各研究所合同講演会（発明会館ホール）

50. 7. 22～26 日本語教育研修会＝初心者研修及び現職者研修（東京会場・オリンピック記念青少年総合センター）

50. 8. 5～9 日本語教育研修会＝初心者研修及び現職者研修（大阪会場・大阪府中小企業文化会館）

51. 1. 16 岩淵悦太郎所長退任。林大3代所長就任。

51. 3. 24 国立国語研究所研究発表会（岩波ホール）

昭和51

- ・日本語の対照言語学的研究として、日独語、日朝語、および日本人と外国人との行動様式について、比較対照的研究を始める。

- ・表現法の全国的地域差を明らかにするための調査方法に関する研究を行う。

- ・幼児・低学年児童の語彙量や語彙内容を明らかにする調査を始める。

- ・漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究を始める。

51. 7. 20～24 日本語教育研修会＝初心者研修及び現職者研修（東京会場・オリンピック記念青少年総合センター）

51. 8. 3～7 日本語教育研修会＝初心者研修及び現職者研修（大阪会場・大阪府中小企業文化会館）

51. 9. 30 管理部門及び日本語教育センター等庁舎（第1号館及び第3号館）竣工。

51. 10. 1 組織規程一部改正。日本語教育部を日本語教育センターに改める。

51. 11. 18 国立国語研究所日本語教育センター等庁舎落成式

51. 12. 20 国立国語研究所創立記念講演会（研究所講堂）

52. 3. 5 日本語教育センター公開講座（研究所講堂）

52. 3. 12 // (//)

昭和52

- ・言語行動を総合的に把握するために、言語行動様式の分析のための基礎的研究を始める。

- ・方言における音韻・文法の諸特徴について、全国的地域差を明らかにするための調査活動を始める。
 - ・現代表記の多様性の実態と表記意識に関する調査研究を始める。
 - ・日本人と外国人との言語行動様式の比較対照的研究を始める。
 - ・談話行動の実験社会言語学的研究を始める。
 - ・日本語教育のための基本的な言語能力の測定に関する研究を始める。
 - ・児童の概念形成過程における言語の役割とその教育効果に関する研究を始める。
 - ・表現法の全国調査研究を始める。
 - ・国語辞典編集準備委員会が発足する。
52. 4. 18 組織規程一部改正。日本語教育センターに新たに第二研究室（10月1日以降）及び日本語教育教材開発室設置。
52. 5. 23 昭和52年度日本語教育長期専門研修（開講（53. 2. 28まで）（研究所研修室）
52. 7. 26～30 昭和52年度日本語教育夏季研修会=初級研修及び現職者一般研修（東京会場・国立国語研究所）
52. 8. 4～8 昭和52年度日本語教育夏季研修会=初級研修及び現職者一般研修（大阪会場・大阪府中小企業文化会館）
52. 10. 8 国語辞典編集準備委員会発足
52. 11. 7 母語別学習教材作成準備委員会発足
52. 11. 26 日本語教育センター公開講座（研究所講堂）
52. 12. 3 " (")
53. 2. 1 日本語教育センター運営委員会発足
53. 3. 4 日本語教育センター公開講座（研究所講堂）
53. 3. 11 " (")

- 昭和53
- ・現代人文関係用語の成立過程に関する研究を始める。
 - ・日本語教育のための基本語彙と各国語の基本語彙との比較対照研究を始める。
 - ・日本語教育に関する情報資料の収集・提供を始める。
 - ・言語運用メカニズムの発達的研究を始める。
53. 4. 10 昭和53年度日本語教育長期専門研修開講（54. 2. 28
まで）（研究所研修室）
53. 7. 24～28 昭和53年度日本語教育夏季研修＝初級研修及び現職者
研修（東京会場・国立国語研究所）
53. 7. 31～8. 4 昭和53年度日本語教育夏季研修＝初級研修及び現職者
研修（大阪会場・大阪府中小企業文化会館）



国立国語研究所刊行書（市販）一覧

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版刊	品切れ
2	言語生活の実態 —白河市および付近の農村における—	"	"
3	現代語の助詞・助動詞 —用法と実例—	"	700円
4	婦人雑誌の用語 —現代語の語彙調査—	"	500円
5	地域社会の言語生活 —鶴岡における実態調査—	"	品切れ
6	少年と新聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—	"	180円
7	入門期の言語能力	"	品切れ
8	談話語の実態	"	"
9	読みの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	"	"
10	低学年の読み書き能力	"	"
11	敬語と敬語意識	"	"
12	総合雑誌の用語(前編) —現代語の語彙調査—	"	"
13	総合雑誌の用語(後編) —現代語の語彙調査—	"	"
14	中学年の読み書き能力	"	400円
15	明治初期の新聞の用語	"	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	"
17	高学年の読み書き能力	秀英出版刊	"
18	話しことばの文型(1) —対話資料による研究—	"	800円
19	総合雑誌の用字	"	品切れ
20	同音語の研究	"	"
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) —総記および語彙表—	"	"
22	現代雑誌九十種の用語用字(2) —漢字表—	"	1,000円

23	話しことばの文型(2) —独話資料による研究—	秀英出版刊	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	"	"
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) —分析—	"	"
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	"	"
29	戦後の国民各層の文字生活	"	400円
30-1	日本言語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本言語地図(2)	"	"
30-3	日本言語地図(3)	"	"
30-4	日本言語地図(4)	"	8,000円
30-5	日本言語地図(5)	"	9,000円
30-6	日本言語地図(6)	"	10,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	"	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	"	350円
34	電子計算機による国語研究(II) —新聞の用語用字調査の処理組織—	"	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	"	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	"	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	"	1,300円
38	電子計算機による新聞の語彙調査(II)	"	2,800円
39	電子計算機による国語研究(III)	"	700円
40	送りがな意識の調査	"	1,500円
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	"	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(III)	"	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	"	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	"	3,000円

45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観	"	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(IV)	"	3,000円
49	電子計算機による国語研究(V)	"	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	"	品切れ
51	電子計算機による国語研究(VI)	"	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	"	1,800円
53	言語使用の変遷(1) ——福島県北部地域の面接調査——	"	2,500円
54	電子計算機による国語研究(VII)	"	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	"	1,300円
56	現代新聞の漢字	"	3,000円
57	比喩表現の理論と分類	"	6,000円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,500円
59	電子計算機による国語研究(VIII)	秀英出版刊	1,300円
60	X線映画資料による母音の発音の研究 ——フォネーム研究序説——	"	2,500円
61	電子計算機による国語研究(IX)	"	1,300円
62	研究報告集(1)	"	1,700円
63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,000円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査——現代新聞用語の一例——	"	品切れ
3	送り仮名法資料集	"	"
4	明治以降国語学関係刊行書目	"	"
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,600円
7	動詞・形容詞問題語用例集	"	1,700円

8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	"	500円
9	牛店雑談 安愚樂鍋用語索引	"	1,500円
10	方言談話資料(1) —山形・群馬・長野—		

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究 第2集	"	750円
3	ことばの研究 第3集	"	品切れ
4	ことばの研究 第4集	"	1,300円
5	ことばの研究 第5集	"	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	16	昭和39年度	品切れ
2	昭和25年度	"	17	昭和40年度	250円
3	昭和26年度	160円	18	昭和41年度	300円
4	昭和27年度	160円	19	昭和42年度	300円
5	昭和28年度	品切れ	20	昭和43年度	品切れ
6	昭和29年度	200円	21	昭和44年度	"
7	昭和30年度	品切れ	22	昭和45年度	400円
8	昭和31年度	"	23	昭和46年度	450円
9	昭和32年度	"	24	昭和47年度	450円
10	昭和33年度	"	25	昭和48年度	品切れ
11	昭和34年度	"	26	昭和49年度	600円
12	昭和35年度	350円	27	昭和50年度	700円
13	昭和36年度	160円	28	昭和51年度	
14	昭和37年度	220円	29	昭和52年度	
15	昭和38年度	250円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和33年版	品切れ
昭和30年版	"	昭和34年版	"
昭和31年版	"	昭和35年版	"
昭和32年版	"	昭和36年版	800円

昭和 37 年 版	品切れ	昭和 46 年 版	2,000円
昭和 38 年 版	"	昭和 47 年 版	2,200円
昭和 39 年 版	980円	昭和 48 年 版	2,700円
昭和 40 年 版	1,100円	昭和 49 年 版	3,800円
昭和 41 年 版	1,100円	昭和 50 年 版	3,800円
昭和 42 年 版	1,100円	昭和 51 年 版	4,000円
昭和 43 年 版	品切れ	昭和 52 年 版	4,500円
昭和 44 年 版	1,500円	昭和 53 年 版	4,600円
昭和 45 年 版	1,500円		

日本語教育教材

1 日本語と日本語教育	国立国語研究所文化庁共編	大蔵省印刷局刊	650円
——発音・表現編——			
2 日本語と日本語教育	——文字・表現編——	"	850円

3 日本語の文法(上)	——日本語教育指導参考書4——	"	"
-------------	-----------------	---	---

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所日本新聞協会共編	秀英出版刊	280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会共著	金沢書店刊	品切れ

日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

卷	題名	プリント価格
第1巻	これはかえるです——「こそあど」+「は～です」——	30,000円
第2巻	さいふはどこにありますか ——「こそあど」+「が～ある」——	"
第3巻	やさくないです、たかいです ——形容詞とその活用導入——	"
第4巻	なにをしましたか ——動 詞——	"
第5巻	しづかなこうえんで ——形容動詞——	"
第6巻	さあ、かぞえましょう ——助 数 詞——	"
第7巻	うつくしいさらになりました ——「なる」「する」——	"
第8巻	きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——	"
第9巻	かまくらをあるきます ——移動の表現——	"
第10巻	おかねをとられました ——受身の表現1——	"

第11巻 どちらが好きですか ——比較・程度の表現—— //

第12巻 もみじがとてもきれいでした ——「です」「でした」「でしょう」—— //

第13巻 きょうはあめがふっています ——「して」「している」「していた」—— //

(第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画・VTR価格 1/2インチオープンリール21,000円、3/4インチカセット 20,000円)

昭和53年10月

国 立 国 語 研 究 所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14
電話東京(900)3111(代表)

U D C 0 1 6 : 8 0 9 . 5 6

N D C 0 2 8 . 8 1

**THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
THIRTY YEARS OF PROGRESS**

— A Guide to Publications —

1 9 7 8

**THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 Nisigaoka, Kita-ku, Tokyo**